

ながら而も哲學者の外衣 (Pallium) といはんよりは、寧ろ異教大學の博士服を纏うたのである。セルススやボルファイリの如き博學な教授達は、宗教思想のこの最近の發達に冷靜な興味を感じてキリスト教聖典を研究し始め、精練された批評家の鋭敏さを以て、舊約全書中の科學的不妥當と新約全書中の矛盾とを指摘した。教會と講堂とが漸次結合することを承認し、出来ることならその結合を利用することが必要であつた。従つて問答示教教授は、他の大抵の社會に於ては依然僧正や僧侶によつて非組織的方法で與へられたが、アレキサンドリアに於ては第一世紀の中葉頃正則の制度に發達した。

「これが有名なる問答示教學校である。それは依然教會に入ることを欲するものに教授を施したのであるが、このツマらない仕事に更に高等な、より大望な役目が加はつた。(註四)それは一部分は傳道所であり、一部分は普通の大學に偏したところの宗派學校とも看做すべきものであつた。併しその目的に適する建物はな

かつた。教師は生徒を自分の家に入れた。オリヂェンも屢々夜遅くまで自分の學級を教へたり、或は個人的忠告や教授を與へた。生徒は男女老幼を問はなかつた。或者は洗禮を受ける準備中の改宗者であり、或者は光明を求むる偶像崇拜者であり、或者は聖職のために若くは理解力修養のために讀書するキリスト教徒であつた。けれどもまだ、一世紀後に發生したやうな整頓せる組織もなければ、入門者の確然なる分類もなかつた。教師は生徒の事情や自己の才能に應じて、勝手次第に教授をなした。併しアレキサンドリアで行はれた一般課程は、幸にも極めて精確に十分詳細に知ることが出来る。あまり才能のないものは、適當な註釋と説明とを以て信條の事實を教へられた。他のものは、オリヂェンの語るところによると、辯證論的に教へられた。このことに就ては、オリヂェンの弟子のうち最も秀で最も愛せられたグレゴリイ・タウマツルグスによつて説明せられる。即ち最初生徒の推理力及び精確な觀察力は、幾何學、生理學、(註五) 天文學等を含める科

學的研究の全課程によつて強められる。科學の次に哲學がある。神學的詩人及び「無神論の快樂派」を除いた凡ての哲學者の作品は講讀せられた。教師の目的は一部分確かに論辯することであつた。彼は人類のあらゆる體系の矛盾と不完全とを注視することによつて、天啓の必要を證明せんと努め、或はプラトーンとアリストテレスとに與へられた部分的光明は、ただ天よりの黎明の前兆に過ぎないことを指示せんと力めた。けれどもクレメントやオリヂェンのギリシア思想に對する態度は、決して無智無價値な意味での論辯ではなかつた。彼等は寛容な欽仰を以て、ギリシア學派の偉大な教師達を尊敬し、またその同じ精神を弟子達に注入した。

『哲學は倫理學に於て究極に達し、ここに於て本當の辯證論的訓練が始まつた。生徒はあらゆる道德の根柢にある善若くは惡、正義若くは法律といふ語のうちの一つの定義を求められ、その生徒の定義が質問と應答との形式によつて行はれる緻密なる討論の論題となつた。かかる熱心な組織的對話を行ふうちに、あらゆる

偏見が暴露せられ、あらゆる混亂が解決せられ、あらゆる誤謬が論駁せられ、無智の耻辱が強められ、眞理の愛好心が燃やされた。ここまでの點では、その行き方は異教學校に於て知られてゐたものと根本的に相違してゐなかつた。併しキリスト教學校の特色はこの點から現れて來る。その特色といふのは、徳が單に思索に對してのみならず、行爲に對する問題としていひ現され、その堅實と力とに於て——教師の同情と人を引きつける人格的魅力とに於て、就中、他の一切の思想問題の歸着點として取扱はれる神學に於て、發見されるのである。』

吾々が特に注意せねばならぬのは、以上の引用文の最後の句である。キリスト教學校が異教學校と異なるところは、前者に於ては教育は凡て、永久的救濟の手段として、神學と宗教との周圍を回轉するといふ事實であつた。ギリシア人は現世のために教育をなし、キリスト教徒は來世のために教育をした。キリスト教教育に於ては、イエスの國民的神學が主要位置を占めたのであるが、併しギリシアの

學問によつて合理化され、従つて普遍化された。東洋思想がギリシア思想に對して勝利を得、理性が信仰の小間使となつた。この事實は幾ら強く述べても差支ない。何となれば、それは超自然が主役を演じて、科學と自然とが奴隸となつた中世紀全體の教育に對する鍵關を供するからである。

けれどもギリシア世界のキリスト教學校に於て、東洋思想がギリシア思想に對し勝利を得たとはいへ、ギリシア思想と科學とが決して輕視されたのではない。哲學的キリスト教神學の建設者たるクレメントやオリヂェンの如き偉大な人々は、それ等を非常に尊重した。否後者の如きは、眞の精神的キリスト教はギリシア思想 (paganism) の抽象的形式に於て捕捉されるもの、新約全書の歴史的キリスト教及びキリスト自身は、神性が肉體 (flesh) のうちに現るべき自然人に對する讓歩に過ぎないとすら主張した。かくして彼は、その師にして新プラトニ主義の建設者たるアンモニウスや弟子仲間のプロチヌス (註六) のなしたやうに、危く

もキリスト教の歴史的要素を殆どなくしようとした。(註七) もし西方のキリスト教若くはローマのキリスト教の影響がなかつたならば、ギリシア世界のキリスト教は、ギリシア思想が主位を占めてゐる新プラトニ主義の一種となつたかも知れぬといふのは過言ではない。併しこれに就ては、更に次章で述べよう。

(註一) 初期に於てはこれ等の語が區別されなかつた。

(註二) パンテイモスはストア派から歸依した博學の人であつた。

(註三) 新プラトニ主義の建設者にして、オリヂェンとプロチヌス兩人の師であつた。彼はサツカスといふ異名を有した。

(註四) 「同種の學校はアンチオキ、アテネ、エデッサ、ニシピスに存した」。

(註五) 勿論それは物理學即ち自然哲學である。

(註六) 新プラトニ主義は、マネス教及び陰陽教と同じく、救世主觀若くは贖罪の形式である。

(註七) 彼れの二重のキリスト教は、教會によつて非難された。

第四章 教父的教育

神、救世主、神聖の諸觀念は、元來壓迫放されたユダヤ人の間に、彼等がその本國と政治的權力とを恢復することに關聯して發生したのであるが、それがキリスト教徒の間に於て、墮落したる人間が天國に於て神に復歸するといふ思想に變化し、(註一) その思想がギリシア思想との接觸によつて哲學的表現を得た。かくして教父の教義なるものが發生したが、その教義はその實體と權威とをユダヤ教から得、その普遍的形式と形而上學的内容とをギリシア思想から採つた。(註二) ギリシア語とギリシア思想との行はれる地方では、ギリシアの哲學的要素が絶えずユダヤ的要素を覆へして純粹に合理的な宗教(ノスチク教)たらしめんとした。然るに他の地方、殊にラテン語の行はれる地方では、全く事情を異にした。エルサレムの陥落後(紀元七〇年)ユダヤ的キリスト教、(註三) 即ち非ギリシア的

キリスト教の中心はローマであつた。勢力あるローマ社會に於て、ローマ社會に依屬せる多數の社會に於て、ユダヤ的、傳統的、非哲學的要素は牢乎として優勢を保ち、ギリシア的要素を拒絶するに最善を竭した。これは「使徒の信條」——元來はローマ社會の洗禮の信條であつた——によつて明かに示されてゐる。それはギリシア思想や形而上學的思想の痕跡を含んでゐない。併しカトリック的信仰若くは宇宙的信仰のためにギリシア思想と細密とに充ちたニケア信條を採用したときですら、長い間ギリシア思想をして勢力を得しめず、忠實に東洋思想と天啓とを保有した。(註四) ローマ社會の勢力が廣く深くなり、ローマの僧正が權威を得ると比例して、ユダヤの傳統的要素が優勢となり、ギリシアのノスチク教が排斥された。約言すれば信仰が科學の地位を奪ひ、超自然界が自然界の地位を取つたのである。かかる状態であつたから科學と知識とは勿論衰微して、終には實際消滅し、その跡には信仰の世界が残つたけれども、この信仰は科學と分離しては、

常に甚だしい迷信に墮落するものである。ラテンの教父はギリシアの教父と相違して、殆ど最初から異教の知識に嫌悪と反対とを表明した。テルテリアン（一六〇—二四〇年？）は神を汚がすものとしてそれを抑止し、アウガスチン（三五四—四三〇年）は嘗て真正の學者であつたが、その改宗後未練なしに異教の知識を捨てて、『天國を擔ふものは無教育者である』と宣言した。ゼローム（三四〇—四二〇年）は時々婦人のために、異教詩人の研究を薦めたけれども、或る機會に異教詩人の作物の如きは單に悪魔の食物に過ぎないといつた。さうして彼は、女子教育の目的は、彼がベツレエムの修道院に於て管理した如き最も嚴格な秩序の尼に對してのみ適するものである。ラテン教父のこの態度は、次の事柄を想起すれば容易に理解される。即ち（一）異教の知識は、教會が教化せんとしてゐる超世俗的精神生活とは全く矛盾せるところの世俗的市民生活でふ異教の理想と密接に結合してゐた。（二）當時に於ては異教の知識は、常に形式的のものに過ぎ

ず、また科學的内容を缺くと共に知識的刺戟を與ふることが不可能であつて、無味乾燥な常規に陥り、饒舌にして詩作をなす術學者を作つて、道德的熱心も眞理の愛好心も或は文學的趣味もなかつた。異教の學問は、キリスト教の超自然主義が亡びる以前に、空虚のために死滅した。（註五）ローマの貴族の後裔であるセント・ベネディクト（四八〇—五四三年？）の「教團規則」は、既に未開のラテン語で書かれ、また彼れの傳記作者たるグレゴリー大帝（六〇四年死）は、文法（文學）を教授したとして僧正を譴責し、聖語は文法からは獨立してゐるを宣言した。彼はいふ、『わが兄弟よ、予は、君が或る人々に文法を教ふることを正當と考へたといふことを知るに及んで、苦痛と羞恥との感なきを得ない。俗人ですら無知であらねばならぬことを、僧正ともあらうものが取扱ふといふことが、如何に悲しく恐ろしきことであるかを知れ』と。

併しキリスト教は、打破された異教の知識を極力蔑視したけれども、ほんの僅

かでも、或種の知的教化なくしてよく存在することは出来なかつた。かくして幾時代も、教育の傳統を保存せんと努力が、特に青年時代文法や修辭學の古い學校に出席したる改宗者によつて遂行された。マルチアヌス・カペラといふアフリカの修辭學者で、多分アウガスチンと同時代の人が、一種の教育の百科辭典を書いたが、それは珍奇な著書で、『マーキュリーと言語學との婚姻』(The Nuptials of Mercury and Philology) と題するものである。本書は、當時ローマに始めて現れたところの「自由七科目」の教科書として數百年間も用ゐられた。この憐れな要略が人氣を呼んだといふことは、第五世紀以後數世紀の學問の状態に對して悲惨な光を投げ與へる。「ローマ人の最後」であるボエシウス(四七〇—五二四年?)は、ギリシア語やその他の著書を翻譯して、その國人に眞面目な研究を極力勧めた。(註六) セント・ベネディクトは、その「規則」に於て毎日或る時間を限つて讀書する義務を僧侶に課した。テオドリクスの寵愛人たるカッシオドルス(四八〇

—五七五年)は、その生涯の後の三十年間を主として教育寶鑑の編纂に従事したが、その多くは今日現存してゐる。六三六年頃死んだセビユのイシドオルも全く同じやうなことをした。今日まで傳はつてゐる彼れの多くの著書のうち最も重要であるのは、當時の一切の學問を要略したる百科辭典である所の「Originum sive Etymologiarum Libri XX」である。最後にブリテンに於ては、副僧正ベード(六七三—七三五)は、來るべきよりよき日を望んで、世界に現存する如何なる學問をも國人のために救はんとして全力を盡した。(註七)

けれども凡てのかかる努力にも拘らず、迷信と無知との密雲が、嘗てローマ帝國でありしもの、及び今日ローマ、カトリック教會の支配でありしものの上に、益々重くふりかかつた。最も深い暗黒が第八世紀に於て到達し、そのときには學問は殆ど全くヨオロッパ大陸から消滅し、最後の避難所と思はるるものを極西の地なるイギリス諸島、殊にアイルランドと、極東の地シリアとに得たが、これ等

の地方に於てはカトリック教の影響はあまりなく、或は全くなかつた。これ等の遠い地方より、異つた徑路により異つた方法によつて、適當の時代に古い場所に還つて來た。第八世紀の後年アイルランド及びイングランドの僧侶によつて起された運動は、三四世紀後、シリアの學校に於て先づ起り、次で勝利者たるイスラム教の使徒によつてヨオロッパに輸入されたる運動と會した。この運動とその結果を述ぶる以前、マホメッド教の教育を十分考察するのが順序であらう。

けれども最初に一言警告の必要がある。教會は教育を等閑に附し、迷信を熾んならしめたといつて教會を痛く批難する人々は、次の二つの事柄を想起しなければならぬ。即ち (一) 北方の未開人の侵入は、教會に對する批難の多くに責を負ふべきものであるといふこと、(二) 古代の教育は、教會が世界的人道主義のために打破せねばならぬ主要目的の一つであつた偏狹頑迷なローマの國民主義と絶望的に結合してゐたといふことこれである。吾々はいはゆる「暗黒時代」に對して

思ふ存分批難を加へ得る——さうしてそれには相當の理由がある——けれども古代に於て考へられた世界的人類同胞の觀念が現實界に生れ出たといふことは、その暗黒時代の庇護の下にあつたからであることを忘れてはならない。この同胞の市民権は最初、天國に於て神父と共にあつたと想像された。この想像は現世のことに對して悲しき結果を齎したことは事實であるが、併しやがて適當なる時期に、學問の復活と理性の復興とにつれて、この同胞の市民権が現世に降つて來たものと考へられて、その結果が近代世界の出現となつたのである。

(註一)「わが天國はこの世にあらず」といつた救世主は、この世の天國を望んでゐた純正のユダヤ人には勿論容認されなかつた。

(註二)ローマは組織と普及力とを提供した。

(註三)ここではエビオニズム (Ebionism) 即ち純粹のユダヤ的キリスト教を意味するのではない。

それは紀元七十年以前に沙漠のペトラ地方に繰かに行はれてゐた。

(註四)これは、ギリシア人とその徒輩に全く背反する教義であるところの「肉體」の復活なる教義を維

持するに成功したといふ事實によつて明かに示されてゐる。

(註五)アポリナリス・シドニウス (Sidonius 431-485?) はアウペリニユの高貴の僧正にして、同階級の他の人々と等しく、異教の知識を非常に誇り、文學的誇示を好む人であつたが、當時の學問の衰頹を記して「青年は勉強をせず、教師には生徒なく、學問は憔悴死滅してゐる」といつた。

(註六)ボエシウスは、異教主義の「De Consolatione Philosophiae」なる著者であるにも拘らず、キリスト教徒であつたことは、今日殆ど疑ひがない。

(註七)ウエーアマウスの僧院に於て、ペード (Pete) は「當時ヨオロッパの他のところでは見られないやうな利益を享受した。それは西方ヨオロッパに存するあらゆる學問の源泉に完全に接近せるものである。アイルランドの學問、ローマの學問、ガリカンの學問、カンターベリーの學問等が同時に學び得られるところはそこを除いてはどこにもなかつた。メネゲットがローマ及びウキーンで買つた數多の書籍もそこにあつた。大陸の僧院及びアイルランドの宣教師から傳へられた訓練主義もそこにあつた。」スタツア監督が「Dict. of Christ Biog.」の中に書いたペード論より。

第五章 アラビヤ人の教育

紀元六百年までに、キリスト教に於ける東洋的要素が勝利を占めて、ローマ教會の支配圏から學問と教育とを殆ど驅逐して丁ひ、陰鬱にして無批判な信仰を起させたが、その信仰はますます深く迷信の渦中に陥つた。教化の残つてゐたところはローマ帝國以外の地で、極西に於てはアイルランド、東方に於てはシリヤであつた。アイルランドの學問に就ては後に述べよう。

シリヤは、アンチオク、エデッサ、ハラシ、ニシビス等の都市を有してゐたが、他の東方諸國と等しく、アレキサンダー時代以後直ちにギリシア文化と學問との影響に服した。教養あるシリヤ人は、ギリシア哲學、殊にプラトーン主義に對して著しい興味を示し、自分達の神話と結合させて雜種空幻な信仰となしたが、これは後に至つてキリスト教神秘主義の根源となつた。(註一)ローマ帝國教會の偏狭な

狂信が學問と自由思想とをますます壓迫したるキリスト教時代に於ては、ギリシアの學者や思想家は、その司法權外に出でて、シリヤに遁れた。そのエデッサやニシピス（註二）の學校に於ては學問がなほ行はれてゐたが、彼等の助力を得てその學問は更に著しくなつた。殊にこれは第五世紀と第六世紀とのことであつた。ネストリウス竝にアンチオク（シリヤ）學派の神學が教會から非難されたるとき（紀元四三一年）、その學派の多くの人々はニシピスに逃げて行き、バルスマスの指導の下に、シリヤの教會をカトリック教會から分裂させてその市の學校に新鮮な意義を與へた。『ニシピスの學校に於ては教會は、幾世紀間も高等教育と、それと共に重要な社會的、政治的地位とを保障し得たる制度を有してゐた。以前の文學は翻譯物ばかりであつたが、第五世紀の中葉以後、それにギリシアの古哲殊にアリストテレエスの著作に屬する哲學上、科學上及び醫學上の論文が附加はつた。（註三）シリヤの衣裝を纏へるこれ等のギリシア知識と學問とは、キリスト

教國のこれ等の國境に第二の故郷を發見した。（註四）

かくの如く第五世紀から第九世紀に至るまで、學問の主なる場所はシリヤの都市にあつたのである。けれどもそれがヨオロツバの古代文化國に再興し得るまでには、ローマ教會をして「獨斷的情眼」より覺醒せしめ得る新しい社會的、宗教的運動を要した。さうしてかかる運動がイスラム教に外ならなかつたのである。

イスラム教の創始者マホメッド（五七〇—六三二年）は、青年のときアラビヤやシリヤを旅行して、ユダヤ人、エビオニ派及びネストリウス派のキリスト信者、並にサビアン教徒（洗禮教徒）と接したが、これ等は凡て「書物の人民」であつた。即ち上帝の權威ある默示と信ぜられた或る記録を有し、その前に拜禮するところの人民であつた。然るに書物もなく、上帝もなく、絶えず戦争のみしてゐるイスラエル同胞を結合させて、彼等に力を與ふるために要するものは、書物と上帝とであることをマホメッド自身強く信ずるに至つて、彼は多少心に期するとこ

るあつて、書物と上帝との備へをなすべく努め始めた。彼は、熱心な、幾らかヒステリー的な性質を有つてゐたので、「世界の上帝」の暗示は既に彼に授けられたと容易に信ずるに至つた。(註五) その結果がコーラン (Qur'an) といふ奇妙な、混沌とした、單調な書物で、ユダヤ教的、キリスト教的、サビアン教的及びアラビア的要素から出来てをり、就中ユダヤ的要素を強く帯びてゐる。

マホメッドの努力は、比びなき成功であつた。自信ある豫言者の熱心を以て諄々として説かれ、往々にして劍に訴へてまで説かれたる彼れの厳格な宿命論的神教は、丁度アラビア人の欲求したところのものである。ヒジュラ (六二二年) (註六) のときより彼れの死 (六三二年) に至る間、アラビアの全部はイスラム教に改宗し、一旗の下に世界を征服せんと進軍準備をした。

イスラム教が無反省な非哲學的アラビア人に限らるる間は、即ち單なる信仰に止まるうちは、知識によつて支持される要なく、また特殊の教育も要らない。

コーランの記號(詩句)は口傳となり、記憶に任せられたが、この中に含まれざる眞理は凡て空なるものであつた。文字は不必要であつた。のみならずマホメッド自身讀書が不可能であつたことは殆ど事實らしい。けれどもイスラム教が、劍によつてアラビアの領土を越えて古代文化の地、シリヤ(六三五年)、バビロニヤ(六三七年)、アッシリヤ(六四〇年)、イヂプト(六四二年)等に傳へられたときには、事情が變つてゐた。大抵キリスト教徒であるそれ等の地方の人民によつてそれが受容れらるることを望む前に、キリスト教の如く、ギリシア思想の普遍的形式を身に纏ひ理性によつて身を固めねばならなかつた。これは或る程度までダマスクスに於てなされ、後に至つて更に多くイラン地方の都市——バグダッド、バストラ、クファ等に於てなされた。これ等の地方では、ギリシアの哲學者、(註七) 醫者及び數學家の著作が、一部はシリヤ語から、(註八) 一部は直接ギリシア語からアラビア語に翻譯された。さうしてシリヤの學校に匹敵し、若くはそれ以上

の學校が建設され、偉大な醫者、數學家及び哲學者が出現し始めた。その中で著名なるものは、アル・キンディ(八〇〇—八七〇年)アル・ファレイバイ(トルコ人、八八〇—九五〇年頃)、イブン・シナ(九八〇—一〇三七年)である。かくの如くして第九世紀の中葉頃から第十二世紀の初期までの間に、世界の學問の大中心はイラク地方のマホメット敎學校であつた。これ等の學校の指導者の、イسلام敎教育を合理化せんとする努力は、超自然的權威を覆へし、それに代ふるに、長い間シリヤのキリスト敎徒間に行はれてゐたやうな、(註九) 一種のノスチク敎神秘主義を以てするほどの強い傾向を有つてゐた。これは當然、狂信的アラビヤ人の猜疑と反對とを招き、遂にその運動を阻止せられて了つた。かくして知識と理性とは西方の地、スペインのマホメット敎徒の都市へ遷さるるの外なかつた。このことの起る以前、イラク地の學者達が作成した教育の方針は、完全徹底といふ點に於て殆ど比類なきものであつた。これは「誠實の兄弟」(Ikhwān us Saifa)と稱す

る、熱心にして高潔なる少數者よりなる團體のお蔭であつて、その目的とするところは、眞理と正義とのために、イسلام敎の宿命論及び迷信と闘ひ、當時の科學の許し得る限りの完全な教育を授け、これに基いて、ピタゴラス型の完全にして「眞實」なる社會的秩序を教ふるにあつた。換言すれば、彼等はコーランの烈しい淺薄な迷信を除き去つて、これを當時東方諸國に一般に行はれてゐた新プラトニ派的アリストテレエス主義に變ぜしむることによつて無害のものたらしめんとしたのである。この體系は、敎義の一部をアリストテレエスの眞正の著作より得、他の一部を彼れの名を帯びてはゐるが、實際は新プラトニ派の人々によつて作られ、さうして彼れらの思想とは非常に異なる思想、即ち事實上、精神法に支配される進化論的アガシズムの全體系を含むところの偽作論文より採つた。これ等の論文中の主要なるものは、いはゆる「アリストテレエスの神學」(註十)であつて、これは明かにポルフィリーが第三世紀末葉のシリヤ國民のためにシリヤ語で作られ、さう

して哲學書の中で最も早くアラビヤ語に翻譯されたる、プロチヌスの『Enneads』の、最後の三章の拔萃である。その内容はアラビヤ思想を始めとし後世のユダヤ思想並にキリスト教思想のその後の全體の傾向を決定したのである。(註十一)

この體系は、紀元千年頃に書かれたる筈の百科辭典の中に述べられてゐる。その百科辭典はカルカタニに於て一八一二年始めて出版せられ、一八四二年四つの大冊となつて再版せられた。(註十二)本書は五十一篇に分れ、それが更に

- (一)階梯と論理學、十三篇
- (二)自然科學、十七篇
- (三)合理的世界精神、十篇

(四)默示、十一篇

の四章目に纏められてゐる。この排列に於ては、形式的抽象的のものから、現實的具象的のものにのぼつてゐる。「默示」の緒論は、ギリシアの凡ての分類とは著

しく異つてゐる。詳論すれば次の如くである。

(註一)後期アリストテレエス派の「ギリシア」哲學者の多數は、シリヤ人であつた。殊に紀元後に於てさうであつた。

(註二)「東方シリヤ」ペルシヤ教會の知識の中心地、即ちエデッサの學校はニシピスに分校を有し、アンチオクと密接なる關係を有する。けれどもこの地方に於て、今や最も生氣あるシリヤ語の文學的活動が起つて來た。幾分古い聖書の翻譯はあつたが、それにギリシアの宗教上の論文の翻譯並に原書が附加へられた。このシリヤ文學の創始者は、三七九年に死んだメソボタミア人のエフレムである。——ミユラーの『Kirchengeschichte』第一卷、第一九六頁より。

(註三)ネストリヤ神學校及びアンチオク神學校は、アリストテレエス主義に深く染込んでゐた。ネストリヤ學派の「異教」といふことは、多くそれがためであつた。

(註四)ミユラーの『Kirchengeschichte』第一卷、第二七八頁以下。

(註五)これ等の中の最も早いものは、紀元六一一年から起つてゐて、その章の冒頭に置かれてゐる。それは彼れの主なる意圖を明瞭に示してゐる。

(註六)メツカからメザナへの逃亡(譯者)

(註七)殊にシリヤ人の好むアリストテレエスの著作がさうである。彼はかくしてアラビヤ人にとつては單に「哲學者」に通つてゐた。

(註八)主なる翻譯者はネストリヤ學派のキリスト信者及びハラニヤの異教徒であつたらしい。

(註九)神秘主義の發源地はシリヤである。

(註十)ドイツ譯は一八八三年ライプツヒに於てディテリチ教授によつてなされた。

(註十一)この項と次の項との大部分は、"The International Journal of Ethics", July, 1898" に於ける予の論文、"The Brothers of Sincerity" の省略である。

(註十二)それは大部分ディテリチ教授によつてドイツ語に翻譯され、各巻に分冊されて出版された。

(A) 階梯と論理學

第一篇は數、その本質及び複合を論じ、精神に於ける數の形式が、物質に於ける數の形式に一致すること、及び數の學說があらゆる科學と知識との起原であること(ピタゴラス主義)を示してゐる。第二篇は幾何學を論じ、精神をして物質を離れたる純粹形式を把握せしめようとしてゐる(プラトニ主義)。第三篇は天文學を論じて、星界の構造を示してゐる。その目的は、精神を喚起して天體の間にその

本來の住所を望ましむることである。實にこれは精神的高昇と、それ自身宇宙の中心と考へられたる地球の中心からの距離とを同一視する古代の思想であつて、中世紀全體に普く行はれ、ダンテの「神曲」に於て模範的に表現されてゐるものである。第四篇は地理學を論じ、地球が球であることを示し、さうして精神がその眞の住所からこの世界に降下したる理由を擧げてゐる。第五篇は音樂を論じ、音樂の拍子が精神にとつて多くの醫藥であることは、恰も種々の藥品が肉體に對すると等しいといふこと、及び回轉しつつある球體が相互に磨擦することによつて音調旋律を生ずるといふことを示してゐる。それは精神を靈感せしめて諧調の球體から高昇せしめ、豫言者、殉教者及び神祕的先見者の精神に會せしむることを目的とする。第六篇は幾何學的數若くは量、即ち均齊と美學(美術)とに關する。第七篇は種々の文藝と科學とに關係し、精神を世界の單一概念に導く(科學の百科辭典)。第八篇は工藝を論じてゐる。その論旨の中に、精神に對して、工藝

の創造者としてのそれ自身の本質と、創造精神の單なる道具に過ぎない胴體と肢體との關係を顯してゐる（藝術の百科辭典）。第九篇は精神をして本來の氣分を穫得せしめ、完全なる性格を發達せしめる目的を以て、氣質と性格とを檢してゐる。（論理學）。これ等九篇の論文は、科學の範圍若くは問題の鳥瞰圖を示してゐる。次の四篇は論理學、即ち科學の形式を論じてゐる。第十篇は類、種、相違、本質、偶然の五つの「語」に就てのボルフィリーの諸論（*Enquiry*）を論じてゐる。第十一篇はアリストテレスの十範疇を論じてゐる。第十二篇は彼れの命題（*De Interpretatione*）を、第三篇は彼れの分析學（三段論法と科學的證明法）を論じてゐる。その目的は精神をしてそれ自身の形式と能力とを知らしむるにある。

(B) 自然科學

第十四篇（一）は、物質、形式、空間、時間及び運動を論じ、アリストテレス

の物理學に基いてゐる。第十五篇（二）は物理的世界の一般形式を専ら取扱つてゐる。この篇には、第一章第三篇に於けるが如く、「神の玉座」は最も遠い球界に存するといふ、宇宙に關する中世紀思想が見られる。（註一）それは宇宙に於ける一切の活動は、神に従つて活動する宇宙精神に基くといふことを示してゐる。第十六篇（三）は創生と衰頽、即ち四要素（地水火風）のことと、それ等が星並に回轉する球體の影響を受けて相互に變形することとを論じてゐる（これは中世紀には化學の代用となつた）。第十七篇（四）は氣象學を論じ、アリストテレスの氣象學（*Meteorologica*）に基いてゐる。第十八篇（五）は鑛物學を論じ、種々の鑛物を列擧してその本原を説明せんとしてゐる。宇宙精神の最初の所産が地上界であること、並にこの地上界に於て局部的精神（凡ての個々の精神は宇宙精神の部分である）がその生涯を始めるといふことを示すのがこの篇の目的である。地球の中心に於ける鑛物に出發して、植物と動物とを通過して人間に進化し、それより天使として地上界を

高昇して神と融合するのである。ここにアラビア人の進化論が見られる。それは、進化の動因としての「生存競争」を認めない點を除けば、ダーウキンの進化論とあまり違はない。この進化論は「生存競争」の代りに、萬物はその本原に還らんとする欲求を有することを假定する。さうしてこの論文と次の論文とに於て、アリストテレエスの神學が主に述べられてゐる(進化論)。第十九篇(六)は自然の本質、及び自然が四要素に影響して、自然の三界を産出する方法を論じてゐる。その目的は、宇宙精神の活動及びそれと球體知性との關係を示すにある。第二十篇(七)は植物學を論じ、種々の植物が如何にして植物精神によつて充されてゐるか、植物が如何にして發生し成長するか、その效用は何であるか等を示してゐる。さうして礦物界と植物界と動物界とに間隙がないといふ事實を高調してゐる。第二十一篇(八)は主にアリストテレエスに基いて動物學を論じてゐる。最高の動物は人間であつて、人間は動物と天使との連鎖をなし、地獄と天國との橋を架するもので

ある。(註二) 次の九論文は、肉體と感覺とを有する生物としての人間を論じてゐる。第二十二篇(九)は人間の肉體の構造、即ち解剖學を研究し、さうして人間は小宇宙であること、地上に於ける神の代表者たる精神を國王に戴く一國であること、神自身の手によつて書かれたる書物であることを示してゐる。人間は自身を知ることによつて、神を知るのである。第二十三篇(十)は知覺と知覺されたるものとを取扱ひ、認識に就ての生理學説を凡て包容してゐる。即ち感官は如何にして知覺し、知覺されたるものを如何にして腦の前方部に機能をもつて想像の能力に傳へるかを示してゐる。またそれが腦の中央部にある判斷の能力に轉じ、そこに於て再び區別せられ、眞の本質が把握せられる。それより再び腦の後方に存する記憶の能力に移り、そこに於て後に想起によつて意識に喚び起さるるのを待つてゐる。それより舌頭に存する發言の能力に進み、それによつて語に翻譯され、もしそれが精神より發出されて意味を有すると、意義ある言葉となる。それよ

り更に手といふ器官を有する行爲の能力に進む。これ等のものが書物に記録されて將來に保存される。かくして種族の經驗が、文學の中に蓄積保存されるのである。第二十四篇(十一)は生殖、受胎、誕生、精神と胎兒との結合、及び兒童の氣質と性格とに及ぼす星の影響を論じてゐる。ここに、人間の性格に影響を及ぼす占星術の全體系が存する。第二十五篇(十二)は大宇宙と同形にして、天使、精靈、惡魔、及び惡魔の動物的精神と同等なる小宇宙としての人間を論じ、さうして人間が自身のうちに有形世界と精神世界、及び一切の存在物の意味を縮圖として有することを示してゐる。第二十六篇(十三)は部分的精神を取扱ひ、それが如何にして人體を通して成長するか、また死の前後如何にして天使となるかを示してゐる。第二十七篇(十四)は人間の知識の限界を研究し、人間がその創造者の知識に達し得ることを示してゐる。第二十八篇(十五)は生命と死、及びその等の意義を論じ、さうして理性的精神が、精神的誕生として歓迎されるべき死の到るまで、何

故に肉體と結合するかの理由を明かにしてゐる。第二十九篇(十六)は精神上並に肉體上の苦痛と快樂との性質、及びこれ等が肉體を離れたる精神によつて如何にして感ぜらるるかを考察してゐる。第三十篇(十七)は言語の性質と作用とを取扱ひ、如何にして種々の言語が生ずるかを明かにしてゐる。

かくの如く感覺的性質に就ての記述が與へられたから、吾々は次に、理性の表現及び倫理的生活の規範としての、該體系の考察に當らねばならぬ。目に見ゆる世界の組織を、善と理性及び靈魂の表示となすことによつて、それを倫理的たらしむることは、新プラトニ主義者の時代以來の凡ての中世紀的思想の特色である。その宇宙は神からの發出であり、さうして神から退くことによつて、多數に分れるが故に、強度に於て減少する。如何なるものも神に近ければ近いほどその存在の程度はより高い。神(一)は實在、完成、完全以上である。彼より(二)實在、完成、完全の理性が發出し、理性を通じて(三)實在、完成の精神が發出し、

この兩者を通じて（四）單に實在する第一物質が發出する。神は「唯一者、純粹者」であつて、統一が多數に對すると同じ關係で宇宙に對立してゐる。理性は二元性に相應しつつ、實在する神から發出するが故に矢張り實在する。神が絶えずその上に善をありあまるほど注ぐが故にそれは實在する。その善の注ぎを受くるが故に完成し、その注ぎを精神に傳へるが故に完全となる。精神は、存在するところの理性から發出するが故に矢張り存在し、理性が神より受けた善の注ぎをその上に注ぐが故に完成する。併しそれは、その注ぎを再び第一物質に傳へることが出来ないが故に、完全とはならない。その傳へない理由は、第一物質が完全でないが故に、それを受け得られないといふのである。それゆゑ精神は、それが物質を完全ならしめ得るにあらずんば、それ自身完全になり得ないといふ地位にある。従つて精神の全努力は、物質を完全ならしむることである。神聖なる注ぎをその上に注ぐ努力に於て、物的宇宙を創造する。その物的宇宙の不完全なるこ

とは、その運動によつて示される。何となれば完全なるものは動くものでないから。この方法によつて（五）第二次的若くは三次元的物質、即ち肉體、（六）擴大された宇宙、（七）高大にして一時的なる自然、（八）四要素、（九）事物即ち所産が形造られる。これ等のものに於て結局多數の最低の深所に達したる精神は、統一作用を開始し、それによつて自身を完成し、物質を完全にす。これを復歸（マホメッドは時々復活といつた）と呼ぶ。それは正しく吾々が進化と呼び得るもので、その存在は以上の如くに説明される。精神の統一的影響の下に、物質は最初礦物となり、次は植物、それより動物となり、最後に人間となる。人間は種々の回轉せる球體を通つて、一時的のもの以上に進化して、終には現在人間に神聖なる注ぎを與へてゐる宇宙精神の平安なる天國に達する。この注ぎによつて彼は純粹にして完全圓滿なる理性に向ひ、この理性によつて彼は圓滿となり、神との直接關係に没入する。かくの如く宇宙の全過程は、神の絶対統一から物質の絶対集合に

向つて進み、さうしてこれより再び神の統一に歸るのである。世界は神から神へ歸つてゐる。(註三)

(註一)「コーラン」第二卷二五六節参照

(註二)この篇は、「魔神の王の前に於ける動物と人間との争ひ」と題する面白い物語を含んでゐる。場所は印度洋の一島である。人間から奴隷として要求されたる動物は、自身の理由を辯じ、眞に驚くべき人間の不正と残忍とを指摘する。人間はあらゆる點に於て敗北し、さうしてもし人間に不滅の事實がなかつたならば、形勢は人間に對して不利となるであらう。人間が彼等自身で終るといふ理由に基いて、魔神の王は動物に對して人間に仕ふるやうに勸めるが、併し人間に對しては動物を親切に取扱つて過勞を強ひないやうに命令する。この物語の深い人類的情感は、「誠實の兄弟」といふ高度の文化の證明を帯びてゐる。

(註三)かやうな體系に於ては、創造と滅落との區別はない。創造は滅落で、恰も復歸が贖罪であるが如くである。神は創造し、精神は贖罪する。神秘的三位一體は神理性、精神である。

(C) 理性的世界精神

第三十一篇(一)はピタゴラスに従つて理性の原理を論じ、神が創造を行ひながら、如何にして世界を、統一から取りたる數の基礎の上に配置したかを示してゐる。第三十二篇(二)は「誠實の兄弟」の見たる理性の原理を述べ、世界の起原に對する根據を與へ、一切の存在に對して間接の理由を與へてゐる。第三十三篇(三)は宇宙が知識と精神とを有する偉大、善良なる一種の人間であり、その主人に服従せる生ける世界であるといふ哲學者の言を論じてゐる。第三十四篇(四)は理性と其の目的、存在、及び精神の實體の性質を取扱つてゐる。第三十五篇(五)は星辰と球體との回轉を論じ、世界が存在するに至つたことと、再び消滅するだらうとすることを示してゐる。第三十六篇(六)は精神の愛、その性質と起原を取扱ひ、その愛の目的が、凡ての創造物が望める神であることを示してゐる。第三十七篇(七)は復歸即ち復活を論じてゐる。第三十八篇(八)は種々の運動に言及し、世界が創造者から如何にして出で來しかを明かにしてゐる。第三十九篇(九)は原因と結果

とを論じ、それ等が連続せる環をなしてゐることを示してゐる。ここに科學の起原と規則と排列とが明かにされ、宇宙が自決する全體であることを教へてゐる。第四十篇(十)は定義と限定とを取扱ひ、單一及び複合の物體の理想的本質を明かにせんとしてゐる。

(D) 神聖法即ち默示

第四十篇(一)は意見、學說、教義、宗教、豫言を論じてゐる。凡ての哲學と宗教とは精神の救済を求めてゐることを示し、さうして最下界の地獄より球體の樂園に昇りゆく道——神秘的幻影の道を指摘せんとしてゐる。第四十二篇(二)は神に到る道を取扱ひ、その道が市民的の徳と純潔の徳とを通つて、死、復活、及び永久的報酬若くは責罰といふことの沈思される理論的の徳に導かれることを示してゐる。第四十三篇(三)は「誠實の兄弟」の信仰と教訓とを示してゐる。この信仰は

個人的不滅の信仰を包含してゐる。第四十四篇(四)は多少僧侶的ではあるが、快い理性と愛とに満ちてゐた「誠實の兄弟」の生活を述べてゐる。(註一) 第四十五篇(五)はイスラム教の哲學的内容を示し、靈感と魔攻ませめとの意義を説明せんとしてゐる。第四十六篇(六)は點示の性質、豫言の状態、豫言者の資格、及び神の使の教訓を論じてゐる。その目的は、哲學と調和させるために聖典の類を如何に解釋すべきかといふことを示すにある。この篇には諷諭が多く用ゐられてゐる。第四十七篇(七)は神に對する祈願、誠實と愛とに對する要求を取扱ひ、さうして真理と善との王國は、或る生活を送つて、或る教義を弘通することを銘記し同意する人々の少數の團體を以て始まらねばならぬことを示してゐる。第四十八篇(八)は精神的存在の活動を論じ、世界に無形の活動的本質の存することを示してゐる。第四十九篇(九)は政體の種々の形式、統治者の階級、及び被治者の性質を論じてゐる。神は最高の統治者であり、現世の最上の統治者は神に最も近く立つもので

ある。第五十篇(十)は神から出でて神に歸るところの存在の秩序ある段階を論じてゐる。第五十一篇(十一)は魔法、迷魂藥、邪眼、前兆、護身符、魔除け、魔神、悪魔、天使、及びそれ等の關係と行動とを取扱つてゐる。

以上は「誠實の兄弟」の百科辭典、若くは教育上の課程である。(註二)それは全體として、證明されたる眞理とに矛盾するから、よろしく廢棄さるべきであり、その多くは全くの迷信として排斥されなければならぬ。而もなほそれは次の如き數個の理由によつて吾等の興味を惹くのである。即ち(一)それは、人間が「自然より精神に發達した」ところの、さうして實にその過程の形式をよく現したところの、文化史上に於ける長い重要時期の、最良の思想を要約してゐる。(二)それは人類の凡ての過去の中にその根源を有し、人類の凡ての將來にその枝葉を有するので、中世紀科學の完全なる構案である。(三)それは、自然と精神とを包括し、前者が後者から發源することを示してゐて、頗る廣汎なる體系である。(四)それ

は理性と默示とを調和するために全力を盡してゐる。(註三) (五)それは人間に、宇宙に於けるその位置、その起原、その運命、従つてその義務を示してゐる。(六)かくしてそれは完全なる教育を整へ、その教育を受くるものをして、合理的にして目的を有する、従つて自由なる生活を送り得させるのである。

この體系は(一)階梯、(二)物理學、(三)形而上學、(四)神學を包含するが、孰れの部分に於ても完備してゐる。經驗的科學の起る以前の凡ての體系と等しく、それは、知得せらるべきもの一切は既に知得せられたるものと假定し、さうして自身の最後のもの、即ち生活と思想とに對する絶對的規範として現すけれども、併し多くの價值を有してゐる。それは知的方面に於ては、人間は宇宙の唯一最高原理の中にその起原と目的とを有し、また存在の總額の本質的部分であることを自認するやうに人々に教へてゐる。情的方面に於ては、全宇宙は吾々よりもより大なる自我であるといふこと、また同じ精神は凡てのものの中に脈搏つてゐるが

故に、吾々が他を害することは、却て自身を害することであるといふことを感ぜしめる。かくして宇宙的愛とやさしさとは人間の生活の有力なる原理となつた。意的方面に於ては、人間をして生ける世界を神により近く高めしめ、同胞の精神を教へ清め且つ訓練することに努力せしめた。(註四)

かくの如き價值を有する體系が、何故成功しなかつたかといへば、それはその時代よりも幾代も進んでゐて、世間の方にかかる教へに對する用意がなかつたからである。明察と理性とによつて生活することは、如何なる時代にも稀なる文化の程度を意味し、さうして紀元千年頃のイラク地方に於ては確かに普通ではなかつた。かかる生活をなし得ると自信したる人々の間に、「誠實の兄弟」と同時代の人にして、あらゆる思想家中の最大の一人なるイブン・シナがゐた。彼れの生涯は何人にも模倣出来ない實例を供した。彼れの公言したる合理主義は、アラビヤ人の狂信を喚起し、さうして東方回教思想家中の最後の懷疑的神秘家(註五)

アル・ガーザリ(一〇五九—一一一一年)の作物中に表現されてゐる。彼れ以後、東方に於ては、粗大にして不誠實な物質的神秘主義に對立するはげしい、厳格な正教が、現に勝利を得てゐる如く、當時勝利を得たのであつた。さうして兩者は孰れも教育の敵であつた。第十一世紀中に於て、アラビヤ哲學書の殘存してゐたものは凡て、スペインに移され、そこに多望な哲學的運動が起つて一世紀間續いた。それ等の書の中には「誠實の兄弟」の百科辭典があり、一〇二〇—一〇三〇年頃輸入された。この書はスペインに於て單に西方のアラビヤ思想家に影響を與へたのみならず、ユダヤ思想家、さうして最後にキリスト教思想家により以上強く影響を與へた。イブン・トゥファイユ(一一八五年死)の有名なる著書 "Hayy ibn Yo Kallhan" は、依然グエーカー派には喜ばれてゐるものであるが、多く前書に思想に負ふので、またキリスト教神學者に非常な影響を與へたるユダヤ人のイブン・ガビロル(アブスブロン)の偉大なる著書 "Megor Hayyim" もさうである。この影

響は遙か後年まで続くのである。

(註一) 彼等は、學習のために、また純粹、單純及び扶助の日常生活のために、團體や集會を作つた。彼等の社會的羈絆は友情或は愛であり、彼等の生活を導くものは科學であつて、彼等はそれをあらゆる形式に於て歓迎した。彼等はその知識を四種の書、即ち(一)知識の内容と形式とに就ての書(アリストタレエスの論理學等)、(二)默示の書(モーゼの五書、福音書、讚美歌、コーラン等)、(三)物理學と人類の所産に就ての書、(四)神秘的哲學の書(主に新プラトニ主義のもの)から採つたことを公言してゐる。彼等が四階級の精神的達成の四段階を認め、この四段階に應じて四階級に分類した。即ち(一)技藝家、その徳は精神が純潔で、理解が早く、さうして表現が迅速であり、その課程は十五歳から三十歳に至る。(二)指導者、その徳は指導力、寛大、温厚、同情及び慈悲であつて、その課程は三十歳から四十歳に至る。(三)王若しくは統治者、その徳は命令する力と、禁止し壓服する力、決定する力であつて、温順を以て叛逆を鎮定する目的を有し、その課程は四十歳から五十歳に至る。(四)天使、その徳は神聖なる明察と靈感とであつて、それによつて永久と來世、及びそれに到る道の幻想を起し、「兄弟」に對して十分の權威を有し、その課程は死まで続き、そのとき天使をしろしめす神に昇る。

(註二) それは讀書、文法、詩作及び美術に於ける初歩教授を豫想した。

(註三) 此の企圖は、存在しない二元論を假定するが故に、必然的に危險に會することを示してゐる。

蓋し超理性的默示を理性に合はしめるといふのは、言葉の矛盾である。

(註四) あらゆる汎神教的體系と等しく、それは平靜と夢幻的、無意志的存在とを作り出さんとした。

(註五) アル・ガツザリと彼れの神秘主義とは、共にヘルシヤ的のものである、若くは少くともシリヤ的のものである。

第二部 中世紀教育

第一章 カロロ大帝時代

第十八世紀の闇黒の後、ヨオロッパに教育が復興したときは、それは最早ラテン人の間に於てでなくて、その征服者たるゲルマニヤ人の間に於てであつた。このゲルマニヤ人と共に、全く新しい教育が始まるのである。もし従來の教育が個人を社會的全體若くはその支配者に従はしむることを目的としたとするならば、今や教育の任務は個人を解放し、一切の制度に對して個人の參與を許すことである。けれどもこの任務を自覺するに至つたのは極めて徐々のことであつて、實際今日もなほ完全には自覺してゐない。

ゲルマニヤ人がローマの市民的帝國を壓倒し破壊したるとき、彼等自身は既に久しくローマ帝國を根本より覆へし、それに取つて代つてゐた、セミチック人化し

たる超自然的帝國、即ちキリスト教に征服された。そのキリスト教はローマの帝國的、法律的形式の相續者となつたのである。ゲルマニヤ人にとつては實にこれ以上よきものを望むことは殆ど出来なかつた。ゲルマニヤ人の感性の強い制し難き個性は、ローマ人との長い闘争に於て必要とせられた一致團結の精神とか首領に對する服従とかによつてすら殆ど變ぜられなかつたのであるが、その矯正者としてローマキリスト教の畏るべき超自然主義ほどによきものを發見し得なかつた。これは強く彼等の深い迷信的性質に訴へた。さうして假令これが彼等の個人主義を完全に征服し、大帝國建設に最も必要な政治的堅實を與ふることに成功しなかつたとはいへ、彼等をして世界に重大なる役目を演ぜしめる基となつたのである。中世史及び近世史は、ローマ人の強制的組織とゲルマニヤ人の個人主義との闘争の記録であり、今日もなほその終結を告げない。けれども教會は、強制に對するローマ人のあらゆる傾向を具備しながら、而も彼にもあらず、人民の忠

順を分裂せしめることによつて、より高度の合理的個人主義の發展に非常に貢獻した。古代世界に於ては個人は靈魂も肉體も國家に屬した。中世紀世界に於ては肉體は國家に、靈魂は教會に屬し、さうして個人が遂に國家に依立しない天地を自身のために獲得したのは教會によつてであつた。キリスト教に於ける最も非現世的な要素、即ち神秘主義は、個人的自由の大育成者であつたのである。

中世ヨオロッパに於ける學問研究の復興は、アイルランド或はスコットランドの僧侶(註二)の感化に負うてゐた。アイルランドは紀元四三二年頃ブリテン人のセント・パトリックによつてキリスト教化され、一世紀後には強固な信仰及び學問の場所となつた。古代ギリシア、ローマの學問研究の課程がこの地に於て持續されてゐる有様であつた。かくしてローマ人がブリテンから退去して、この地をその教會と學校と共にビクト人の意のままに混亂のままに任せたる時、學問はローマの鷲の飛ばない地に榮えた。従つて學問は、アイルランド人のセント・コロ

ンズ (St. Columba, Colmn, Colme) 及びアイオナ (Iona, Colme-Kill) に於ける彼の僧院の影響を受けて、ビクト人の間に弘まり、ローマのキリスト教がアングロサクソン人の間に弘まり始めた。紀元六百年までに著しき發展をなしたアイルランドのキリスト教とローマのキリスト教とは非常な相違があり、アイルランド・ビクト教會はローマ教會から獨立してゐたけれども、兩者の間に敵對はなかつた。學識あるアイルランドの僧侶は、その教訓と學識とを全ヨオロッパに、更に紀元八六四年にスカンデナビア人によつて發見される以前のアイスランドにまで及ぼしたが、カトリック教の人々に對してもそれ等を喜んで與へた。かくして第七世紀の中葉までに、僧庵學校がイングランドの北方の地——ヤアロー、ウエアマス、ヨオク等に起り出した。同時にカンタベリー寺院の最初の大僧正であるギリシア人のタルサスのテオドールは、南方の地にも學問を起させようと努力してゐた。間もなくアングロサクソンの傳道師と教師とは、アイルランドの人々に

倣ひ、且つ大陸に教育を復興させることに助力してゐた彼等は殊にフランク人に意を注いだやうである。フランク人は紀元四九六年にクロドゥエヒによつてカトリック教徒となり、今や政治上重大なる民族として發展しつつあつた。(註二)これ等の開拓者中にはエグベルト、ウイルフリド、及びウイレブロード(七三九年死)がゐた。これ等の人々にもまして有名であつたのはウインフリスで、彼はラテン語化したボニファシウスといふ名で以て、法王グレゴリー二世より南ドイツに於ける法王代理に任命された。この人と(註三)彼れの同國民のアングロサクソンの男女とによつて、ローマ教會の組織と訓練とがフランク領土の各地に輸入された。その當時フランク領土は、回教とコンスタンチノーブルによつて占有されたる地を除いて、もとローマ帝國によつて支配されてゐた殆ど凡ての地を占有してゐた。このカトリック教の輸入は最初政治的權力の協同なくしてなされたが、ぢきにその助力を得、さうして政治的權力と宗教的權力との間に密接な結合が出来、

その結合が遂に頗る重要になつた。紀元七四七年ピピンが、クロドゥエヒの死後個々の王國に分裂してゐた全フランク領土の主權者となるや、彼は全力を盡してカトリック教の信仰と訓練とその人民の間に弘め、相互の利益交換によつて彼れの權力とローマ法王廳との結合を強めた。

かかる状態のときに、カロル大帝がフランク版圖の唯一統治者となつた(紀元七七一年)。彼はその時代の要求を明かに知り、その要求に應ぜんと努めた點に於て、彼は眞に偉人であつた。これ等の要求は、就中種々の國民間に於ける感情の統一、及び教育であつた。彼は政治の力がこの大事業に應ずる能はざることを十分に認め、さうして教會以外にはいづれにも助力なきことを知つたが故に、教會を自己の支配の下に置かんと欲しながら、その教會によつて事をなさんと力めた。彼れの努力は成功して、紀元八〇〇年のクリスマス日に、彼はセント・ピーター寺院に於てローマ法王から帝冠を戴き、さうして西方世界の政治的權力の

主座がグレゴ・ラテン人からゲルマニヤ人に轉じた。これは無限の意義を有する事件であつた。同時にフランク寺院は西方キリスト教を代表するに至り、教義にまで變化を及ぼした。實にカロロは國家と教會との兩者に於ける完全なる支配者であつた。

戴冠式以前既に久しくカロロは種々の國々から學者をその朝廷に召して、人民の間に教育を振興させる計劃を立てた。そのうち最も優れてゐたのはアングロサクソン人のアルクインで、(註四)彼は紀元七八二年ヨオクの學校からアーヘンに行き、「宮廷學校」の長となつた。それゆゑ彼は普通中世紀教育の父と看做されてゐる。けれどもこれは全く正しくない。何となれば中世紀教育の父は一人だけではなかつたからである。その上カロロによつて起された運動は、その性質上中世紀世界よりも寧ろ古代世界に屬し、中世紀獨特の神秘主義は未だ十分に著しくなかつた。アルクインの目的は、異教的要素すら含んでゐるセント・アウガスチン

時代の教育を復興するにあつた。彼は恐らくマルシアヌス・カペルラに就て何も知るところがなかつたらうけれども、「自由七科目」を保護し、それと關係なきものは凡て輕視した。實に彼はあらゆる方面に於て教權に囚はれ、また保守的であつて、いづこにも獨創を示さなかつたが、彼れの活動せる當時の状態に就ては十分考慮してゐた。彼はセント・アウガスチンに深く感化されて、彼れのなした一切の事業に於て、人々をして來世のために準備させるのを目的とした。彼はその子弟の間に於ける凡ての氣紛れや遊びや遊戲すら賤んだ。科學に就ては彼は殆ど何も知らず、彼れの定義は往々兒戯に等しく、一層不可であつた。彼れの文體は華麗で不自然で諷喻的で、時としては單に聖書の章句をつぎはぎして作つたもので、無遠慮にも本來の意義からはづれてゐた。

それにしてアルクインは當時に於ける偉大な價值ある人であつた。彼及びカロロの影響によつて、教育は西方地方に新しく起された。この教育は三階段から

成つてゐた。即ち(一)初等教育は教區の僧侶によつて授けられ、(二)中等教育は寺院と連絡するか或は僧院に於て授けられ、(三)高等教育は「家庭學校」に限られそれは或る意味に於て後世の大學の起原であつた。教授の標準は、吾々の見地からは孰れも信じられぬ程度の低いものであつた。けれども當時に於てより高い程度のもが行はれ得たかどうかは疑問である。大障害の一つは書籍と書く材料とが不足してゐたことであり、他の一つはローマ教會の抑壓的影響で、ローマ教會はますます普遍的支配をしてをり、従つて紛争を起させるやうなものは當然嫌忌したのであつた。(註六)

次の時代の優れたる教師は、殊ど凡てアルクインの弟子か友人かであつた。そのうち最も有名であるのは、ラーバン・マウル(註六)といつて、「ドイツの最初の教師」で、その師よりはずつと偉大な人であつた。彼は「僧侶の教に就て」「計算に就て」「ブリシヤンの文法術の拔萃」、「宇宙に就て」等の教育に關する數種の著

作をなした。最初のもは研究の種々の部門、「自由七科目」等を論じ、異教的學問の價值に就て正當なる評價を下してゐる。最後のものは一種の全般的百科辭典であつて、ややイシドール(五七〇—六三六年)の語原學(Etymologie)に則つたもので、創生から料理に至るまであらゆることを論じてゐる。もし豫想通りの影響が行はれたものとすれば、ラーバンの求めた道は、第九世紀に於て古代學問の復興を導いたかも知れぬ。それにしてもアルクイン、ラーバン及びその門人の事業は空しいものではなかつた。カロー大帝の死後、帝國は分裂紊亂して、そのために教育は障害を受けたけれども、併し死滅することなく、セルヴァッス・ルブス(八〇五—八六二年)、ハイモ(八五三年死)、ワラフリイド・ストラボ(八〇七—?)、ルイトペルト(八五三年死)、バシアシウス・ラトベルト(八六五年死)、ウエレンベルト(八八四年死)、アウクセレのエリク(八三四—八八一年?)、フクバルド(約九三〇年死)、クリュニイのオド(八八〇—九四二年)の如き人々の手によつて存續

し、西方ヨオロッパが新精神に支配されたる第十世紀の中葉まで及んだ。

(註一)第十世紀頃までスコチアはアイルランドを意味し、スコットランド人はアイルランド人を意味した。然るに第九世紀になつてスコットランド人ジョンはその名にエリウヂエサ (Eriugena) を附する必要を知つた。

(註二)クロードウエヒ及びその部下のフランク人がカトリック教に改宗したことは、歴史上の一大轉回期であつた。ゲルマニヤ人のキリスト教は大部分アリア教であつたけれども、ローマ人の間にその征服者として移住し、さうしてローマ人化されたもののキリスト教はカトリック教であつた。このことが當然兩國民性の間に敵對を生みゲルマニヤ人を非常に弱めしめた。それゆゑクロードウエヒはこの弊をなくするために、不思議なるほど巧妙なる政策によつて、カトリック教徒となり、直ちにカトリック教監督と教會との勢力を、凡て自分の味方となした。フランク人は異教からの救世者として廣く歡迎され、その支配權が急速に伸張した。ゲルマニヤ語で書かれた最古の標本は、ウルファイラス福音書であつた。彼は紀元三六〇年頃下ダニューブのアリア派に屬するメソゴト人の教會監督であつた。

(註三)彼は終に政治的權力によつてその地位を追はれ、紀元七五五年フリースランド人の間に於て殉教者としての死を遂げた。

(註四)アルクイン (Alcuin) は紀元七三五年頃イギリス、ヨオグの附近にて生れ、極く幼少の頃寺院學

校に入學し壯年の頃その長となつて非常な成功を収めた。七八二年フランス、アーヘンに移り、七九六年ツールの僧正となり、八〇四年その地で死んだ。

(註五)ウエストの "Alouin" 傳には、アルクインの教育書とその他の書の目録が、一八三一一九一頁にあり、また彼れの親んだ主なる書目が三四頁以下にある。

(註六)紀元七七六年マインツにて生れ、ボニアアシウスによつて七四四年に建てられたるフルダの僧院に早くからやられた。八〇二年他の學友とともにツールに行つて、アルクインの下にて研究し、八〇三年フルダに歸り、八二二年僧院長となるまで大成功を以て教授した。八四二年隱退し、八四七年マインツの大僧正となり、八五六年マインツの附近で死んだ。

結婚状態が處女状態若くは獨身状態よりもよしといひ、また處女や獨身で止まることは結婚することよりもよくなり、より祝福されないといふならば、彼をして呪はしめよ。(トレント會議の法律。)

デンチンガー

第二章 スコラ哲学と神秘主義

カロロ大帝の時代は一種の過渡期であつて、古代世界と中世紀世界とを連結せしめてゐる。その時代は半現世的で異教的であるけれども、中世紀の特質は非現世的でキリスト教的である。世界は方に終りに近づけりとの第十世紀に弘く行はれてゐた信仰は、その形式こそ違へ、事實は全くその通りであつた。その當時、舊世界は過ぎ去つて、新世界が新理想と新實行とを伴ひつつ、深く教育に影響を與へながら生れたのである。

この變化を惹起したる影響は主として次の三つである。——(一)カロロ大帝の分裂によつて起りたる混亂と災害、及び犖猛な北狄人の侵入、(二)東方の神秘主義の輸入、(三)イスラム教會の發生と傳播これである。凡てこれ等は教會とその超自然的、超世俗的理想とを生活の中心たらしめ、人々をして世間道から脱せし



スナイリア・スマホト

めんとした。これが中世紀の特質である。これ等三つの勢力のうちの最初のもの及びその無秩序な結果に就ては、殆ど述ぶる必要はない。それは多くの男女をして僧院に入らしめ、來世のことに没頭せしめたほど、生活を不安定にし、耐へ難きものたらしめた。第二の勢力たる東方の神秘主義は、來世に内容を與へ、またそこへ到る道を指示したが、それはカトリック教の教會以外に立つて、ギリシア學問に執着してゐたアイルランドの學派から起つたのである。第九世紀の半ば頃ジョン・スコット・エリウヂエナ（註一）といふ當時の最もつかりした思想家が、懺悔者マキスムス及びその他のギリシア人の著作を補つて、僞ディオニシウスの神秘的著書のラテン語譯を、多くの註解を附して世に出した。これ等の書は最初教會から疑惑の眼を以て見られたけれども、時代の傾向に頗る適合してゐたが故に、忽ち多大の歡迎を受け、中世紀の特色である僧侶的、神秘的、遁世的人生觀に根據を與へた。第三の影響たるイスラム教は、最後にして最高の點示たることを要求

しながら、第八世紀の初期に於てラテン・キリスト教と闘争し、キリスト教士をして超自然的惰眠より覺醒せしめ、新信仰に相反するその地位を言明するの餘儀なきに至らしめた。(註二) 教父時代の思想家は、オリヂェンとアウガスチンとを除いては、大抵學說の體系化を企つること稀で、特殊の教義の説明のみに努めたのであつたが、今や彼等は、キリスト教とイスラム教との相違點を明確に心得た統一的意識を作るために、キリスト教の含む凡ての意義を明確に限定せんことを要求された。この要求に應じて第十一世紀に現れたのがスコラ哲學で、それは前々から勢力のあつた神秘主義を合理化し、靜的冥想をして動的推論に至らしむるために現れたのである。(註三)

單なる冥想としての神秘主義が、人々をして現世の生活から脱せしめつつある間に、教育は衰微した。古代ギリシア・ローマの學問は、カロー大帝の時代及びその次の世紀には幾分復活したけれども、漸次再び消滅して隱遁的教訓がそれに

代つた。その目的は人々の思想を市民的生活及び多様の現象を有する自然から脱却せしめて、新プラトニ主義の思索である超自然的、一定不變の上帝なるものに注がしむるためであつた。神の幻想を得んがために全力を盡してゐる人々にとつて、文法や修辭學や論理やその他のものが何の役に立たう。それ等はたかだか障礙たるに過ぎず、と實にかやうに看做されたのである。第十世紀の中葉から第十一世紀の末葉に至るまで、まだまだ反省の觸れる所とならない神秘主義がその勝利を祝賀しつつあるとき、現世の生活及びそれと常に關係ある教育は非常に沈滞した。(註四) 實際、教育は全く死滅したのではないけれども、教會祈禱書と愛好の教訓書とを新參者に教へる以上には出でなかつた。(註五) 然るに紀元千百年頃二原因によつて起れる變化が明かになつた。北狄人の侵略がやんで、ヨオロツバは再びかなりの現世生活に落付いた。同時に、七三二年早くもツールとポアチエとに達し、後にはカロー大帝の厄介物となれるイスラム教の日毎に募る勢力と

文化とは、世界を否定することによつて今や世界を支配せんことを望める教會をして、自衛の必要から教育を要求せしめた。その教義の體系は正當化されねばならなかつた。さうしてそれはただ理性の武器を以てのみなし得ることであつた。かくして上述の時代に、以前アルクインとゲルベルトとによつて蒔かれたる種子が果を結び始めた。アンセルム(一〇三三—一一〇九年)やベルナル(一〇九一—一一五三年)の如きプラトニー化された神秘主義者以外に、アリストテレエス派の傾向の人々、即ちロセリヌス(一〇五〇—一一二〇年?)とアベラアル(一〇七九—一一四二年)とが現れ、彼等は教育と思想との復興に全力を注いだ。教育の重要時期を作つた後の二人には多少の注意を拂はねばならぬ。

〔紀元一一〇〇年頃キリスト教ロオロッパを騒がせたる大問題は三位一體の教義に關するもので、上述の如くマホメッドはこれを否定したのであつた。この問題は知識の性質の全問題、即ち當時の名に従へば普遍の問題——實在論と唯名論の問

題を含んでゐた。これがスコラ哲學、即ち中世紀學問を起したのである。この問題は長き以前ボルフィリによつてその序論(*Enquiry*)の中に述べられてあつたが、あまりに難かしいので詳しくは審議されずに捨て置かれた。類と種とに關して、それ等が實際に存在するものか、それともただ全くの思想の中に成立するものか、さうしてもし存在するとすれば、有形的のものか無形的のものか、知覺される事物を超越するものか、その中に内在するものか、乃至はそれに關係してゐるものかといふこと、予はこれを決定しようとはしない。その理由は、この問題は極めて深奥なるものであつて、他の一層深い研究を要するからである。かやうにボルフィリの辟易した問題が、キリスト教教義の必要から第十二世紀の人々にその解決を迫つた。神は現存する實體であるか、それとも三神格の單なる思想上の普遍化であるか。プラトニー主義者と神秘主義者(アンセルム、ベルナル)は前者をと

り、アリストテレエス派の人々(ロセリヌス、アベラアル)は後者をとつた。吾

々はこの問題そのものには、ここに關係しないので、ただ、それが辯證法を復興させ、時の進むにつれて古代世界の凡ての學問や訓練を復興させ、教育を必要ならしめたことをいふにとどめて置かう。

ロセリヌスは正當に非神秘的唯名論の父と見られるけれども、この復興は何人よりも彼れの弟子アベラアルに負うてゐる。この人とその妻エロイズとのロオマンスはよく知られてゐることで、ここにいふ必要はない。(註六) 彼は最初の近代人で彼女は最初の近代婦人であつた。彼等は多くの缺點をもつてゐたにせよ、どこまでも人間的であつた。けれども、往々にして論斷されるやうに、これを以て、彼が非正統派たらんことを欲したとか、或は教會の教義に叛逆せんとしたとか論斷してはならぬ。事實は全く相違するからである。彼はただこの教義を合理的基礎の上に置いて強めようと志したに過ぎない。それゆゑこの點に於て彼は近世の合理主義及び科學の父と稱せられ得る。彼は或る異端思想家、殊にプラト

ーとアリストテレエスとを非常に尊敬したけれども、その著作に就てはあまり知らなかつた。(註七) 彼は自ら逍遙學徒(Peripatetic)と稱し、凡ての中世紀の人々と等しく、一切の眞理は既に發見せられ、或は啓示されてゐて、ただ説明を要するのみだと信じてゐたから、何等獨創を裝はなかつた。併し彼は權威ある感銘すべき説明者であつて、これが彼の功績である。當時の如何なる人々よりも、彼は強く弟子を惹付け、感動せしめ、彼等をして思索し研究せしめた。彼は主として辯證法と倫理學と神學とに意を注ぎ、それ等に關して價值ある論文を草したが、その中の或るものは彼をして教會、殊に當時彼れの最も苦き敵であつたペルナルの率ゐてゐた神秘的運動との論争を醸さめた。(註八)

アベラアルは學校を建てなかつたけれども、思想と教育とに非常な刺戟を與へ、彼れの數人の弟子、即ち長い間重要な神學教科書として用ゐられた有名なる四書(Sentences)の著者、ロムバアド人ビーター(一一〇〇—一一六四年)、それから

ブレシアのアーノルド（一一〇二—一一五五年）サリスベリーのジョン（一一〇二—一一八〇年）等は、啓蒙のために有力なる貢献をなした。彼は正しく、後にトオマス・アクイナスのその他の人々の有力なる武器となつた「スコラ哲學の方法」の發明者と稱し得られる。（註九）併し彼れの第一の功績は恐らく、彼れの死後半世紀にして起つた諸大學の建設が、非常に彼れの影響に負うてゐるといふ事實にあるであらう。吾々は次にこの方面の研究に進まねばならぬ。

（註一）これはこの語の正確なる形である。ジョン（John）は紀元八一〇年頃生れ、アイルランドで教育を受け、カロロ帝王によつて宮廷學校長に任ぜられ、八七七年フランスで死んだ。彼れの偉大な獨創に富む書は「自然の分布に就て」（De Divisione Naturae）であるが、その價值は長い間認められずにゐた。

（註二）マホメッドはコーランの短い章（第一二章）に於て、キリスト教の根本的ニ教義である三位一體とキリスト化身とを斷然否定して、キリスト教の信條に直接反對した。彼曰く「おお、彼は一神であり、永久神である。彼は生まれず、生み出されず、彼に等しいものはない。」と。

（註三）スコラ哲學と神秘主義とを對立させるのは、非常な誤りである。前者は單に後者に含まれたるものの説明に過ぎない。スコラ哲學者の巨擘トオマス・アクイナスは、神秘主義者の巨擘メルナルの如

き神秘主義者と同等である。

（註四）神秘運動の主なる中心地は、クリウニーのブルガンドの僧院であつて、法王中の法王グレゴリー第七世を始めその他の有力者がこの僧院から出て教會に貢献した。

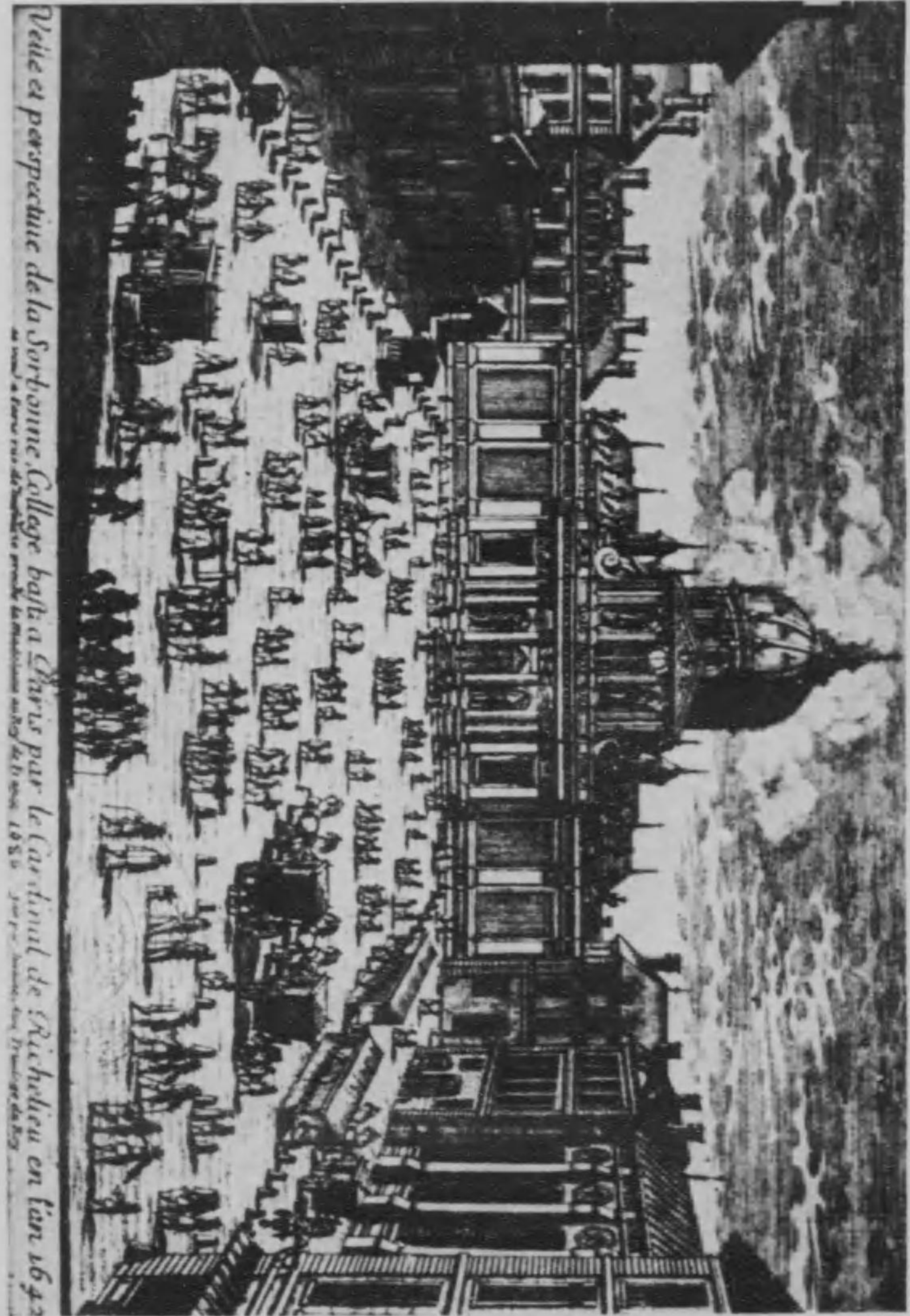
（註五）紀元一〇〇〇年頃の教育状態は、オーベルニュの僧侶ゲルベルト（Gerbert）の生涯に顯著である。彼は一〇〇三年法王シルベスター二世として死んだ人である。不撓の學者にして改革者たる彼は九五〇年頃オーベルニュに生れ、幼少の時アウリヤクの僧院に入り、九六七年より九七〇年までスメイソンのザイクの僧院にて勉強し、九七一年（？）イタリヤに於て法王ジョン第十三世と皇帝オットオ第一世とに謁した。九七一年レムスに於て哲學を勉強し、九八三年ボツピオの僧院長となり、九八四年レムスに歸り、九八七年フランス王ユーゴ・カペーの選舉を助け、九九一年レムスの僧正となり、九九六年イタリヤに退隱し、九九八年ラベンナの僧正となり、九九九年より一〇〇三年まで法王となつた。法王のとき、ローマ帝國を復興させるためにオットオ第三世と提携したが、この事實は彼が神秘的傾向に屈從しなかつたことを示してゐる。彼が書籍を得んと努めたこと、及び學問の材料探究のために遊歴したことは、當時如何に學問が衰へてゐたかを示してゐる。彼れの學習し得た所は僅かなものであつたが、それでも當時としてはなみなならぬものであつたから、彼は妖術者であるとの評判を得、その評判はずつと子孫まで傳はつた。ゲルベルトと併稱せらるべきは、サンガールの僧侶で一〇二二年に死んだノトカー・ラベオである。

(註六)附録を見よ。(譯者)

(註七)彼はプラトニーに就ては“Timaeus”の一部分、アリストテレスに就てはホルフィリの紹介した“Categories, Interpretation, Topica.”及び“Elenchi Sophistici”——古代論理學——の一部分を多分知つてゐたであらう。彼れの弟子のロムバルド人ビーターは一度もアリストテレスを引用してゐない。

(註八)彼れの“Dialogue between a Philosopher, a Jew and a Christian.”に於て、彼は最後のキリスト信者に勝利を與へたけれども、他の二人の論辯者に對しても公平ならんとした。

(註九)この方法は、一定の疑問の兩方面に於て知られたる限りの典據を引用し、次に正當なる結論を出し、それより種々の區別と方法とによつて、各典據が如何にこの結論と一致し得るやを示すのである。それは、凡ての眞理は典據の中に發見せらるべきこと、及びそれ等が正當に解釋されたるときは、孰れも一致するといふことを假定する。勿論それは凡ての自由思想と凡ての獨創的研究とに反對する。けれどもそれは機智の不思議な研ぎ手「心的體操」である。



Ville et perspective de la Sorbonne Collège bâti a Paris par le Cardinal de Richelieu en l'an 1642

(學大リッパ) ソンボルソ

第三章 中世紀の大學

古代世界は、當時の學問凡てが授けられたる制度即ち大學を有してゐたといつて少しも差支ない。かかる制度はアレキサンドリヤ（博物館とセラピス寺院）、アテネ、コンスタンチノーブルに於て、後世にはペラト、ボルドー、リヨン、エデッサ、ニシビス等に存在した。けれどもキリスト教の超自然主義と神秘主義とが發達し、南北から野蠻人が侵入したために、これ等の諸制度は大抵紀元八〇〇年以前に滅んで了つた。その後東方のイスラム教徒は、バグダッド、バスラ、カイロ、（註一）及びその他の場所に大學を建設したが、その大部分は第十二世紀の初期に廢された。次はスペインのコルドバ、トレド、セビユに西方イスラム教徒の大學が起り、約一世紀間續いたが、一二〇〇年頃正統派の狂信によつて抑壓された。最後の偉大なアラビヤ思想家イブン・ルシドは一一九八年に死んだ。

イスラム教大學はキリスト教大學の父であるといつてよい。上述の如く、イスラム教の成功はキリスト教土を單に政治上に於ておびやかしたのみならず、知識上に於ても宗教上に於てもおびやかした。イラク地方とスペインとの華々しき文明は、學校と大學と藝術と通商とを以て、野蠻化したみすばらしきヨオロッパの状態と甚だしき對照をなした。カロー大帝の時代より、イスラム教の主張とそれから生ずる危険とは、多少キリスト教土の知る所となつた。キリスト教徒の學者は、學問を求めてイスラム教土へ赴いた。十字軍は西方諸國をしてイスラム教文化に親しませた。第十三世紀の初期に於て、クリクニの僧院長にして、アベラアルの晩年の友人であつた尊者ビーターは、コーランをラテン語に翻譯し、さうしてほぼ同時代に、キリスト教徒の學生はスペインのイスラム教學校に屢々行つて、アラビヤ語の書籍をラテン語に翻譯してゐた。彼等のうち有名なる人々は、クレモナのチェラアル（一一二四—一一八七年）及びセゴヅキアの副監督ドミニク

ス、グンチザリヌス（ほぼ同時代）であつて、後者はユダヤ人の改宗者ジョン・アヴェンデフト（イブン・ダウド）の助力を得た。この方法によつて、第十二世紀の中葉以後間もなくアラビヤ學派の學問はキリスト教ヨオロッパに知られるやうになつた。この學問と共にイスラム教神學の知識がヨオロッパに傳はつてキリスト教教義を荒さんとし、それをして勢ひ自己を擁護せしめざるを得ざらしめた。名聲赫々たる皇帝フレデック二世（一一九五—一二一八）は、身邊に、多くのイスラム教徒を置いたが、その中にはイブン・ルンドの息子達もをり、さうして彼自身信仰と實踐とに於て殆どイスラム教徒であつた。否恐らく全く自由思想家であつたらう。

イスラム教大學の學科は「自由七科目」を含むのみならず、また醫學、哲學及び神學をも含んでゐた。その大學が閉鎖されたとき、キリスト教ヨオロッパは自身の大學の必要を感じたのみならず、またそれを建設することが出來た。して見

れば一時イスラム教に屈服したのは無益ではなかつた。

×アルクインの時代以後、西方ヨーロッパには幾らか教育が行はれた。大教會と關係して小學校があり、そこでは讀書が教へられ、寺院と僧院とに關係してやや高度の學校があつて、書方、聲樂、やさしい算術(キリスト復活祭の時日を算ふるに足るほどの)、及び神學の初歩が授けられた。後に第十一世紀に於てもっと大きい中心地——パリ、コロン等——に、なほ一層高度の學校が起り、相當に準備ある學生には一切區別なく開放された。ここでは辯論法、神學その他の學科が教授された。紀元一一〇〇年頃の後者に屬する方の學校が新刺戟を受け、時經てアラビヤ學問の侵入(一一五〇—一二五〇年)と共に、全く新しい生命と範圍とを得、それによつてこれ等は大學となつて行つた。

これ等の制度に最初に與へられた名稱はスツデウム (*Studium*) 若くはスツデウム・ヂェネラアル (*Studium Generale*) といひ、その形容詞の意味する所は、こ

れ等の學校がその課程に一切の學問の分科を含んでゐるといふことではなくして、他の學校と違つて、あらゆる國の「學生」(註二)に開放されてゐるといふことである。それゆゑ如何なる特殊分科、例へば醫學校であつてもスツデウム・ヂェネラアルであり得た。けれどもスツデウム・ヂェネラアルは時代の經過につれて、その學科に一切の知識を包含せんと試みた。(註三)その上法王や皇帝や王侯から或る特權を賦與された。スツデウム・ヂェネラアルに於て學位をとれる學生は、無試験で如何なる處でも教へ得る權利 (*facultas ubique docendi*) を得た。然るに私立學校は、たとひ課程が高くてもかかる特權が得られなかつた。大學 (*universitas*) といふ語は、スツデウム・ヂェネラアルよりは幾らか後に現れたのであつて、單に團體を意味し、學問所とは何等特殊の關係はない。スツデウム・ヂェネラアルが合體したるとき、それが一大學となつたので、ボロニアの法律大學の如く、ただ一分科のみ教授するのであつてもさうであつた。多くの大學が凡

ての「分科」を包含するやうになつたのは、よほどの時日の経つた後である。

アラビア人は學校を廣く一般に開放した始祖のやうである。彼等の大學が衰へたときに、キリスト教大學が起つた。フレデリック第二世は特に力めてサラセン文明の制度を悉く模倣した。彼はナポリの大學を建て、その臣下の中の學生凡てをしてそれに出席せしめた(一二二四年)。オクスフォード大學を除いて、四分科——神學、法律、文學(哲學)、醫學を包含したる最初のもものは、この大學であつた。併しこれまでとても、大多數の大學は法王から免許狀を得た。法王は概して進歩したる人であつて、學問の保護者であり、東方諸國の神秘主義に惑はされる如きは滅多になかつた。

キリスト教大學が公認を得る以前に、事實に於て存在してゐたことは確かである、ソレルノの醫科大學は第九世紀に起つた。オクスフォード大學も多分同じであつて、その創設者はアルフレッド王であつたらうとよくいはれる。それに就て

は十分なる記録上の證據は存しないけれども、併しあり得ないことではない。第九世紀のブリテンに於ては學問は珍しいものではなく、さうしてアルフレッド王はその保護者であつて、自身ボエシウスやオロシウスの著作を翻譯した。オクスフォード大學が第十二世紀の末葉、今日の如く多數の學生を有してゐたのは事實であつて、而もその頃漸く創設されたパリ大學とボロニア大學とが、最古のものと認められてゐる。

けれどもつまりは、この兩大學が最古の大學と認められねばならぬ頗る重要な意義が存する。彼等はそれ以前の制度とは非常に異なるのであつて、それは次の四理由に基く。即ち(一)アベラアルの如き人々によつて、研究討議の刺戟が與へられたこと、(二)アラビアの學問思想の侵入によつて、教會がその地位を言明防禦せざるを得なかつたこと、(三)皇帝と王侯とによつて遊歴學生に特權が與へられたこと、(四)教授團體が合體することによつて、合法的地位を得たこと。アベ

ラル及びその門下の批評的辯證的方法是、アルクイン及びそれ以前の教師の鈍い問答示教的方法と強い對照をなしてゐる。ギリシア哲學、醫學及び數學を包含せる豊富なアラビヤ學問と比較すれば、古代の學問は單に水桶にそそぐ一滴に過ぎなかつた。ただアリストテレエスだけは、アヴェロイズその他の註解が附せられて、豊富な教訓を垂れてゐた。長い間イスラム教徒に對して「哲學者」といへば彼であつた如く、彼は今やキリスト教徒に對しても「哲學者」となつたので、その權威を争ふ如きは大膽なることであつたのである。學生が遊歴中とか學校にとどまれるときは、皇帝と王との保護を受け、彼等を惱ましたるものは嚴しい刑罰を課せられた。教授團體に賦與されたる免許狀によつて、教授團體は永久的存立を保障され、特權なき團體に先んじ、それに取つて代ることも出來た。ポロニアとパリとのスツデウムが始めて大學の格に進んだのは、この特權ゆゑであつた。前者は一一五五年頃フレデリック第一世(バルバロッサ)から特權を得、後者は少

し後れてルイ第七世から得た。教授團體 (Universitas) は本來一定のスツデウム (Studium) に於ける凡ての教授者から成立した。後世には教師竝に學生も包含した。教師が各自分科に別れ出したのはそれが組織されてから後のことであつた。さうしてその分科が自身の業務を處理するやうになつた。パリ大學は第十三世紀の初期に於て既に四分科を有してゐた。(註四)

一二〇〇年後の大學の發達を討ねることはここでは出來ない。一二〇〇年から一四〇〇年の間に於て大學の數が殆ど四十に達し、カトリック教世界の種々の國に散在した。イタリヤとフランスとはヨオロッパの他の國々の所有一切よりも多く有した。スカンヂナヴィヤ、デンマアク、オランダ、ベルギー及びスコットランドには一つもなかつた。けれども大學は世界凡てに公開されたから、このことは何でもないことであつた。パリとポロニアとは長い間勢威と人氣とを保持したが、オクスフォードもそれに次ぐものであつた。オクスフォードは主として前二者に倣

うた。かかる初期の大學に出席した學生の數として報せらるる所は殆ど信じ難いほどであつて、例へばオクスフォードは一三〇〇年頃三萬人の學生を收容したといはれ、一二六四年に於てもその半數があつたといはれる。パリ大學に出席せる學生數は更にそれ以上であつた。併しこの數は、當時の學生が極めて貧弱なる設備——粗末な室と一抱への藁——にも満足したこと、またずっと以前アペラアルの如き教師一人でもその淋しき隠退所に随分多數の學生を惹付け得たことなどを思へば、決して驚くに足らなくなる。第十二世紀及びその次の諸世紀に於ては、擾亂の絶え間がなかつたにも拘らず、「研究」に對する熱心の衰へなかつたことは、極めて明かである。その上大學にて施される教授は、低度の學校にも反應して、その標準を高め、有能の教師を採用せしめた。かくして第十三世紀及び第十四世紀に於ては、ヨオロッパの多くの國に於ける教育は、セネカ及びクウインチリアンの時代以來未だ達したことのなき高度に達した。このことは多くの方面

に、就中哲學、美術及び文學の勃興といふ方面に現れた。この時代に屬する人々の中には、アルベルツス・マグヌス、ローチャー・ベエコン、トオマス・アクイナス、ボナヴェンツラ、シナプエ、チヨットオ、多くの寺院建築家、ダンテ、ペトラルク、チヨーサー、ガウッロ、それからドイツの遊歴學者達 (“*Minnesänger*”) 同しくフランスの遊歴學者達である、北方の “*trouvères*” 南方の “*troubadours*” があ

る。その當時はスコラ哲學の旺盛なる時代であつた。(註五) このスコラ哲學といふ語は多くの意義を有する。それは中世紀の學問であつて、直接自然と文化とに意を注がないで、古代の典據に心を用ゐ、その研究と解釋と調和とによつて眞理に到達せんと力めた。近代の意味に於ける學問は殆ど存在しなかつた。哲學は天啓神學の召使であつて、神學は凡ての論争されたる問題に對して最後の歸結を與へ、神に就ての知識が一切の研究の目的であつた。中世紀の文化はスコラ哲學の

原理の實際的結果なのである。

⊗ 中世紀學問と中世紀教育との缺點を發見するのは容易である。近代的見地からすれば、それ等は非常な缺點あるものとしか見えない。中世紀學問は教權に囚はれて自然に盲目であり、中世紀教育は主として記憶作業と煩瑣な論争——イギリス式にいへば口論すること——から成立してゐた。而もそれ等は確かに時代の要求する所のものであつた。スコラ哲學の必要であつた理由は、(一)ヨオロッパの精力を弱らして最良の男女を現世の生活から隠遁せしめつつあつた神秘的傾向を矯正し、(二)ヨオロッパをして古代世界の合理的思想を所有せしめ、(三)魔力はあつたが邪惡なるイスラム教の勢力に抵抗するためであつた。要言すればそれはヨオロッパを道徳的自殺、無智及び肉欲主義から救つたのである。否それ以上のことをした。人々の心を論理的方法で訓練することによつて、近代的研究と學問とのために道を開き、さうした上で、その性質上一時的なあらゆる事象がなさねばならぬ

如く、このスコラ哲學も(矢張り一時的な任務を果して)自滅して行つた。

ギョエテはそのファウストに於て、中世紀文明から近代的文明への轉移を具體化せんとした。第二卷の假面劇の場面に於て、二文明がそれ々々主なる二團體によつて代表されてゐる。前者は飾り立てた象のやうに靜かに動いて、これに勝利(Victory)が跨り、敏捷(Astuteness)が先きに立ち、恐怖(Fear)と希望(Hope)とが連鎖の姿で隨いて行く。後者は火を吐く二頭の龍の如くに怒鳴りながら、これに富(Wealth)が跨り、詩(Poetry)即ち自由な獨創的想像(Free Creative Imagination)が先きに立つて行く。兩者の象徴は十分適切であり、さうしてこの轉移は全く眞實であつた。

従來の教育は、恐らくはソクラテイスによつて懇説せられたる教育を除いて、凡て服従のための教育であつた。この服従を最頂點にまで、個人の良心にまで強要したる中世紀精神が衰微すると共に、一大變化が起つた。今後の教育は多少意識的

に、自由と個人主義との發展に志すであらう。長い間ローマの支配力に抗争してあまり成功しなかつたゲルマニヤ精神が、今や自覺をなして自由國家を建設し、漸次中世紀精神と超自然主義とより解放されるであらう。

(註一)カイロの大學 (Al Ashar) は紀元九〇〇年頃建設されて依然存在し、世界の如何なる大學よりも多數の學生を有するといはれる。それはイスラム教寺院に附屬せる單なる露天の柱廊である。その教授は論理學(ホルフイリーの Introduction)、コーランとその註解に基いてゐるイスラム教神學とに限られてゐる。フェツに他のイスラム教大學が存するけれども、あまり知られてゐない。

(註二)イギリスに於ては今日でも、動詞 "study" と名詞 "Student" とは、大學の勉強に限られてゐる。學校生徒 ("School boy") はアメリカに於ける如く、學生 ("Student") でもなければ、また「その學科を研究する」(study his lessons) でもない。

(註三)第十三世紀の半ば以前に於て、"Studium Generale" 若くはそれと同意語の "Studium Universale" といふ語が使用されたことに就ては、記録上の證據がない。兩語は同意義であるアラビヤ語の "Madrasah Kulliyah" の翻譯であるらしい。

(註四)哲學科と文學科とは特に有力で、その學長は全大學の總長 (Rector) となつた。今日でもアバディーン大學では、文學科の學生が總長 (Lord Rector) を選ぶことになつてゐる。

(註五)スコラ哲學の三期を區別して、(一)發生紀元九五〇—一二〇〇、(二)極盛一二〇〇—一四〇〇、(三)衰微一四〇〇—一六〇〇とするのが普通である。

眞理は汝等に自由を得しむべし。

ヨハネ傳

迷信のうちに成長したる吾々は、それが迷信たることを承認するときにいへども、それから影響 けずにはゐない。人の束縛を嘲り笑ふものが、必ずしも全く自由であるのではない。

レツシング

第四章 學藝復興、宗教改革及び反動宗教改革

中世紀ヨーロッパは三たび學藝復興に遭遇した。第一は第一世紀に於て、第二は第十二世紀に於て、第三は第十四、第十五世紀に於て。第一學藝復興は古代ローマ教育の或るものを取戻した。第二學藝復興はアリストテレスとアラビヤ人の學問とを輸入した。第三學藝復興は古代のギリシア・ローマ世界の全文化を復興した。第一は第二を準備し、第二は第三を準備した。

一切を包括するアリストテレスの哲學は、特に啓蒙的で有力であつた。第十三世紀に於ては、アリストテレス哲學に對する崇拜は殆ど無際限であつた。アルベルツス・マグヌス(一一九三—一二八〇年)やトオマス・アクイナス(一二二五—一二七四年)の如き當時の大思想家は、カトリック教信仰の教義を表現し組織立

てるためにそれを使用したから、その當時より今日までカトリック會哲學は事實上アリストテレス主義であつた。けれども彼れの哲學をこの使用のみに限ることは出来なかつた。彼れの著作は中世紀の人々に、決して中世紀理想とは矛盾しないけれども併し全く新しい世界を開いてやり、さうして人々をして中世紀理想より脱せしむるに強く與つた。かくして多くの有力なる思想家、ダンテの如き人ですら、信仰を失つて異教哲學者となるの虞があつた。後世のスコラ哲學(Thomism と Scotism)は盲目的信仰に都合よき受容的態度以外のものには何にでも未練を残したが、より高度の神秘主義は、個人の靈魂を神と直接の關係に置くことを要求し、教會とその教義とは救済に缺くべからざるものでないとの信仰を強め、個人主義と自由思想とを熾んらしむるに傾いた。これは、神秘主義が第十三世紀及び第十四世紀に自己を反省してスコラ哲學的になつたときに於て、殊に眞實であつた。それより無數の異教が発生したが、その或るものは多くの優れた

要素を包含し、また中には随分愚なものもあつた。それ等のうち、事物の根本に徹し、教権の原理に疑惑を挟むほどのものは殆ど一つもなかつた。

かくの如く「獨斷的惰眠より醒めたる」人類の心は、四周を見廻はし始め、その結果、重要な三發見と重要な一發明とが成就された。ギリシア文學の富とアメリカと、コペルニカスの天文學との發見は、印刷術の發明によつて三倍の價値にされたが、それ等は強く中世紀世界を物質的にも道德的にも破壊し、(註二)人々の思想を全く新しい方面——信仰から理性、超自然から自然——へ向はしめた。それ以後神學は科學と戦つては失敗する。兎角して新運動は二大歴史的事件の中に起つた。即ち自然の復活である學藝復興と、理性の復活である宗教改革とであつて、前者はイタリヤに、後者はゲルマニヤ人の間に起つた。教會は前者には非常な好意を示して、決して不和に陥らなかつたけれども、後者には痛く反對しその結果、第十六世紀に於ては新教徒の大分離を惹起した。

眞理に達し得る人間の能力としての理性、また眞理たることを要求する凡てのものがその證明書を示さねばならぬ法廷としての理性の復活、及び理性に對する眞理の啓示としての自然の復活は、科學と自由哲學との復活を意味し、さうしてこれ等は、主として古代の原本に就ての記憶作業と煩瑣な論議とから成立する舊式教育とは全く異なる教育を要求した。即ち事實を觀察精査して、それより正しき結論を抽出し、同時にかかる結論と一致する處世法を覺え得る教育を要求したのである。約言すれば以上が近代教育の綱領であつて、その目的は個人をして自ら理解し承認したる眞理に従つて生活せしめ、従つて教権を捨てて自由に生活するを得しむることである。

中世紀教育から近代への轉移は、豫期し得たほどに急激でもなく、著しくもなかつた。その理由は明かである。宗教改革と學藝復興とは、その理想——理性と自然——に含まれたるものに就ては半分しか意識してゐなかつたから、實際に於て

その手段も徹底を缺き、新舊の間にたぢろぎ、自己の主義に反して教權の前に平伏すことを示した。理性の擁護者ルーターは、教會の教父と等しく或る範圍内に於て獨斷的であつたが、自然の戰士の中にも法王や大僧正すらが見られた。それゆゑ宗教改革と學藝復興とが十分發展したる後になつても、教育は舊態のままに止ることになつた。教育は依然殆ど全く僧侶の手中に存し、彼はそれを古き方法に従つて行ひ、教授は古き主題にのみ限つた。科學と科學的方法とは教育に於て重きをなさず、寧ろその範圍に入れられず、強く疑はれて、魔術若くは妖術として屢々迫害された。イギリスに於てすら、第十六世紀の後半に至つても、人々はアリストテレスの權威を疑つたといふ故を以て投獄されたが、一方デオルダノ・ブルウノーは紀元一六〇〇年ローマに於て、自然と科學的方法とに忠實なるの故を以て焚殺された。ガリレオの話はあまりに有名であるから一寸言及すれば十分であらう。實にルーターの時代より今日に至る教育史は、一方の超自然主義と教權、他の一方の自

然と科學間に於ける鬭爭史である。さうしてこの鬭爭はまだまだ終結を告げない。けれども第十五世紀以後、教育上注意すべき四大傾向がある。——(一)教育をして抽象的理論的たらしめないで、自然的實際的たらしむる努力、(二)前世紀に悲しくも閑却され輕蔑されたる肉體に對する注意を教育のうちに含ましむる努力、(三)教育を人民の全階級に及ぼして、従前の如く單に僧侶に限らしめざる努力、(四)これまで用ゐられたる酷にして厭ふべき方法の代りに、穩かな興味ある方法を採用せんとする努力これである。凡そこれ等の傾向の多くはラブレエ(一四八三—一五五三年)それからエラスムス(一四六七—一五三六年)に於てすら、なほまたモンテエヌ(一五三三—一五九二年)の中にも見出される。これ等の人々は少くとも名義上はカトリック教徒であつた。然るに同じ傾向は、恐らく一層強い程度で新教徒の間に見出される。その傾向の一つである、教育をあらゆる階級に及ぼさんとする努力は、宗教改革の根本原理の論理的歸結であつた。眞理を典據より

受けんことを望むものは、無智に甘んずるであらうけれども、眞理を自ら判断せんことを望むものは、教育されねばならない。普遍的教育に對する努力は、自然、通俗語の修練と聖書をその言葉に翻譯することから起つた。宗教改革の時代まで、殆ど凡ての宗教書類はラテン語で書かれてゐたが、それ以後ますます通俗語で綴られた。(註二) この變化から起つた通俗教育の利益は、實に非常なものであつた。

初期の宗教改革者のうち、教育の大擁護者はルーター(一四八三—一五四六年)、メランヒトン(一四七九—一五六〇年)及びノックス(一五〇五—一五七二年)であつた。ルーターは當時の麻酔的教育方法を痛罵し、男女兩性の兒童に對して非職業的な公立學校と義務教育とを要求した。彼は從來の苛酷な壓迫的方法を捨てて、兒童はやさしく取扱はれ多くの自由が與へられねばならぬことを要求した。彼は男女の教師の訓練に對して注意深き施設を試みた。けれども彼はその教育實際案を立つるに當つて、矢張り時代の制限を示したのである。それはラテン、ギ

ロシア及びヘブライの宗教を、僅かな數學と論理學と共に、引續き研究すべきものと定めてあつた。彼自身聖書をドイツ語に翻譯したけれども、ドイツ語の研究には執着しなかつた。科學的教授の考は彼にはまだ起らうともしなかつたけれども、體育と音樂との教授を彼は獎勵した。或る一點に於ては彼は殆ど他の如何なる教育改革者よりも優つてゐた。もし教育が必ず労働階級の兒童にまで達せねばならぬとすれば、それは主として彼等が「仕事に行つて來た」後に授けられねばならぬといふことを彼は明かに認めてゐた。従つて彼は、労働して自己の生計費を得てゐる青年は、一日に一時間乃至二時間學校に出席することを許されねばならぬと忠言した。この方法によつて彼は労働階級の教育問題を解決したといはれ得る。さうして吾々は今日もなほ多く彼から學ばねばならぬのである。全體としてルーターの主張したる教育は中世紀風のものであつたけれども、併し人道と自由との近代的精神を傳へてゐた。併しそれはその後の教育に對して、新教徒の間に於て

すら、あまり影響を與へなかつた。

「ドイツの教師」(Praeceptor Germaniae)と呼ばれたるメランヒトンは、高等教育を振興し、大學に進歩したる教授法を輸入するに與つて力があつた。ルーターがアリストテレスを痛責したるに反してメランヒトンはこの哲學者を無視する能はざるを知つたればこそ、彼に依附した。さうしてこれはルーター自身も結局知つたことである。彼はルーターの同意を得て、アリストテレスの論理學、倫理學及び心理學に關する著述を公けにしたが、この著述は長い間これ等の題目に就ての教科書になつた。けれども彼は教育や等思想に何の新原理を齎らさなかつた。彼は科學的方法の觀念を有せず、また典據を眞理以上に置いた。彼は占星學と宇宙の構造に就ての中世紀風の見解とを固執し、ルーターと等しく、コペルニカスの學說を神の啓示(一切の眞理に對する最高權威)に反對するものとして拒否した。彼が自由論議をあまり信じなかつたことは、ジョン・ノックスと同じく、異教

者の死刑執行を主張し、またユニテリアン派のセル・ヴェッスがカルビンによつて火刑に處せられたことを、後世に對する敬虔にして記憶すべき鑑戒であると公言したといふ事實によつて示される。而もこれ等の人々こそ新教主義の根本思想に對して随分不忠實であつたのである。

ジョン・ノックスは、「キリストの教會」のためにカルビン派の人々によつて主張されたる權威によつて、スコットランドに於ける封建制度と王威との拘束を破つた人であるが、また教區學校創立の主なる貢獻者であつた。その教區學校はスコットランド人の間に、知力と才能と道德的自尊との水準を高めしむるに多大の貢獻をなした。これ等の學校は特に讀書及び宗教的信仰の概要を教ふることを心がけ、聖書が主なる教科書であつたけれども、教師が大抵大學卒業生であつたから生徒はより高い學校のために完全な準備を受くることが出來た。かくして最も貧しい農夫や勞働者の子弟が大學に入るを得、それより自由職業に就くことが出來

た。かういふことが出来たのは、この國のあらゆる家族を引立てる非常な刺戟となつた。世界廣しといへどもスコットランドに於ける以上に、學校と大學とが人民の全團體に對して大恩惠であつた國はなかつた。

他の宗教改革者カルビン、ツイングリ等は、直接教育を進めることには比較的大した貢獻をなさなかつた。實に宗教改革は、全體として逡巡し勝ちな不確かな運動であり、その擁護者もその根本原理に盲目で不忠實であつたから、新哲學、新教育を生み出さなかつた。それは教育を典據に従はしめ、僧侶の手中に委ねたそれは、私的判斷の原理の全意義と範圍とを理解して、それを典據の關しない理論と實行とに表現し得る所の偉大な天才を生まなかつた。新教固有の哲學と教育とはずつと後に至るまで起らず、實に今日に至つて始めて實現され出したのである。それもその筈で、理性の復活が自然の復活によつて補足されるまでは、新教固有の哲學と教育とを生み出し得ないからである。自然（この言葉の全意義に於

て）は理性の本質的内容である。

新教は自己の自由の原理に基ける教育を採用するに失敗して、その反對者にして教權の擁護者たるカトリック教に局面を委任した。さうしてこの局面は殆ど直ちに同教の最も忠實にして典型的な擁護者の一人によつて占領された。その人は同教の代表せる、また現に代表する一切のものに對して、一意専心傍目も振らずに貢獻した。その人といふのはロヨラのイグナシウスで、（註三）「イエス會」の神秘的にして極めて實際的な建設者である。

嚴密にいへば、デュスイット派の教育制度は、吾々が進化といふ語の中に退歩的進化の意を含ましむるにあらざれば、「意識的進化としての教育史」の中にそれが位置を占むることを要求することは殆ど出来ない。併し一度だけ進化の意を退歩的進化と解しよう。新教世界は多少盲目的に教權の拘束を脱して自由に達せんと力めてゐたけれども、「イエス會」は最善の信仰と敬虔なる意志とを以て、こ

の拘束を従前よりも一層鞏固ならしめようと企てた。それはカトリック教信仰と教權とを最も斷定的に辯護擴張し、世界をして全然それ等に服従せしむるやうに教育せんとしたのである。かくすることによつて、思想の自由にも、それから少くとも或る方面で研究の自由にも反對せねばならなかつた。さうしてこの態度は當然、門外者から不審と嫌惡とを招くべき研究方法の使用を必要とした。觀念若くは觀念の體系をそれが明かに眞であるからといふこと以外の根據から辯護せんとするのは憎むべき壓制的方法によつてのみ成就される仕事をなすことであつてこの仕事に従事する人々が如何に敬虔で、如何に善意の籠つた、穩かな、取入り上手なものであらうとも、これは凡て合理的に訓練されたる自尊心ある人々の痛憤する所であらう。ヂェスイット派の不人望は、彼等が思想行動の自由へ向ふ人類進化の道程の前に立塞がつたからだといへば、十分説明される。

「イエス會」は大規模の軍事組織で、カトリック教の「救世軍」であり、その方

法は後世のその模倣者の方法に非常によく似てゐた。その救濟計畫の中には、殊に教育が含まれてゐた。従つてその營舎砲臺及び城壁によつて圍まれた都會は、中等學校、専門學校、及び大學であつて、これ等は「將軍」並にその參謀の意志に従つて人が配置された。その將校は、更に現世を捨てて貧困に甘んじ、高潔、服従の美德を守らんとする僧院的誓をなし、その義務として注意深き軍事的訓練を受け、命令されたる所へは直ちに行き得る用意をなして、カトリック教と超自然主義とのために世界を再び征服することを助けんとする人々であつた。彼等の立場から見れば立派な判斷であつたが、彼等は初等教育にたづさはることを避け、また勞働階級の教育に反對までして、より高き職業に運命づけられたる人々——貴族その他の人々——の高等教育にのみ従事した。

彼等はその教育方針を立つるに當りて非常に實際的な知識と時代の要求に就ての鋭敏な感覺とを示した。彼等はこの要求を満足せしめ、同時に教權と超自然主

義とをそのまま保持しようとして試みた。従つて彼等は論理學と修辭學とに専心することに於て宗教改革者と競争し、古典學問に専心することに於て學藝復興の人本主義者と拮抗した。併し彼等は凡てこれを全然正統派に屬する所のドミニク教團の學者トーマス・アクイナスの保護の下に行つたので、彼等はこの人の哲學(註四)をその標準となし、この人の精神に於て教へたのである。この方法によつて彼等はあらゆる宗派の家族に屬する青年を引寄せ、その欲する所のものを與ふることが出来たけれども、彼等は眞理の自由研究と發見とより生ずる自然的歡喜を刺戟として用ゐることが出来ず、従つてその生徒をして眞理そのもののために研究する興味を起さしむることも出来なかつたから、彼等は生徒を引付け且つ引留めるために、あらゆる種類の劣等にして不自然な刺戟——競争、稱號、賞與、勳章、公開展覽會、演劇的上場等を使用せざるを得なかつた。青年をして公人として名を成さしめ、若くは既得の意見を個人的に擁護せしめ得る修辭學は、教育組織中

重要な位置を占めた。かくの如く勉強は眞理のためになされずして、名聲を博するためになされた。道德的教育の問題に關しては、チェスイット派の目的は嚴重なる服従を強制し、どこまでも罪惡から脱がれ、來世の歡ばしき應報と怖ろしき責罰とを絶えず表示して、それによつて罪障なき服従即ち出家的徳を養成するにあつた。彼等は思想の自由を意味する獨立的道德力の養成を企てなかつたし、またそれが出来なかつた。彼等の理想は、神聖なる命令には嚴正に一も二もなく服従し、不信仰、合理主義及び不従順に傾ける異教國を征伐するために、威力と巧妙とを以てあらゆる精神上の武器を使用する熱烈なキリスト教兵士たることであつた。

初期の「イエス會」に於ては、その宗教的熱心は清新で純眞で武俠的であつてその當時にあつては教育上に優れたる事業をなしたやうに思はれた。ペエコン(一五六一—一六二六年)とデカルト(一五九六—一六五〇年)とは非常にそれを稱讚してゐる。けれども大部分これ等の人々のお蔭で眞の新教教育が發生して後は、「イ

「イエス會」はますます低く沈滞して行つたやうである。ライプニッツ（一六四六—一七一六年）は「デューイット派は凡庸以下のものたるに止つた」と述べてゐるが、ヴォルテール（一六九四—一七七八年）は、彼等は「ラテン語とノンセンス以外何物をも教へなかつた」と公言してゐるこれ等の判断が凡て本當に正しいといふことを疑ふ理由はない。第十六、十七世紀に於て、は多くの傑出せる人士がデューイット派の學校から現れたけれども、第十八世紀に入り、一七五四年法王クレメント第十四世によつて「イエス會」の解散せしめられる頃までには、その人數は次第に減少して行つた。

最初のデューイット派の學校は、一五四二年一つはホルトガルのコインブラに、他の一つは印度のゴアに建てられた。その後世界の各地に甚だ急速に増加した。學校は殆ど最初から三段階に別れてゐた。即ち（一）中等學校若くはラテン語學校、（二）コレヂ若くはライセアム、（三）「一般研究」若くは大學である。これ等凡て

を合して、第十七世紀の終りには、七百六十九校よりは少くなく、學生は約二十萬人あつたらう。不振の時代に於ても七百二十八校あつた。實に二百年に亘るキリスト教士の教育は彼等の手中にあつたといつてよい。

十年以上教育上の經驗を積んでから書き始められた「イエス會」の憲法に於てイグナシウスは教育問題にかなりの紙面を與へ、その門弟達によつて遂行せらるべき計畫の概略をも明かにした。追加規定は、彼れの一番の直弟子達によつて作製せられたけれども、有名なる「研究軌範」(Ratio studiorum)の現れたのは、一五九九年アクアヰヰアが總監職になつてゐるときであつた。それ以來これがデューイット派教育の軌範となつた。それは一八三二年或る修正を受けたけれどもその精神は元通りであつた。ここにそれを詳説することは不可能でもあり不必要でもある。その一般的傾向は既に述べた。

デューイット派教育の目的と内容とに同感することは、眞理と自由とを愛する

ものには出来ないことであるけれども、それに關聯して吾々が最も慎重に考究すべき一點は、この教育の成功といふことである。それは次の三原因に基いてゐた即ち(一)會員の熱誠なる奉仕、(二)時代の要求を明かに洞察したること、(三)單一明確なる目的から、その全課程を完全に體系化したることである。これ等の諸點に於て、吾々はよろしく彼等を模倣すべきである。實に現時の教育は、彼等の實現したる三條件を正しく要求してゐるのである。即ち第一、教育事業に極めて熱心なる教師の大同團結、第二、現時の要求する教育の性質と範圍とを明かに洞察すること、第三、個人生活及び社會生活の最高理想から割出された教授の完全なる段階的組織である。もしヂェスイット派がこれ等の三事項を世界への遺産として殘し得たとすれば、その存在も無意義ではなかつたであらう。

初等教育がヂェスイット派によつて施されなかつたことは上述した。けれどもその企圖は第十六、十七世紀に於て他の人々によつて種々になされた。即ちその

人々は、「敬虔學校」(原名を“Sculde Pie”とす以後に多數となる)の創設者たる教父カラサンチロ(一六四八死年)、一六六六年「サン・シャルルの同教信者會」(Congregation of the Brethren of St. Charles)を建てた教文デミア等であるけれども今日なほ盛大な「キリスト教學校」(Christian Schools)の創立者たるラ・サアル(一六五一—一七一九年)の現るるまでは、初等教育方面の大進歩はなかつた。ラ・サアルは遁世的傾向の聖者で、貧者に深い興味をもつてゐた。彼は下流社會に對して、ヂェスイット派が上流社會になしたことを、同一目的を以てなした。彼れの課程案は、「三つの R」と綴字法と問答法とから成つてゐた。彼は體罰の行使を制限し、品行に重きを置いた。けれども兒童の眞價に就ては何事も考へず、兒童が眞理や道德的自由に上達することを欲求する風もなかつた。彼は教權を稱揚し、柔順を養成すべく努めた。彼れの事業中の最もいいことは、従前フランスに存在したるものに大改良を加へたといふ一點である。

かくの如く宗教改革も、反動宗教改革も、教育上何等決定的進歩をなさず——科學及び自由も促進せられず——後者の如きは寧ろその退歩を示したのであつた兩者とも教育を僧侶の手中に委ね、兩者とも典據の原理を保持して、眞理のための自由と經驗とを顧みず、傳説を重んずるのみであつた。學藝復興が單にギリシア世界の文學と科學との復興である限り、それに就ても同じことがいはれ得る。それは單に一權威を他の權威に置き換へたのであつて、多くの場合プラトンの權威をアリストテレスの權威に置き換へたまでである。けれどもそれよりよき事物のために道を開いた。權威の位置を代へることによつて權威そのものの力を疑はしめ弱めしめることになつた。またギリシア科學の思辨をあばくことによつて、人々をして自然の事實と進行とを思辨することや、終にはそれ等を考究することを知らしめた。彼等がこれをなしたとき、新時代が始まつたのである。

(註一)これ等が如何に密接に關係してゐるかを知るためには、ダンテの『Divine Comedy』を慎重に研

究せねばならぬ。

(註二)ラテン語は教會の公語であつて、大抵學識あるものだけが理解し得た。普通の慣習語が行はれてラテン語が顧みられなかつた地方では、多少意識的に教會の精神と政策とから違背してゐることが看取された。イタリヤに於ては、イタリヤ語で最も高貴な著作を書いたダンテは、教會の無遠慮な批評家であつた。ドイツに於ては、往々不幸にも非正統派であつた神秘主義者は、ドイツ語で書いた。イギリスに於ては、ラングランドは教會に對する痛烈な諷刺である。『Piers Plowman』を英語で書いた。チヨイサーはウヰキクリフと同時代の人であつた。後世に及び、ラブレエとモンテイヌとはフラン語で、レオナルド・ダ・ヴィンチはイタリヤ語で、ルーターはドイツ語で書いた。トーマス・モアとフランシス・ベーコンとは大半はラテン語で、爾餘は英語で書いた。大學は、ラテン語がいづこに於ても殆ど用ゐられなくなつた後までも、全くの隋性と習慣とからそれを固執した。イスラム教がその聖典を人民の言葉で書き、最初から人民の手中に置いたことは、イスラム教の大利益であつた。

(註三)一四九一年スペインのロヨラの城で生れ、若くして軍隊に入り、マンヘルナで負傷する。(一五二二年)。それが平癒するまでにイエス傳や聖者傳を讀み、十字軍の兵士たるの決心をなし、モンテセルラート及びマンレサに於て幻想を見る。次で聖地巡禮をなし(一五二四年)大困難のうち研究に専心したが、最初のほどはあまり成功しなかつた(一五二四—三五年)。再び聖地巡禮を企て、戦争のために失敗する(一五三七年)。併し彼自身及びその仲間が法王に承認せられ(一五三九年)、『イエス會』に對す

る法王の免許状を得る（一五四〇年）。さうしてその僧團の憲法を起草し（一五五〇年以後）、一五五六年に死んだ。"Loyola, or the Educational System of the Jesuits" は「イエス會」の一員ヒューズの書いたものであるが、兎に角に公平であると假定して、予（著者）の記述を多く本書から採つた。
 （註四）彼等の影響の下に、それは、一八七九年に發布された法王の廻状 "Aeterni Patris" によつて、カトリック教々會の模範哲學とされた。

第三部 近世の教育

第一章 第十五世紀から第十七世紀まで

近世科學と關聯する近世教育の起原は、人々が自然を研究し、その經驗を記録し始めたるときからである。近世に於て最初にこれをなした人は、フランス教團の僧ローチャー・ベエコン（一二二四—一二九四年）であつた。けれども彼は、或る深い、さうして殆ど不思議といふべき眼識をもつたに拘らず、なほ深く神秘主義に染まり、教權を尊敬したが故に、彼れの努力はあまり効果を見ず、さうして彼は信仰攪亂者として多年その生涯を牢獄で送つた。

教權と神秘主義との束縛を實際に脱却して恐るる所なく經驗に身を委ねた最初の人は、レオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二—一五一九年）であつた。思ふに彼は、ヨオロッパ未曾有の最大の天才であつて、吾々は今日漸くその價值を十分理解

せんとしてゐる。彼にとつてはスコラ哲學は存在しなかつた。ありがたき無智は、彼をそれとは知らしめずに自由の人とした。哲學と神學との分離はまだ確認されなかつたけれども、併し假定された。「彼はあまり努力もせず、また頗る容易に、人文主義の危険からも逃れた。……レオナルド・ダ・ヴィンチは、スコラ哲學並に人文主義を脱却せる近も代人である。』世界は彼以上に鋭敏にして興味ある天才的觀察者を知らなかつた。また彼以上にその觀察の結果を文學及び美術に表現し得るを知らなかつた。彼は科學の研究法を實際に行つた。併しそれを定式化することをしなかつたのみである。

後者の定式化する事業は、イギリス人のフランシス・ベエコン（一五六一—一六二六年）に遺された。彼には如何に知識的、道德的過誤があらうとも、近世科學の父と呼ばれ得るであらう。古代に於てアリストテレスは歸納法を主張し、（ベエコン以上にうまく）實行した。（註一）近世に於てはベルナルデオ・テレシオ（一五

〇八一—一五八八）は、一切の科學は經驗と歸納法とに基かねばならぬと主張した。けれども典據的演繹的科學研究法に反對するものとしての經驗的、歸納的科學研究法が、一般に通用せらるるに至つたのは、何といつてもベエコンのお蔭である。「知力を開發するやうに装うて、而もそれを抑壓する書物の上の科學」はベエコンと共になくなり漸次自然の直接研究によつて置き換へらるるやうになつた。コペルニカス天文學とアメリカ大陸との二大発見は、中世紀科學の根柢に横はれる宇宙觀を打破するに貢獻して、以上の變化を容易ならしめる助けとなつた。この以後教育を教權と僧侶の手とより取返し、科學と俗人の手とに委任せんとする傾向を見るのである。

ベエコン自身は教育に直接にあまり貢獻しなかつた。けれども彼れの著作は、教育に多く盡したる人々に感激を興へた。中にも著名なるは、「近世教育のベエコン」と呼ばれ、また正當に近世教育の父と呼ばれ得る人（註二）——ジョン・ア

モス・コメニウスである。この人はベエコンの方法の刺戟を受けて、殆ど一とびに中世紀の抑壓的教育から、近代の自由を興ふる教育に躍進したので、この事實以上によくベエコンの方法の價値を證するものはない。實に一切の近代教育はコメニウスの置いた基礎の上に建てられたといつていい。彼は普遍的自由の根本條件として、普遍的教育の必要を知つて、これを高調し、善惡の評判を意とせず、下層階級の教育に努めた。ヂェスイット派は高等教育を組織化することに對して或る貢獻をしたけれども、コメニウスは、幼年から成年までの教授課程を整へた最初の人である。その教授課程は、四段階若くは四學校を含むもので、(一) 家庭學校(幼稚園)、(二) 初等學校、普通學校、或は地方學校(三) グラムマー・スクール(ラテン語學校(ギムナチウム)(四)アカデミー、コレヂ、或は大學である。第一は各家庭に於て、第二は各村、各教區に於て、第三は各市町に於て、第四は各王領、各州に於て建設されねばならぬと主張した。各教授課程は六年以上に及ぶが故

に、凡てを修める生徒は二十四歳を以て終らねばならぬ。或點に於ては、各學校は孰れもそれに續くものの豫備であるが、他の或點に於ては、それはそれ自身で完全なものであつて、或る程度の一般教育を代表し、或る程度の職業に相當するものである。最初の二段階は、男女の兒童が受くるもので、この教授は普通語で授けらるるから、従つて普通學校といふ名が出来たのである。高等なる二段階は、より高き職業を求めんと欲する男子のみの修めるもので、コメニウスはなほその教授にラテン語の用ゐらるることを欲してゐた。

眞の教育學的直覺を以て、コメニウスは、兒童の能力がその自然の秩序——知覺、記憶、想像、理性——に従つて、また書籍を通してよりも、寧ろ事物と事實とを通して引き出されねばならぬことを認めた。さうして書物の作用は、個人の經驗を種族の經驗を以て補ふことである。後者はただ前者の言葉によつてのみ解釋され得るので、個人の經驗の少ない處に於ては、書物に記録された種族の經驗は

貧弱に解釋され得る外はないことを彼は認めた。彼は教育が誕生と共に始まること、また極く幼い兒童でも家庭に於て、初學の物理學（力學、光學、音響學）、博物學（植物學、動物學等）歴史、地理、年代學、算術、幾何、天文學、文法、さては初歩の論理學、形而上學、倫理學及び政治學すら學び得ると主張した。併しそれかといつて、彼は體操と手工とを等閑にしたのではない。彼は生産的活動の知識的及び道德的價值を十分認め、また學校が健康に適する場所に建てられ、その周圍に廣い自由の餘地を有たねばならぬことを主張した。初等學校に於ては、家庭の學習が更に一步を進められ、他のものが附加され、さうして普通の職業に適する包括的教育が授けらるべきであつた。高等教育に於ては、外國語と全部の科學とが學習されるべきであつた。外國語は自然的方法で修得され、文法はただその使用の矯正物として用ゐらるべく、科學は觀察、實驗及び普遍化によつて研究されるべきであつた。併しコメニウスは、教化と博識と職業的陶冶とを十分明かに區別

別しなかつたやうだ。今日までアメリカに於てそれ等が明かに區別されてゐないといふ事實は、吾々が彼に盲從してゐることをよく示すものはない。コメニウスは、ベエコンのやうに、科學は一種の神秘的幻想と奇蹟とを以て補足され、かくして人間が終に完全に知識を支配すると同じく、自然を完全に支配するに至るといふ信仰を固執して、中世紀を稱揚した（註三）彼れの書いた多數の著書の大部分はこの神秘的、靈智的傾向を示してゐるが、彼れの教育體系は主として次ぎの三著

— (1) "Didactica Magna" (2) "Janua Linguarum Reserata," (3) "Orbis Sensuallium Piens" のうちに解説されてゐる。第二は主として第二の説明でゐる。

コメニウスと共に、教育上の真理と自由とが實際に勝利を得た。權威と抑壓とは真理と同情とに屈服した。實際、この勝利の實果が收められるまでには、長い時日を要した。新教は最初の否定的熱心を失つて以來、ますます自己の根本原理に背き、權威の前に屈從した。學校は依然として殆ど全く僧侶の手に存した。コ

メニウスは、今世紀に至るまで殆ど忘れられてゐた。これにも拘らず、彼れの影響は死滅しないで、後世の教育改革者を奮勵せしめた。ロック、ルソウ、ペスタロッチ及びフロエーベルの如きは、その中の或るものはコメニウスを知らなかつたやうであるけれども、矢張り彼れの弟子であり、後繼者である。コメニウスは、確かに、大教育者の一人である。

權威を脱して自由に向へる運動は、ベエコンの經驗的科學とコメニウスの教育學とに表れたが、これは人類生活のあらゆる方面、殊に宗教と政治とに實現された。宗教に於ては、宗教改革を生み、政治に於ては、國王の神權を無視して、主權を人民に置かんとする傾向が、一六〇〇年頃から始まつて、爾來ますます強くなつた。イギリス清教(Puritanism)とスコットランドの正教誓約(Covenant)とは神政的であつたけれども、根本に於て民本的であつた。實に彼等は支配者としての神を承認したけれども、彼が地上に特殊の代理人を有することを否定した。彼

等は王政を擲つために神政を使用し、その上で神政を捨てた。同じことがオランダにも起つた。これは凡てイギリスの二革命(一六四九年、一六八八年)及び自由に對する幾多の勝利を意味するニュー・イングランドの植民といふことに實際に表現された。

けれどもこの運動は、自らの意義と假定とを十分意識して、或る哲學にそれ等を表現するまでには、かなりの時日を要した。さうならぬうちは、如何なる運動もその全力を現すことなく、安全に進行することの出来ないものである。實に宗教改革は殆ど一世紀半の間何等の哲學なくして過ごしたほどに自らの意義をあまり知らなかつた。けれども遂にその哲學も作られた。それはルネ、デカルト(一五六六—一六五〇年)とジョン・ロック(一六三二—一七〇四年)とに負ふのである。彼等兩人は、人種、教育及び性格に於て甚だ異つてゐたけれども、凡ての眞理の保證を或る形式の經驗に求め、かくして人類の胸中に凡ての權威を宿し

た點に於て一致した。これが即ち新教の眞髓なのである。デカルトは眞理の外的標準に關して懐いてゐた一般的疑惑を、内的意識に照らして取除いて了つた。「われ考ふ。故にわれ在り」——思考と存在とは一である。ロックも事實上「感性と存在とは一である」といつた。(註四) 兩人とも自己の原理の含む全意義を明かに知らなかつた。けれども、それは後になつて明かにされるであらう。これ以後の哲學は凡て彼等の基礎の上に築かれてゐる。デカルトは、デスイット派の教育を受けたために、自ら新獨斷主義に陥ることになり、それがために彼自身のよき事業も多く無に歸した。彼は自己の存在より神の存在に移り、次に神の眞實性を假定して、世界の實在を信ずるやうに取計らつたので——これは明かに信仰と權威とに還つたのである。けれども彼は、(一) 思想の世界とひろがりの世界とを分離して(註五)それによつて現象的宇宙の説明から、形而上學的實體——天使、靈物等——を驅逐した點に於て、(二)(デモクライツスの原子論を復活せしめて)、

化學に數學を入れた點に於て、最も優れた功績をなした。眞面目な新教教育を受けたロックは、絶對眞理にはあまり望みを抱かず、經驗の範圍に止ること以て満足した。デカルトの哲學は、おのづからスピノザの汎神論的神秘主義とウォルフの形式的形而上學的獨斷主義とに作り上げられた。——兩者とも甚だツマらない結果であつた。ロックの哲學はバークレイとヒュームとの手を経たる後、カントを「獨斷的惰眠」から喚起せしめ、一層の發展をなさしめた。かくしてロックは、經驗に基ける近世思想の父といはれ得るであらう。

デカルトは間接に、ロックは直接に、教育のために貢献した。デカルトは近代精神に勵まされ、デスイット派の文學的な回顧的な教育を疑つて、精神は思考するやうに、また單に言葉や典據を取扱はずして事實を取扱ふやうに訓練されねばならぬと主張した。彼は古典語の長期に亘る研究を非難した。彼はその最初の著書

「方法論」(Discours de la Méthode) の第一節に於て、知識を授ける方法に就て

價値ある暗示を與へてゐる。彼は自己のために次のやうな規則を設けてゐる。即ち(一)疑ふ餘地のないほど明確なものと認めないものを、決して眞なりとして容認しないこと(二)凡ての困難なる問題を出來るだけ細密に分解すること、(三)或る問題がその性質上、特別に順序が指示されず、たゞ研究の秩序的進歩を計るために採用されたる如き場合に於ても、順序正しく考へて、より簡單、容易なるものから、より複雑、困難なるものへと順次に進み行くこと(四)完全に計上し、普く調査して、一つも見残したるものなきことを確めることこれである。

ロック(註六)の教育に對する直接の貢獻は、一部分は教授の實際の經驗に、一部分は當時行はれてゐた偏見に基いて成れる彼れの小著、「教育に關する考察」(Some Thoughts concerning Education, 1693)のうちに含まれてゐる。それは教育一般に就てではなく、やや形式的な俗臭の勝つたイギリス紳士を、如何にして「馴け」するかに就ての論文である。その標語は、「健全なる精神は、健全なる肉體

に宿る」といふのである。健全なる肉體を作ることから書き始め、運動と衛生との規則を述べてゐる。それ等を要約すれば次の如くである。「力めて戸外に出でよ。運動と睡眠とを多くせよ。淡泊なる食事を攝つて、酒や強き飲物を避け、醫藥は極く少量を用ゐるか、若くは全く用ゐるな。厚着をせず、窮屈な着物をさるな。殊に頭部と脚部とを冷やし、脚部は時々冷水に曝らすやうにせよ。』精神方面に移つても、彼は同じやうな鍛鍊法を勧めてゐる。「肉體の力は主として困難に耐へ得る所に存する如く、精神の力もさうである。さうして凡ての徳と價値との大原理及び根柢は、人々が自己の欲望を自ら否定し、自己の傾向に反對して、よし嗜慾が他の方面に向いてゐようとも、理性が最善として指示する所のものに全く従ひ行くことに存す。』この見解をとれば、訓練は早くから始められねばならず、兩親の權威は確立されねばならぬ。處罰は成るべく軽くし、鞭打と毆打とはただ承知で強情を張る特殊の場合に限り行はるべきである。けれどもそれが一旦行はれる

以上、子供が全く服従するまで續けられねばならぬ。賞與、賞牌を與ふる如きはよくない。何となれば道德的行爲の本當の動機は、名聲と稱讚とを愛して、その反對を恐れることであるから。——併し實際怪しげな動機である。兒童は遊戯好きなることを許されねばならず、あまり規則づくめにされてはならない。模範は口訓よりも力強いからである。『各人の天性は能ふ限り延ばさるべきである。けれども他のものを彼に押附け課することは、無駄な勞力であらう。かくして意志に上塗りしたものは、たかだか厄介氣に着いてゐて、強制と虚飾との醜さを常に掲げることになる。』兒童は單なる形式的作法に多く煩はされてはならぬ。さうしてそれは規則によつてよりは寧ろ模範によつて授けらるべきものである。重要なることは、正しき性向を養うて、それを自然的に表現せしむることである。『年が経てば直ることが解つてゐる缺點に、氣を揉むな。』兒童はどこまでも自由を得なければならぬ。けれども、併し悪友、召使、不良少年等から、注意深く疵護されねばならぬ。それ

ゆゑ彼等は學校に遣られて粗暴な子供の間に雜るよりは、家庭で家庭教師から教へられねばならぬ。『彼等が學習すべきことは、いつも重荷となつてはならず、また課業として授けられてはならぬ。』學習は遊戯の如くあるべきである。(註七) 兒童は自由を愛するが故に、強制に服従せしめられたり、嫌なときに無理に事をなさしめられてはならない。彼等は説得さるべきであつて、小言をいはれてはならない。世間に就ての、人間に就ての、及び人間の弱點に就ての知識は、書籍に就ての知識よりもいい。そこで私教師は紳士にして、學者よりは寧ろ世事に通じた人であらねばならぬ。『私教師の下に於て、青年が立派な批評家、雄辯家、若くは論理學者となり、形而上學、哲學、若くは數學の根本を究め、或は歴史とか年代記とかの大家となるべきだと誰が豫期するものぞ。たとひこれ等の各學問の或るものが青年を教ふるに足るものであらうとも……けれども彼は、よき躰け、世間の知識、徳、勤勉、名聲の愛等とはとめどなく有すべきである。もし彼がこれ等を有す

れば、他のことを必要としたり、或は欲求したりすることは最早なくなつて來る。』兩親は兒童の信用を稜ち得て、それを保持し、さうして彼等の最良の友となるために、あらゆる努力をすべきであり、同時に頑固、虚言、意志惡るさ、豪がり等を厳しく矯正せねばならぬ。兒童の好奇心を満足せしめ、彼等の收穫を得意がらしめるために、矢張りあらゆる努力をしなければならぬ。彼等は相互に謙遜で、正しく、さうして寛容であるやうに教へられねばならぬ。寛容なる兒童は、寛容ゆゑに損を招くやうなことがあつてはならぬ。』彼がかかる自由寛容を示す場合には常に利子を添へて報わられていい。また彼をして彼が他人に示したる親切は、彼自身に對して決して下手な遣り口でないことをそれと認めさすがいい。』哀哭は許さるべきでない。無謀は馴らされねばならぬけれども、勇氣と大膽とはどこまでも養成さるべきである。好ましからざる趣味は、抑制によつてよりも、寧ろ満腹によつて癒さるべきである。競技と遊戯とは獎勵すべきであるけれども、

兒童自身が作つたもの以外、遊び道具はあまり多く與へてはならぬ。兒童が惡事をして、それを白状したるときは、許して賞めてやるべきである。

教育の目的は、徳、聰明、よき躰け、學問である。徳の根柢は、『獨立の最高實在、あらゆる事物の創立者たる神に就ての眞觀念を有し、且つ眞理を愛する所に存する。その神より吾々は一切の善を享け、その神が吾々を愛し、吾々に凡ての事物を與へ給ふのである。』『予は聰明を、普通の意味に解し、人々がこの世に於て先見を以てその業務を巧みに處理すること、なすのである。』よき躰けの根本原則は、『吾々自身を賤しく考へず、また他人をも賤しく思はない』ことである。

教育の目的のうち、重要な點に於て學問が最下である。『兒童には學問をさせるに瞞してさせるがいい。讀み方を覺えるにも、それが遊戯以外のことであると認められてはよくない。人が鞭撻して教へられるものを戲れながら覺えるやうにしなればならぬ。兒童は、仕事の如きもの、即ち生眞面目なるものを課せらるべき

ではない。『出来るだけ彼（兒童）をして元氣づけて、それ（読み方）を學ばしめよ。けれどもそれを彼れの仕事たらしめるな。』もし彼が讀み得るならば、イソップの寓話（繪のあるもの）、『主の祈り』（*Paternoster*）、『信仰簡條』（*Creed*）及び『十誡』（*Decalogue*）を讀み始むべきである。寓話は全體としてよき教科書ではないけれども、その或る部分は教科書として使用して差支ない。讀み方が終つたならば書き方と圖畫とをやらねばならぬ。速記術も必要であらう。次は語學で、そのうち最も重要なのはフランス語とラテン語とである、兩方とも會話によつて自然的に學ばねばならぬ。英語は等閑にされてはならぬ。『ラテン語は、紳士には、さうして紳士に對してのみ、絶対に必要であると思ふ』とロックはいつてゐる。文法は、或る國語の批判的知識を得たい人、若くは職務上その國語を用ゐなければならぬ人へのみ教へらるべきである。諸國語と共に諸科學——地理學、天文學、算術、年代學、解剖學、歴史、幾何學、植物學、地質學等が學習されねばならぬ。

これ等は抽象的論理學や形而上學よりもいゝものである。ラテン語の論文、演述及び詩は禁物である。凡て詩に向ふ傾向は嚴重に制止されねばならぬ。『世界で予の最も奇異に感ずることは、詩が大切にされたり改善されたりすることを父自ら欲したり許したりすることである。予は思ふに、兩親は出来るだけ詩を制し止むることに努力すべきである。……何となれば「詩神の山」(*Parnassus*) に於て金銀鑛を發見することは、極めて稀であるからである。それは愉快な風光であるけれども、不毛の地であつて、彼處から刈り集めたるものによつて、世襲財産を殖やした人の例は殆どない。普通相伴ふ詩と競技とは、他に生き行く道を知らない人々以外には、あまり利益を齎らさないといふ點に於て矢張り同一である。財産家は殆ど常に損失者を寄せ付けない。倫理學は聖書と「ツリイの義務に就て」(*Cicero, De Officiis*) とに於て研究すべきであり、歴史と關聯して最も有用なる民法はブフェンドルフとグロシウスとの著書に於て研究すべきである。『有徳な行爲

の立派な青年、民法の大體の部分に十分通曉する青年は、……ラテン語をよく了解し、さうしてそれを上手に書き得る。人は彼がいつに於ても職業と尊敬とを見出すであらうといふ大なる確信を以て、彼を世間に解放することが出来る。』

文法、修辭學及び倫理學はあまり重く考へられないけれども、併し『紳士の缺點として文章か談話かに於て自己を十分表現し得ないこと以上の大なる缺點はない。』英語で手紙を書くことに特に注意を拂はねばならぬ。『予の想像では、吾々は臆測的科學としての自然哲學の如きものを有しない、又そんなものから科學を作ることには出来なからう。これは恐らく正當にいへることのやうに思はれる。自然の作用は或る智慧によつて目論まれるので、吾々はそれを常に科學に還元することを得ず、また發見することも工夫することも出来ないほど、吾々の能力を遙かに超越する方法によつて營まれる。自然哲學とはあるがままの事物それ自身の原理、性質、作用に關する知識であるから、それには多分二方面があるであらう。一は精神

(その本性と品質)を包含し、他は肉體を包含する。前者は通常而形上學に關係する。如何なる名稱の下に精神が考察されようとも、それは物質と肉體との研究以前に來らねばならぬ。併しそれは體系化されたり、知識の原理に基いて論じられ得る科學としてではなく、吾々が理性と啓示とによつて導かれる知識的世界のより眞實な、より完全な理解の方へ向へる心の擴大としてである。さうして神及び吾々自身の靈魂以外の他の諸精神に就て吾々の有する最も明確な最大の發見は、啓示によつて天から吾々に授けられるのであるから、少くとも青年がそれ等に就て有すべき知識は、啓示から得らるべきものであらう。この目的のために、もし青年の讀むべき聖書のよき歴史が作られたなら、定めしいことだらうといふのが予の結論である。……さうなれば、兒童達は絶えずそれを讀むことにより、その歴史のさまざまな處理になすべき多くのことを有しながら、諸精神に就ての觀念と信仰とを教へ込まれ、それが肉體の研究によい準備となるであらう。何となれ

ば、精神に就ての觀念と推定となくしては、吾々の哲學は、創造の最も優れた最も有力なる部分の觀察を忘れることになつて、その重要部分に於て不具となり缺陷あるものとなるだらうからである。……『予がこれを肉體の研究に先立つて叙べ、さうして青年が自然哲學に入る以前、聖書の教義が十分吸收されねばならぬといふ理由は、物質が吾々の凡ての感覺と絶えず關係ある事物である所から、それは心を所有せんとしたが、また物質以外の他の一切のものを排除せんとしたがるが故に、さういふ事實を原理とする偏見は、往々にして精神を許容する餘地を残さないことになるからである。即ち、自然物のうちに(in rerum natura)非物質的のものを推定する餘地を残さないことになるからである。所が單なる物質や運動によつては、自然の大現象が一も理解され得ないことは明かである。普通の重力の現象に例をとつても、それは物質の自然的作用や運動に就ての他の如何なる法則によつても説明不可能であつて、それを支配する最高實在の絶對意志によ

つてのみ可能であると予は思ふ。』併しこれにも拘らず、自然哲學に就て何等かを知ることには、「紳士」にとつていいことである。『かかる書物はボイル氏の多くの書物の如く、農業、栽培園藝及び同様のことに就て物された他の書物と共に、紳士に對して適するであらう。もし紳士が自然哲學の體系を幾らかなり心得てゐる場合に。』「比類なきニュートン氏」の著作は特に研究の價值がある。

ギリシア語はあらゆる言語と等しく價值があるけれども、成人に達するまでは研究してはならぬ。舞踏(下等なジグ式(二拍)でない)は早くから習はねばならぬ。擊劍と乗馬とは危険であるけれどもいいものである。音樂はあまり重んずべきものでない。『それは青年をしてほんの適度の熟練を得しめるだけでも多くの時間を必要とし、またそれはイツをやめた方がいいと多くの人々が思ふほど、變な仲間にも屢々加入せしめる。予は才能ある人士や實業家の中に於て、音樂に堪能なる故を以て稱讚されたり尊敬されたりした人を殆ど聞いたことがない。かくし

て藝能の目録の中に入るあらゆる事柄のうちで、音楽を最下位に置いて構はないと思ふ。』

休養の問題に關しては、ロックは幾分新しい見解を有する。不生産的な娯樂に對して大なる親しみを有せず、賭博(トランプと骰子)などには斷然反對して、彼は眞面目な休養を求めるあらゆる紳士に向つて、職業或は手藝を修得するやうに忠告した。繪を描くことはいいけれども、あまり坐業的なのが缺點である。園藝、農業及び大工仕事は一層いい。『例へば香をつけるとか、ワニスを塗るとか、彩色するとか、鐵、眞鍮、銀などでさまざまな細工をするとかに對しては何の反對もない。大抵の青年紳士のなす如く、多くの期間を大都市に於て費すならば、寶石を切り、磨き、鏤めることを修得し、或は眼鏡を研ぎ磨くことに従事することが出來よう。』簿記は自己の勘定を始末するために、あらゆる紳士によつて學ばねばならぬ。外國旅行は勧められるが、併し普通企てられる年齢(十六才から

から二十一才まで)に於てはいけない。旅行は年少の時代か晩年かにすべきで、青年の生活中での最も危険な時期にしてはならない。

以上はイギリス紳士の躰けに關するロックの、寧ろ非體系的な著作の概要である。それはロックの書いた凡てのものと同様に、散文的な常識と満足した俗心とで特色づけられてゐる。彼は藝術、科學、哲學、或はそれ等が人間に對して影響する所のものに、あまり興味を有しなかつた。彼れの目的とする所は訓練であつて、教授ではなかつた。彼はよき躰けに對して必要である程度の、これまで承認せられた眞理教授をなすことを欲したけれども、獨創的思想を喚起せしめたり、或は青年を誘導して自身の新しい進路を拓かしめるやうな努力をしなかつた。彼は眞の道徳若くはそれに伴へる「光輝ある自由」に就ての觀念を有しなかつた。『想像され得るあらゆる技術によつて仕込まねばならぬ』といつた彼れの倫理的動機たる「稱讚と名聲との愛」は、本質上不道徳的であり、さうして空虚な氣

取屋と生意氣な俗物とを作り得るに過ぎない。彼は義務の觀念を喚起し、或はそれを行動の源泉として用ゐることに努力しなかつた。彼は人々をして社會的環境の奴隸たらしむることによつて、感情の奴隸たることから救はんと欲した。彼は自然科学の研究法と目的とに就て何の觀念もなく、依然吾々をして、啓示によつて最もよく知られる「精神」に、世界の説明を求めしめた。かくして科學はなほ神學の召使であり、さうしてあらゆる種類の迷信——ものつき、魔術等——が勝手に入込みまゝになつてゐた。彼は今日いはゆる「不可知論者」であつて、その不可知論を迷信の下に隠さんと力めてゐる。(註八) 一層高度の思想範圍に於ては、彼れの見地は本質上デュスイット派のそれと異ならない。彼は教育に於ては神の權威の代りに禮節ある社交界の權威を用ゐ、僧侶の代りに土地を所有する紳士社會を以てした。彼れの哲學の不十分は、それがバークレイとヒュームとの手に移り行くとき明かになるであらう。またその教育體系の不十分は、ルソウによつて解釋さ

れるとき明かになるであらう。ロックは近代懷疑論の父であつて、その相關物たる近代無秩序主義はフランス革命の中に最もよく表現された。世界はこれ等を通過してから始めて科學と自由政治との地盤に達すべきであつた。

デカルト及びロックの貢獻を除いては、第十七世紀は教育に盡す所が少かつた社會的並に宗教的の他の興味の方が一層人心を奪うた。「女子の教育」(Éducation des Filles)を著述したフェネロン、それからマダム・ド・セザンニエ、マダム・ド・マンテノン、ロラン及びその他の人々の努力は、教育を人道化せる上に幾らか盡した。けれども彼等は凡て古い基礎に手を觸れずに置き、また新原理を起しもしなかつた。「キリスト教學校の兄弟」のなした事業に就ては既に言及したからここには述べない。

(註一) ペエコンは、ルーターや、ラムスと等しく、彼れの理解しなかつたアリストテレスに對して不公平なほど過酷であつた。ルーターやノックと同じく、彼はコペルニカスの天文學を拒否した點で、痛ましくも科學的精神の缺乏を示した。

(註二)コメニウス(Comenius)は本来「Komensky」といひ、一五九二年モラヴィアのニヅニツツで生れた。早く両親を失ひ、ストラツスニツク、ヘルボルン(ナツサク)、アムステルダム、ハイデルベルグで學んだ。一六一八年フルネツクに於て「モラヴィア兄弟學校」の校長となり、その年僧職を授けられ、結婚した。一六二七年迫害されて追はれ、スキューデン、イギリス等數ヶ國の教育を管理するために招かれた。一六四一—四八年プロシアのエルプロクで活動し、ポーランドのリツサに行つて、モラヴィア派の首席僧正となつた。一六五〇—五四年トランシルバニアに逗り、同年リツサに歸つたが、リツサはポーランド人に焚かれたため、彼も全財産を失ひ、アムステルダム、即ち彼れの保護者ド・ザイルの許に退かればならなかつた。靜かに晩年を送つて、教育的著述の完全なる版を出版し、一六七一年死んだ。

(註三)シェークスピアの「Tempest」に於けるプロスペローと同様である。

(註四)彼れの後繼者カバニス(Cabanis, 1757—1808)は「生ずるは感ずる、*à l'instar de*」(「Vivre c'est sentir」)といつた。

(註五)彼がこれをなしたのは、いふまでもなく全然よくない。けれども彼れの誤りは一時いい貢献をなした。

(註六)ジョン・ロック(John Locke)はブリストル附近のリンケトンで生れた(一六三二年)。先づ「ウエストミンスター學校」で、次にオクスフォードで學んだ(一六五一年以後)。自然科学とウキリアム・オプオカムやデカルトの著書に注意し、ブランデンブルク朝廷へサー・ウォーター・ヴェーンを伴つて行つた。

(一六六五年)。アツシレー卿の醫師及び友人となり、後にはシヤフツベリー公爵家のそれとなつた(一六六七年)。ノオサンパーランド公爵と共にフランスとイタリヤとを旅行した(一六六八年)。官途に就き(一六七二年)南フランスに暮し(一六七五—七九年)、次にイギリスに歸住し(一六七九—八三年)、次にオランダに於てメンブローク公爵と共に生活した。「人間悟性に関する論文」(Essay on the Human Understanding)を出版し(一六九〇年)。サー・フランシス・マシヤム家に於てその餘生を送り、その、一七〇四年七十三歳にして歿した。

(註七)アリストテレスは一層賢明に述べてゐる。「教育は決して娛樂の手段にされてはならぬ」何となれば凡の學習は苦痛を伴ふもので、青年が學習してゐるときは遊んでゐないからである。」

(註八)ノアの洪水は神が地球の重力中心點を變ずることに基いたものだらうと彼は考へるのである。

十八世紀のイギリス人は、事業若くは娛樂として、或は兩者を兼ねるものとして、非常に熱心に農業を勵んだ。それは當時の「支配的農業」であつた。

ロオザヤース

第二章 第十八世紀

第十七世紀の終つたとき、宗教改革と學藝復興、コペルニクスの天文學及びアメリカの發見、ベエコン、ホッブス、デカルト、ロック等の哲學、一六四九年並に一六八八年のイギリス革命は、想像すら殆ど架橋するを得ないほどの深淵によつて、中世紀から近代を分離せしめた。生活のあらゆる範圍に亘つて、教權は眞理に、さうして眞理から生ずる自由に代りつつあつた。國民的及び宗派的排他心は人道と自由研究の精神に道を譲りつつあつた。凡てかかることの結果が教育にも現れてゐた。それは徐々に社會の全階級に及び、僧侶の手から俗人の手に移つてゐた。ラテン語よりも日常の言語が用ゐられつつあつた。自然と近代文化との研究はますます注意を受けてゐた。人々は過去に生くるのではなく、現在に生くるやうに教へられてゐた。けれどもこれ等凡ての變遷を以てしても、前二世紀の大



運動中に活躍したる精神はまだ完全なる表現を得てゐなかつた。宗教改革と、學藝復興とは自己の主義を詐つて、眞理と自然との傍らに、教權と超自然とをして場所を占めさせた。新精神を表現せんとしたる哲學は、接神學と偏執とに仲直りした。賢明な心の寛いロックですら無神論者に對して思想の自由を拒否し、デカルトはあまりに臆病でコペルニカスの天文學を承認し得なかつた。イギリス革命は「神の恩惠による」國王を依然としてイギリスにをらしめた。

それにも拘らず前進的運動は制止されず、さうして夫を制止する企圖はたゞ革命と破壊とを齎らしたに過ぎなかつた。宗教改革と學藝復興とはそれぞれヴォルテールとルソウとに殆ど完全に表現された。ロックの哲學は全中世紀的事物若くは思想を根掘り葉掘りしたヒュームの絶對的壞疑論の中に完全に表現された。イギリス革命の精神は、アメリカの獨立とフランス革命とに完全に表現された。凡てこれ等の表現に於て、この前進的運動の目的の不確かなことや方法の不定なこ

とが眼に付いて来た。それはまだそれ自身の意義をよく知らなかつたのである。第十八世紀の前半に於ては、教育に著しい進歩はなかつた。それは暴風雨の前兆たる静穏時代であつた。この静穏は、一七五〇年ルソウが(註一)文明に對する痛烈なる論戰と、人間は「自然の状態」に歸らねばならぬといふ要求とを以て、文學界に出現したことによつて、手ひどく破れた。自身敏感にして懶惰な、さうして訓練なき人物であり、凡ての道德的抑制に耐へられなかつたから、彼は自己の存在を正當とし、彼が最良の人間の一人であることを(彼がなしたやうに)肯定して呉れる世界を構成し始めた。このことが彼れのあらゆる政治思想及び教育思想の眞の源泉であり、これ等が廣大な影響を及ぼした所以である。前世紀の中葉に於てデエスイット派とカルピン主義者との抑壓的、超自然的教育は、理性と自然とに向へる進歩的思想と歩調を共にすることが出来なかつたが、それが却て自由にとつて好都合にも、強い反動を惹起したのであつた。その反動は初めは當

然誇張され、向ふ見ずであつた。所が遂に自然はルソウのうちに發言を得、理性はヴォルテエルのうちに發言を得た。兩者とも啓示なるものに反對したのである。

人間はその向上的進歩に於て、自己を人類の制度に服従せしむることによつて自然の奴隷たることから自己を解放した。さうして制度を自己の社會的自然の表現たらしむることによつて、またそれから自己を解放し、かくして全く自由となる望みがある。然るにルソウはこれを知らず、また自然に對する繫縛を以て少しも奴隷的とは認めなかつたから、制度をたゞ腐敗偏曲せる勢力を有するものとして拋棄し、非社會的野蠻状態に歸ることを人々に要求した。これは彼れの政治的三論文、殊に「人間は自由の身として生れるが、いづこに於ても束縛されてゐる」といふ語を以て始まる「社會契約論」(Contract Social)の要旨である。彼れの教育上の著作の主なるものは「エミール」(Emile)であるが、それは非社會的教育

の計畫を立てんとしたもので、その具體化を彼はロビンソン・クルーソーの中に發見した。(註二) 彼はその材料を多くモンテエヌとロック、別にも後者からとつたのであるが、彼等の立場は彼に取扱れて屢々その根本的弱點を示してゐる。ロックが強固な社會を支持し、これに向つて人々を教育せんことを欲して立てた原理を、ルソウはとつて以てあらゆる社會の顛覆手段及び野蠻生活の教育手段に化せしめた。ロックの倫理的制裁、即ち社會の是認といふことを全然無視して、彼は自然の殘忍な必然性以外、如何なる制裁にも頼らなかつた。さうして實にこの必然性こそ彼れの頼らんとした唯一のものであつた。普通解釋される如く、必然性の別名に過ぎない自然は、(註三) 教育に於て最も重要な根本的役目を演じるので、ルソウはそれをそれ自身の範圍に於て擁護する限り、彼は卓越したる事業をなしたことになる。けれどもそのため教育全體を要求するに至つて、彼は非常な害毒を流したのである。彼がロックに従つて、兒童のために自由、運動、

新鮮なる空氣等を要求するとき、吾々は彼に全く同意出来る。けれども彼が、兒童は學校へ遣られないで家庭に於て私教師の下に置かれねばならぬといふとロックの要求を曲解して、兒童は家庭と社會とから分離されて如何なる場合にも粗野なる自然の一部のやうに振舞ふ私教師の手中に單獨に置かれねばならぬといふことだとするならば、彼は兒童をして非人間的たらしめ、社會的乃至道德的意識の發達を不可能ならしめてゐるのである。ロックは一方に於て凡ての教育の缺くべからざる條件として、道德的訓練を非常に重んじたけれども、他の一方に於て甚だ愚かにも、兒童に仕事を課してはならぬといつたり、兒童は讀む事すら「瞞され」欺かれ「て學習すべきだといつたりした。ルソウはこの原理を擴張して、教育全體を欺瞞たらしめた。彼れのエミールは事毎にだまされすかざるべきであつて、さうしてこれが可能であるといふことは彼れの教育に對して最も憐れな裏書をする譯である。エミールの導かれる動機は凡て利己的、非社會的性質のもの、また實

に殆ど常に肉感的のものである。肉感的享樂が眞の生活であるとルソウは要求する。彼曰く『現在を不確實な將來のために犠牲にし、あらゆる種類の束縛を兒童に負はし、さうして多分享受しないだらう所の或る遠い空な幸福に備へしむるために先づ兒童を悲惨ならしめる、さうした野蠻な教育に就て吾々は何を考ふべきであるか。……如何に多くの兒童が、父若くは教師の無法な智慧のために死し、その犠牲となることであらう。父よ、汝は死が汝の子女を待てる時機を知つてゐるか。……彼等が生活の快樂を感じ得るや否や、彼等はそれを享樂することを知れ。また注意せよ……彼等が生活を味はずして死なないうやうに。憐れむべき先見は、生あるものを將來に於て幸福ならしむるといふ悪い考へに基いた希望の下に、彼を現在に於て不幸ならしむるものである。……凡ては人類の制度にあつては愚かしくも矛盾してゐる。……先見とよ、先見は常々吾々が吾々自身を超越せしめ、屢々實際に到達し得ないやうな境遇に吾々を置く所のものであつて、吾々

の不幸は悉く實にそこから始まる。人間の如き短命なるものが、殆ど來ることのないやうな遠い將來を絶えず眺め、彼に取つて確實なる現在を等閑にするとは、何たる馬鹿なことであらう。自己の欲することをする人のみが、かくするため、他人の腕を以て自己の腕を補ふ必要のない人である。従つてこのことから、あらゆる幸福の第一は權威にわらずして自由であるといふことが生ずる。これが予の根本的標語である。吾々はそれを兒童に應用しさへすれば足る。教育の法則は凡てそれから生ずるであらう。』

蓋し筆者は、これ等の意見に評論を加へたる、筆者自身の「ルソウ評傳」の章句をここに引用することを許されるであらう。「生活の目的は幸福であり、さうして幸福は、高尚すぎる事物に對して考へることも、計畫することも、若くは熱望することもなしに、否他の何事にも關係なしに、過ぎ行く各瞬間の肉感を享樂することである。深い洞察、強く正しい感情、及び行届いた善行的意志の神聖なる

生活、それから社會に於てまた社會を通じてこの生活を實現せんための人間の結合ほど、馬鹿げた矛盾したものは無い。定められたる場所に於て禽獸の如き生活をするのが、人間の主なる目的である。或る兒童は青年若くは成人に達せずして死するのだから、訓練により、自制的な絶えざる仕事により、或は將來に就ての思惑によつて、現在のさまざま無邪氣な快樂を奪ひ取ることは残酷である。訓練と克己とはそれ自身價值あるのではなく、たかだか將來の快樂の手段に過ぎない。快樂を得ずして死する兒童は「生活を味ふ」たのではない。彼れの精神的收獲、或はその性格の美と高尚とがどうあらうとも、彼れの生活は失敗であつたのだ。現在の快樂を妨害するものは何によらず禍である。

「人類生活と教育とに就てこれ以上の憐れむべき觀念を作ることとは殆ど不可能であらう。それには道德的な若くは高尚な特性は何もない。實はルソウが全く感覺的な訓練なき衝動の人であつたために、寸時も道德的生活の意識に達しなかつたのである。」

である。」

彼は實際道德的生活を甚だしき間違ひであると思つた。エミールに就て述べて曰く、『彼はその行動に全く道德を缺いてゐたから、道德的に悪いことや、懲罰や譴責に價ひすることは何もし得ない。』彼は知的生活すらあまり重じない。曰く『兒童の肉體、その器官、その感覺、その力を習練せよ。けれども彼れの心を出來る限り怠惰ならしめよ。……凡ての遲滯を利益と看做せ。兒童性を兒童のうち熟せしめよ。……課業を與へねばならぬにしても、明日まで延ばし得るならば今日それを與へるな。』

エミールの反社會的教育の段階を更に進んで跡づけることは無用のことであらう。それは全く馴し易き動物を作ることと目的とせるものである。實にそれは育ちのいゝ犬の受ける教育と異らない。勿論彼は職業を學ぶ。何となれば彼はそれのでその手を使用するを得、従つて社會から獨立するやうになるからである。け

れども彼は凡ての知的及び社會的文化を斥けた。『讀書は兒童の呪ひである。』さうして「吾々の誤りは吾々の判断から生ずるのであるから、決して判断しないで置きさへすれば、吾々は學習しないでも済み、また吾々自身を欺き勝ちにならないでも済むことは明かである。吾々は知識に於て幸福であり得るならば、無智に於て一層幸福であらう。』

年の經つにつれてエミールは妻を娶るまでの資格がつく。かの立派な天才、家庭教師のお蔭で、いゝ配偶者は用意された。こゝに於てルソウは、女子教育に關する彼れの意見を吐露する機會を得た。その意見は吾々の豫期し得る通りのものである。『女は男を悦ばせるために作られた。……かくして女子教育は凡て男子に關係を有する。男子を悦ばせること、彼等に役に立つこと、彼等の若きとき養育すること、彼等が成長したるときかしくこと、彼等の生活を愉快な愛すべきものたらしむること——これ等は常々の女子の義務であり、また極く幼少のときか

ら學ばねばならぬ事柄である。……女子は抜け目なく、よく働かねばならぬ。何事にもまして、彼等は早くから壓制に服従しなければならぬ。……彼等は最初から束縛のうちに働き、それは彼等に何の苦もないやうに考へられねばならぬ。また他人の意志に服従するために、彼等の想像を征服するやうに教へられねばならぬ。……この慣習的束縛の結果として生ずるものは従順であつて、これは女子が如何なる生活に處しても必要なことである。何となれば彼等は必ず男子の判断以上に出づることを許されず、従つて男子若くはその判断にどうして服従せねばならないからである。女子の第一の、さうして最も重要な特性は、愛らしいといふことである。よくも悪徳に満ち、常に缺點だらけである男子といふ不完全なものに服従するやうに作られてゐる女子は、幼少のときから不正にすら服従し、不平なしに夫の悪事を耐へることを學ばねばならぬ。……彼女は決して小言をいつてならぬ。……男子は彼れの知ることを語るのであるが、女子は男子を悦ばすことを

語るのである。……それゆゑ女子のおしやべりを止めてはならぬ。……彼等は自分と話してゐる人々と一致すること以外のものを語らないといふことを規則となさねばならぬ。……女子は職として媚びへつらふものである。』云々

エミールは案の如くソフィーと激しい戀に落ち、さうして適當の時期に婚約する。單に肉感的動物として養育されたるこの青年は、それ以來、俄かに禁慾者のやうに行動することを要求される。結婚に先だち、彼は全く自然に逆つてソフィーから離れ、世界を見がてら永住すべき適當の地を發見するために、二年間旅行すべきことを頑固な家庭教師から命令される。その別れの光景は、ルソウに滑稽の觀念のなかつたことを示してゐる。時經てエミールは禁慾者らしい獨立心を養つて來て、ソフィーと結婚し、子供を授けられる。その子供の出生に際してエミールは家庭教師に向つていふ、『わが尊敬する先生もつとゐて下さい。さうして吾々を忠告し監督して下さい。吾々は従順です。私の生きてゐる限り貴下が入用で

す。今や一人前の人間としての私の役目が始まつて見れば、以前よりも一層貴下を必要とします。』エミールの受けた教育に對する判斷としてこれ以上の嚴しい判斷を加へることは出来ないであらう。彼は夫であり父でありながら、自己を教導する力を有せずして、全く他人に依頼してゐるではないか。尤もこれは當然のことであつたかも知れない。何故なれば、彼はいつも自己を教へ導いてゐたといふ信念に欺かれてゐたとはいへ、その實、家庭教師の手中に於ける單なる人形に過ぎなかつたから。

暫らくして家庭教師はその監督を止める。するとあらゆる種類の害惡が發生する。從來田舎の閑靜な處に住んでゐたこの憐れな人々は、都會へ行つて人中に交つて生活するやうに誘惑される。ここでエミールなみだらな趣味を覺え、ソフィーは徳を失ふ、それといふのは、かかる無經驗の人々には豫想され得る通りのことである。幾變遷のあつた後、エミールは一孤島（ロビンソン・クルソーの島

か)に行くのであるが、驚いたことには、ソフィーもそこで女祭司を勤めてゐることが解る。いろいろと言譯の末、仲直りが出来て、二人は、最早十分世の中を見て來たし、またそのヒドい影響を自身で試しても來たから、今や「隱遁者」としてその孤島に逗り、その後は永久に幸福である。

かくの如き結果を生む所の教育方針に、兎角の判断を加へるのは恐らく不必要であらう。それはそれ自身を評價してゐる。實際、もしそれが花やかな僻論と感傷的な訴へによつて世界に捲き起し、また不幸にも今なほ捲き起してゐる所の感覺なかりせば、それに對して、ここに以上ほどの注意を拂ふに當らなかつたであらう。ルソウは教育上進歩したる貢獻をしなかつた。彼れの教育方針中の眞なるものは大部分ロックに負うてをり、彼自身のものは誤れる欺瞞的のものである。彼は下層階級に非常な同情を有する風であるけれども、彼等が教育されることに反對である。『無智は天福である。』彼は殆ど教育の方法も目的も知らなかつた。さう

して彼と同じやうな殆ど何も知らない人々の間に彼があれほどの人氣があつたのは、ただ彼れの巧みな獨斷的な感傷的文體に基くといふのが、本當のことである。彼れの無秩序的、非社會的個人主義と端的な肉感的快樂の要求とが、ヴォルテールの凡てを破壊する知的懷疑論と合體してフランス革命を惹起し、その革命に、よき方面ではあまり取得がないといふ特質を與へた。ヴォルテールは古き神學的社會羈絆を破り、ルソウは人々に理性の新羈絆を求むることを禁じた。(註四) その結果は盲目的反動を繼起せしめた恐ろしい革命に外ならない。もしフランスが今日神學的權威と肉感的無秩序主義との相反する主張に引裂かれてゐるとすれば、吾々はその理由を容易に知ることが出来る。

第十八世紀の太陽は血に塗れながら沒した。何となれば古き道德的制裁が亡びて、新しきそれが發見されなかつたからである。かかる新しき道德的制裁が發見され、教育と文明とが一層高き地歩に發展するまでには、眞理と自由とに向つて

ますます進んで行く運動に眞の解釋を與へ、世界並にそれと人間との關係に就て新しい見方を供する新哲學が發生せねばならなかつた。さうしてその新哲學は、半スコットランド人、半ドイツ人のイマヌエル・カント(註五)の心の中に(大變動に役立つにはあまりに遅く)發生した。或は寧ろ發生してゐたのであつた。さうして彼と共に世界の精神的歴史の新紀元が始まるのである。

(註一)ジャン・ジャック・ルソウ(Jean-Jacques Rousseau)はジュネーヴで生れた(一七二二年)。生れたとき母を失ひ、七歳までは家庭にあつて、感傷的小説を讀破する。ボアセイの學校に通ひ(一七二〇年)公證人の、次で彫刻師の弟子となり、それも不首尾でカトリック教徒となり、宗教的修業のためにチュリンに遣られ(一七二六年)、ジャンベリイに歸つて(一七二九年)、輕佻なマダム・ド・ワレンと同棲する。暫らく彼女に見捨てられて、再び彼女の許に歸り(一七三二年)、一七四一年までそこに返つて科擧と哲學とを讀み散らし、パリに行つて(一七四一年)、作曲家となつて運試しをする。そのうちテレエス・レヴァシウムを迎へて共に暮し(一七四四年)、子女を棄兒養育院に送る。藝術と科擧との道德的效果に就て論文を書いたのは一七五〇年、不平等論を書いたのは一七五三年である。ジュネーヴに歸り、さうして新教に改宗する(一七五四年)、モンモランシイ附近の隱舎に住し(一七五六年)、そこを去つて近く

に小屋を手に入れる。「新しきエロイズ」は一七五九年に、「社會契約論」及び「エミール」は一七六二年に書く。痛烈に迫害されてスイスに逃がれ(一七六一年)、そこからデキツド・ヒュームとイギリスに渡つて(一七六六年)、フランスに戻る(一七六七年)。三年間テレエズと共にさまよひ、パリで簡素な生活をする(一七七〇年)。病的となり不幸に陥る。「對活」と「思ひ出」とを書く。一七七八年五月保養のためエルメンノンギユに行き、同年七月二日に死んだ。彼れの遺骸は一七九三年十月十一日パリのパンテオンにうつされた。詳しくは予(著者)の「Rousseau and Education According to Nature」参照。(註二)長、間クエーカー派の愛したるもので、一層彼れの目的に叶へるイブニング・トウプアイの「Havy Ibn Yorkhan」を彼が知つてゐたやうにも見えない。

(註三)ギリシアに於て必然性(αβαιζα, πορφα, αναγκη)の觀念が、自然(φαινη)の觀念に發展したのであつた。

(註四)同じやうな場合に、ソクラテイスもこれをなしたのであつた。併しフランスにソクラテイスらしい人はゐなかつた。

(註五)イマヌエル・カント(Immanuel Kant)は一七二四年ケーニヒスベルグに生れ、學生として、私教師として、圖書館員として、及び教授としてそこで全生涯を送つた。時代を劃する彼れの著書は、一七八一年に現れた「純粹理性批判」である。一八〇四年に死んだ。

第三章 第十九世紀

第十九世紀の精神生活を支配する天才は、近代のソクラテースたるカントである。併しここは彼れの心的發展を説明すべき場所ではない。彼は前三世紀のあらゆる前進的運動を自己のうちに攝取し、全力を盡してそれ等を調和せしめた、といふことをいへば十分である。デカルトとロックは彼れの心内に會した。彼はウォルフの獨斷論をヒュームの懷疑論に對立させたが、兩者孰れも不満足なるを知つた。近代のプロタゴラスたるヒュームは、古代及び中世紀の獨立的、既定的の思想世界を完全に瓦解せしめ、人々が彼等自身の印象と觀念とから成る世界以外の世界の存在を證明することを得ざらしめた。ここに烈しい個人主義が生れた。カントは、ヒュームが論破され得ないこと及び彼が哲學問題の形勢を完全に變化せしめたことを明かに認めた。外界に存在し、思想から獨立する世界が、如何に

して人間意識の中に現れるか、といふ古い問題は、今日では、自分自身の經驗からのみ自分自身の世界を構成してゐる心が、その經驗の外部に、またそれから獨立して、他に世界の存在することを如何にして考へるやうになるか、といふ新しい問題に變つてゐる。世界は如何にして心に入り來りしかの問題ではなくして、世界は如何にして心の外に出でしかの問題である。心は如何にして既存の世界を役立たせるかの問題ではなくして、心はそれが存在を斷定し得る所の世界を如何にして構成するかの問題である。これは、コペルニカスの天文學が物質界に於けると同じやうに、精神界に於ける大變化であることをカントは知つた。この新見解に従へば、教育は最早世界の適用ではなくして、世界の構成である。各人は自己の心的過程によつて、自己の世界を構成する。然らば如何にしてこれがなされるかといふ問題が生ずる。さうしてカントはこれに對して答へんとする。デカルトやとロックの主觀論はこゝに成就され、新教はその哲學を發見し、自由はその

根本條件を發見するに至つた。

ヒュームに次いで、カントに最も深い影響を與へたのはルソウである。デュネー
 ヅ人の肉慾主義者とケーニッヒスベルグ人の嚴正主義者と、この兩者ほど性格と
 目的とに於て相違する二人はなかつた。而も一方は他方に對して與ふべき或る
 ものを有してゐた。ルソウには、肉感的、非社會的生活理想と教育に關する不合
 理な觀念以外に、他のものが存した。彼れの自然に對する熱愛、自然から受ける
 單純な喜悅に關する光つた叙述、重苦しくいぢけた常套を捨てて自然生活をなせ
 との主張——これ等は時宜を得たる使命であつた。世界はこれを必要とし歡び迎
 へてゐたのである。これはカントをして、眞の人間の進歩は生活に於ける進歩で
 あつて、單に知識の進歩ではないといふことを信ぜしめた。眞の生活は眞理を知
 ることよりもさう。(註一)ヴォルテールの知的懷疑論はほんの僅か彼に影響した
 に過ぎなかつた、それといふのは徹底的であつたヒュームの懷疑論と比較して生

濫いものであつたからである。

ヒュームとルソウとに動かされて、カントはこの使命を世界に、殊にその教師
 達に傳へた。各人をして自己のうちに矛盾なき合理的世界を構成せしめよ、それ
 によつて各人は社會に處して自由な、道德的、自然的生活を送り得ん。これは實
 にカントの使命の定式ではないけれども、併し彼れの意味した所のものである。
 彼れの臆病と(註二)思惟から獨立せる「物それ自身」といふ奇妙な不合理な假定と
 は、彼れの思想體系に混亂と矛盾とを齎らし、シェリングとヘーゲルとに見るが
 如き新獨斷論、それからマンゼル、ハックスレー、スペンサーの如き人々によつ
 て代表される新懷疑論(又の名は不可知論)を起さしめた。或人の原理を採用し
 さうしてその人の臆病がその原理から立てられた結論だけを無視するのは、時と
 して賢明なることである。もしこの方法をカントの場合に用ゐれば、彼れの使命
 の明かにして強きことが解らう。存在の究極と知識の究極とが同一でない以上

は、懷疑論から、また懷疑論の不誠實なものに過ぎない獨斷論から脱却することは出来ない。もしカントが、感情は存在及び思惟の究極であることを知り得たりしならば、眞の物それ自身やその他の彼れの困難は凡て消滅し、さうして道德的生活の根本條件は、彼にとつて「假定」以上のものになつたであらう。(註三) 彼れの「無上命令」も不必要になつたであらう。何となれば彼はあらゆる道德的權威の源泉を人間の胸中に發見したであらうから。

カントの死後、自由の力があまりに早く爆發し過ぎたるフランス革命の亂行と恐怖とは、自由そのものに對する反動と、中世紀精神、教權及び超自然主義への復歸を惹起した。舊教國に於ては、この傾向は浪漫的な、感傷的新カトリック教の形をとり、二三の新教國に於ては、新プラトニー主義若くは哲學的神秘主義への復歸の形をとつた。(註四) この反動は當然教育に影響し、教育を大に舊式方針と僧侶の手とに委ねしめた。それにも拘らず古へのプラトニー主義と等しくもともと進

化的であつた新プラトニー主義は、世界過程の中には秩序と發展との存在することを示し、科學に對して新しき範圍と意義とを供して、價值ある事業をなした。新プラトニー主義はカントの警告に反して、(註五) 依然として空虚な論理的抽象——存在、虚無、生成等——を取扱ひ、存在の具體的事實を以てせず、従つて自由に對しては致命的なる、勝手な誤れる結果に屢々達したけれども、併し科學と教育との材料が過程であり進化であつて、かかるものとしてのみ説明され得るといふことを主張して、非常な貢獻をなした。(註六) かくしてそれは、現實的進化のために道を開いた觀念的進化に外ならなかつた。

とはいへ、教育の進歩したのは、第十九世紀前半の舊教若くは新教の反動運動からではなく、フランス革命によつて一時的抑制を受けてゐた第十八世紀の自由追求の運動からであつた。その教育の進歩は殆ど凡てルソウとカントから發源しまた次の五項目に別ち得る。即ち(一) 教授者、(二) 被教授者、(三) 教材、

(四) 教授法、(五) 教授目的である。

(一) 教授者に關する進歩。アルクインの時代より新教の勃興まで、教育は殆ど全く僧侶の手にあつた。然るにかかる事件以來、殊にフランス革命以來、教育を僧侶の手より奪ひて、これを俗人の手に委ねんとする傾向が強くなつてゐた。それと共に教育を教會から全然引離して、これを國家に移さんとする傾向が生じた。今日に於ては、主として俗人によつて處理される國家教育の組織は、凡ての新教國は勿論、イタリヤ、ギリシアの如き舊教國乃至正教國にも一般に行はれてゐる。イデプトすらかかる組織を有してゐる。アメリカの各専門學校及び大學がその學長は僧侶に限らずと考へたのは最近のことである。今日大多數の學校は俗人の學長を有し、その數は年々増加してゐる。アメリカの公立學校に於ても、僧侶がその専門の科目——宗教——の教授すらすることの許されない傾向が著しい。如何なる宗教的教授も、一般に普通の俗人教師によつて授けられ、その大多

數は婦人である。

(二) 被教育者に關する進歩。中世紀に於ては「書物の上の學問」といふ意味に於ける教育は、殆ど全く僧侶に限られ、一方貴族は王侯や僧正の宮殿で、武術と稱せらるべきものの教授を受けた。宗教改革と學藝復興とは、書物の上の學問を一般に富者階級に及ぼしたが、貧民階級、或は勞働階級にはあまり及ぼさなかつた。ロックすらこの階級を顧みることをせず、ルソウは、この階級は教育を要せずといふことを卒直に言明した。第十九世紀の大部分を通じて各地に瀰漫しつゝあつた普通教育要求の聲の強くなつたのは、各人の生活は各人の目的であるといふカントの論辯と、フランス革命に於ける人々の(註七)自覺獲得とからであつた。現時に於ては、教育は普遍的でなければならぬといふ一般的輿論がある。またいつまでも民本的であらんことを欲する如何なる民主國に於ても、必ずさうでなければならぬといふ一般的輿論がある。教育なくしては自由は不可能である。

(三) 教材に關する進歩。教育が僧侶の手にある間は、研究題目は主として宗教と超自然物とに關するものである。單に哲學のみならず、凡ての科學は、神學に對する補助的のものといはれた。理性そのものは教權から指令を受けねばならなかつた。自然と自然科學、文化と文化科學はあまり注意されなかつた。教育は回顧的であつて古代の、殊に「啓示された」眞理を授けんと力め、屢々新眞理の侵入を恐れた。啓示は自然が何であらねばならぬかを示し、啓示の隨從者は、それが何であるかを問ふことをあまり顧みなかつた。然るに教育が國家及び俗人の手に移ると比例して、ますます自然と自然に於ける生活とに注意を向けるやうになつた。獨立的に知られたりと想像さるゝ多くの原因、若くは一原因から、結果若くは事實に下つて推理する代りに、事實を審査し、さうして事實から原因に溯つて推理し、原因を全く事實から決定する。これは神學の方法に反する科學の方法である。その當然の結果は、古代教育の問題が、禁慾的訓練を主張する命令

的問題より成れるに反し、新教育の問題は、本質上社會的生物たる個人の多方面の發達を要求する自然及び文化の事實であるといふことになつた。

(四) 教授法に關する進歩。鞭打たれる恐怖のために、暗記的に學習したり、從順を養成したりすることは、概して古い教育の方法であつた。凡て必要な眞理は既に知られてゐて、教師はたゞそれを授けさへすればよく、さうしてそれは鞭打たれて促進される記憶によつて最も容易になされた。(註八) 算術の規則すら記憶に訴へられ、それを理解する試みはなされなかつた。(註九) その上あらゆる眞理は教權に依立してゐたから、それに對する當然の態度は理解ではなくして、たゞ受納と從順とであつた。討論は、殊にヂェスイット派の學校に於ては、確かに盛んであつた。併し如何なる場合に於ても、結論が豫め知られてゐるのだから、眞理探究の風を裝ふに過ぎなかつた。理解されざる眞理は知的に服従され得ないから、従つて鞭打を必要とした。(註十) 凡てこれ等の點に於て、新教育は舊

教育に對して殆ど直接の反對に立つてゐる。新教育は教權を合理的に理解されたる眞理に依立せしめ、かゝる理解を信じて適宜な行爲をなさしめる。一言にしていへば、舊教育は服従の教育であつたに反し、新教育は自由のための、或は理解ある協力の教育である。それゆゑ後者は言葉を以て記憶を詰め込ませしむることをせず、現實の事實を直接に研究して知力を發達せしめんと努力する。それは心を指導する親であつて、心を驅使する奴隸主人ではない。それは「兒童の研究」を主張することによつて、ありのまゝに、その條件と意義とを日に日によりよく知るやうになりつゝある。さうしてその兒童の研究は、確かに、親の研究、教師の研究及び社會的環境の研究によつて遠からず補足されるであらう。

(五) 教育目的に關する進歩。舊教育の目的は、他界、來世に對する準備のためであつた。その現世に就ての見解はモアアによつて巧みに表現されてゐる。

この世はまこと移り行く姿、

ただ人にとりての幻影のみ。

歡びの笑み、悲みの涙、

凡ては偽りの輝き、惑はしの流れよ。

眞なるもの天國のほかにはあらじ。

かかる見解を以てして、現世の生活は勿論賤められ、それに對する備へも厭々ながらなされたに過ぎない。この世に屬する肉體は恥づべきほどに閑却され、或る時期に於ては無暗に虐待された。市民生活の法律が無視されて、それがために社會は屢々未開状態に陥つた。道徳的生活の道は天國に導かると考へられないで、たかだか地獄の縁に到るものと看做された。(註十二)ただ信仰と宗教的儀式の道のみ天國に達するのであつた。然るに新教育の目的は非常にこれと相違する。決して永世を輕視したり、否定したりしないけれども、現世を出来るだけ利用して、その現世を他のものの一方面、凡ての他の可能な状態の準備となすことを主張す

る。現世に於てますます完全に吾々の力を伸ばし、個人的、家庭的、社會的、政治的義務を遂行すればするほど、吾々はますますよく他界の役目と喜悅とに入る準備を整へ得るであらう。それゆゑ新教育は、肉體、靈魂及び精神のあらゆる能力に於て、社會的個人が最高の發展をなすことをその目的とする。それは人々を現在現世に於て天國を創造すべく誘導することによつて、來るべき天國に備へしめんことを求むる。新教育が中世紀風から自己を解放することに多大の困難を感じて、この大目的を自ら意識せることを常に示してゐないのは、實際に於て眞實である。けれども時の進むに従つて、この意識はますます明晰になるのである。これが舊教育と對照されたる新教育である。更に吾々は、その進歩の跡を簡單に討ね、將來の方向を指示しようと思ふ。それをなすには、吾々の注意を顯著なる諸點に限り、各國別に詳細に研究する企圖は凡て放棄せねばならぬ。これ等の顯著なる諸點は、小數の偉人によつて特徴化されてゐる。

「ルソウとカントの方針に従つて——即ち自然と理性とに向つて——教育に大進歩を齎らした最初の人」はペスタロッチであつた。(註十二)彼は第十八世紀の中葉以前に生れたけれども、その精神に於て、また特にその活動に於て第十九世紀に屬してゐる。あまり學問はなく、體系もなかつたけれども、國民を深く信じ、且つ兒童をよく愛した、この深切な熱心な人は、近代普通教育の父であるといはれるのが當然である。彼は感情の深さといふ點では、彼が非常に負ふ所のあつたルソウに似てゐたけれども、併しルソウと違つて高き道德と義務の觀念とに精神が充ちてゐた。このことが彼をして、國民が悪徳、墮落及び不幸より救はれ得る唯一の手段としての教育に、その一生を犠牲しめたのである。彼れの實際の結果は高く評價され難く、また彼れの著書は饒舌の感傷と混亂とに満ちてゐる。併しそれにも拘らず、彼は殆どあらゆる方面に於て教育に新精神と新範圍とを與ふることにも成功した。就中彼は、教育が國民全體に及ぼさるべきであること、その方法が深

切で思ひ遣り深かるべきこと、及びそれが言葉よりも寧ろ事物に、法則よりも寧ろ事實に關係すべきことを主張した。彼は單に知力のみならず、それ以上に感情、道徳的判斷及び意志を修養することを目的とした。兒童は單に知ることにのみならず、また行ふことを學ぶべきで、従つて教育は大部分手工より成るべきことを主張した。

ペスタロッチの得たる成功は、論究された計畫と明瞭な理想とによるにあらずして、彼れの熱誠な深切な人格の感化力のためであつた。ルソウが自然に對する近代的愛の親であるならば、ペスタロッチは子供に對する近代的愛の親であつて、この愛こそ教育をして嚴しい抑壓的訓練よりやさしい思慮深き指導に變ぜしめたものである。ペスタロッチに於て、自然による教育といふルソウの要求と、各人の生活は各人の目的と見られねばならぬといふカントの要求とが一緒になり、あらゆるものを渾融せしむる愛によつて實現された。もしルソウが人々に自

然の光輝を知らしめたとすれば、ペスタロッチは子供がその自然と親しくならねばならぬことを要求した。もしカントが個人の靈魂の價值を高調したとすれば、ペスタロッチはその價值が實現され承認されねばならぬことを主張した。自然の承認は科學に到り、個人價值の承認は眞の倫理學に達する。ペスタロッチ以後、人々は新しき眼を以て子供を見、彼等に新しき興味を拂ひ、自然と文化との世界に對し彼等を眞の關係に置くことの重要なるを感じた。凡ての近代教育はペスタロッチのこの精神を呼吸してゐるといつても過言ではない。それは自由のための教育であつて、從屬せしむるための教育ではない。

けれどもペスタロッチの事業は、ルソウのそれと等しく反動的性質のものであつて、凡ての反動と同じく、一方に偏してゐた。古き教育は主として記憶に注意を向け、權威によつて行はれた。ペスタロッチはこの兩者に背いて、觀察力と概括力とを發達せしめ、愛によつて行はれんことを求めた。この反動は最も有益で

あつた。併しそれは訂正されねばならなかつた。要するに記憶と權威とは、生活に於けるが如く教育に於ても正當の位置を占むるのであつて、決して閑却されることは出来ない。記憶なき観察と、權威なき愛とは、效なきことである。ペスタロッチが教授上のあらゆる實驗に失敗したのはそれを明かに示してゐる。

彼れの體系の缺陷を補ひ、それを周到完全にすることは、ペスタロッチの弟子達の仕事であつた。彼等のうちにはその時代のあらゆる優れた教師が算へられる。この仕事は先輩ペスタロッチの考へてゐたものよりも遙かに根本的であつて次のことに歸着する。即ち知的、感情的、意志的の凡ての能力に對する完全にして調和されたる習練を内部に見出し得るやうな世界を、如何にして子供の靈魂のうちを作るかといふことである。このことに眼を着ければ、子供の力を研究することや、知識が獲得され、整理され、貯蓄される過程を研究することや、感情が心から喚起されて道德的目的に對する事物の價值と一致するやうに訓練される方

法を研究することや、意志が自律的に動いて感情や嗜慾の影響以上に置かれる訓練を研究することや、最後に肉體の健康、力及び柔軟性の状態を研究することなどが必要となる。かゝる知識が獲得適用されて始めて、吾々が人道的と呼ぶ所の教育を、存在する一切のものに對して知識、愛及び意志の三重關係のうちに靈魂を置く所の教育を、十分實現することが出来る。この大事業が完成するまでにはなほ多くの時日を要するけれども、ペスタロッチの後繼者達は既にその完成に向つて驚くべき進歩をなした。彼等のうちの有力者は、ヘルバルト、フロエーベル、ロスマニ及びホレエス・マンである。

ヘルバルトの事業は、(註十三)舊教育の方法とペスタロッチの方法との結合から出来てゐて、知識獲得に於ける記憶作用と心的構成との重要を認めてゐる。精神は凡ての經驗を先驗的に決定する所のままな型、即ち感覺の形式、悟性の範疇、理性の公準等の集合に外ならないといふカントの説を捨て、彼は、靈魂は自

決の實體的單子であるといふライブニッツの考に歸り、さうしてあらゆる「觀念」は他の單子の侵入から自身を防ぐ非常に多くの努力であること——事實上それは好戰的態度の連續で、その一つ一つはそれに先だつ所のものを凡て多少制限するといふことを主張した。彼はこの基礎の上に、教育的學說と實際とにとつて缺くべからざる基礎としての心理學を構成した。(註十四)この心理學に従へば、心的活動は態度若くは觀念の一種の動力的化學であつて、その純粹の結果たるものが一定の瞬間に於ける或人の世界である。觀念は種々の力から成つてゐて、種々の類似を有してゐるから、數學の範圍内に齎られ數學的に活動する。靈魂は本來單に決定されない實體として考へらる。外部からの侵入に會へば、それは固執する態度若くは觀念をとつて來る。再び同じ方法で侵入されるれば、この態度を強め、違つた方法で侵入されるれば、最初の反動と新しき反動との複合したる態度をとつて來る。かくの如く進んで行つて、ますます複雑な態度をとり、その要

素は互に最も雜多な關係に入る。新侵入に對してとる態度は、以前にとつた態度の合成によつて決定される。既に同化されたる觀念によつて新觀念の同化されることを、ヘルバルトは「統覺」と呼んでゐる。教師の目的はこれ等の觀念若くは態度を調和せる全體たらしめ、新侵入即ち經驗をしてその中に適當なる場所を見出さしむることであらねばならぬ。靈魂の道德的性質(凡ての教育の目的は道德的性質である)は、この全體の性質と、その各部分が互に對立する階級的關係の性質とによつて決定せられる。各部分が相當程度の「利權」と注意とを要求するとき、道德的性質は完全になるであらう。

ヘルバルトの心理學に於ける重大な缺點を示すことは容易である。彼れの靈魂實體説はギリシア神話の純粹の一片であつて、正當に考究すれば何の意義もなく、不用意に承認すれば、不可知論と宿命論とに導かれる。明かに靈魂が決定的役目を演じてゐない所の彼れの觀念化學は、センチタウル(Centaurs)とラピテエ(Lapithae)

との戦争のやうに全く神話的で、矢張り宿命的に陥るのであつて、實際彼はこのことを正直に白状したのであつた。観念は感情に先立ち、さうして後者は前者間の諸關係に過ぎないといふ彼れの真理は、真理を全く轉倒したるものであつて、實は観念は感情若くはそれの集合間の諸區別であるといふことこれが真理である。下等生物は観念なくして感情を有するのである。ヘルバルトの心理學は舊式で斷片的で想像的であつて、また彼れの凡ての著書も同じくさうであることは争はれない。彼れの心は深さと體系とを缺いたのであつた。併しそれにも拘らず、彼は、(一)教育の基礎として心理學の必要を認むることによつて、(二)カントに反對した場合の如く、意識の全内容が經驗に基き、従つて教育によつて變化され得ることを主張することによつて、(三)道德生活があらゆる教育の目的であることを認むることによつて、(四)かかる生活は心と靈魂とのうちに組織される世界の性質に依立し、従つて教育によつて一層進め得られることを主張す

ることによつて、教育のために卓抜なる事業をなした。ヘルバルトの後継者は彼の誤謬を正し、機械的な宿命的な要素を彼れの體系から取除き、さうしてその長所を救ふことに多大の努力をなしたから、それは今日に於て教育界の顯著な地位を占めてゐるのである。

ペスタロッチの始めた事業を最もよく進めて行つたのは「幼稚園」(Kindergarten)の親であるフロエーベルであつた。(註十五)ヘルバルトは教育を哲學化し、大學で講義したに反して、フロエーベルは教授に身を委ね、最後には、初等教育に力を竭した。けれどもこれ以上の根本的相違がある。ヘルバルトの世界は多元論的で、互に侵入抵抗をしてゐる單子の機械的關係から成つてゐるに反して、フロエーベルの世界は一元論的で、單一普遍の力によつて導かれる。このことより結果する神秘主義と汎神論とに向ふ著しき傾向は、彼れの幼年時代の境遇によつて説明され得る。けれどもその傾向は舊式の思想に屬してをり、彼自身の原理で正當づけ

られない假定を含んでゐる。汎神論を十分考察すると、それは道德生活のあらゆる可能に致命的であることになるが、而も神秘主義は息の絶えた、大きく眼を見開いた、血の氣のない敬虔主義に殆どさまつて導かれる。フロエーベル自身の實行に於ては、併しそれ等は比較的害悪を及ぼさなかつた。ところが一層弱き彼れの後継者の實行に於ては、種々の錯誤——感傷的狂言、「象徵主義」などに就ての無益な論議等——に陥り、生ひ茂つた雑草の如くに、屢々彼れの體系を蔽ひ隠して了つた。

この缺點は恰も、打克ち難き過去に對する貢に過ぎなかつたにも拘らず、フロエーベルは何といつても教育家中の君主である。彼は、教育が意識的進化であることを知つてそれを明確に述べ、この洞察より實際的結論を得たる最初の人であつた。「幼稚園」といふ言葉そのものがそれを物語つてゐる。それは園を意味し、その園内の植物が兒童であつて、彼等が最大の完成を得るために、適當なる時期に

適當なる注意と營養とを受くべきであるといふのである。彼は、凡ての向上的進化は適當なる刺戟の下に於て、若くは適當なる目的物と關聯して、不斷の自我活動をなすに基くこと、及びかかる活動は順序よく喚起され、絶えず進歩して、眞の幸福となることを明かに認めた。(註十六)従つて彼は、兒童が知識の獲得と同化とに於て、その表現の場合と同じく、矢張り自動的であらねばならぬこと、更にこれ等の三過程を経ない知識は、空虚であり無益であることを主張する。この見解は、人間の性質が腐敗してゐるから、抑壓して取替へる必要があると主張せる中世紀の見解と、全く正反對であることはいふまでもない。フロエーベル主義は純粹にして單純なる人道主義である。けれどもフロエーベルは、教育が人間性質の發展であると主張したとはいへ、彼れの或る後継者が主張せんとした如く、教育が人間の「自發活動」の不整な表現であるといふやうな主張は少しもしなかつた。これは單に素朴な状態たるに過ぎない。フロエーベルほど規則と訓練とを完全

に信じたものはなかつた。ただ彼は、それ等が児童の現在の状態と將來の理想とを十分理解した上で適用されるべきこと、即ちそれ等がやさしく合理的に適用されるべきことを主張したに過ぎない。児童はいはゆる悪の傾向を有つて生れるけれども、この悪の傾向は不活動のうちに死滅して了ふに反し、善の傾向は(註十七)弱いけれども、適當なる「善」を適當の程度で適當の時期に児童に給することによつて、十分なる精力に養成され得るであらう。(註十八)このことは多くの人の認めなかつたことであるにも拘らず、彼は早くもそれを認めた。それから彼は、児童の傾向が遊戯のうちに最もよく表現されることを観察して、この遊戯に於てそれが最も有効に取扱はれ得るに違ひないと結論した。それゆゑ幼稚園は、遊戯するを止めないで、遊戯をして児童の全性質を順序よく發達せしむる手段たらしむるやうに、それを規定する組織である。

併しここは、フロエーベルの名聲を聯想せしむる幼稚園を詳述する場所ではな

い。けれども次の二事實は高調されねばならぬ。即ち(一)フロエーベルが人類に對して、その人類の全環境、即ち過現未の宇宙の中に於て、またそれを通じて教育を要求してゐること、(二)彼れの組織が單に小さな児童のみならず、人類のあらゆる程度の教育に適用され得ることである。フロエーベルが主として前者に注意を限つたのは、それは彼が上家を始める前に土臺を安全にして置きたいと思つたからである。彼は後者を他人の手に委ねねばならなかつたが、併しそれはまだ大に起つてゐない。

フロエーベルの組織の主なる弱點は既に指摘した。けれどもなほ小缺點を述べないである。それをここに擧げて置かう。(一)彼れの組織は特にドイツの児童とドイツの理想とに適當し、従つてそれが他國民に採用されて成功するためには夥しき變更を要する。(二)児童が無意識的に努力なくして直ちに學習するであらうことを、意識的に學習せしむることによつて時間を浪費する。(無意識的學習

の最上なることを忘るべきではない。(註十九)(三)劣等な教師は、凡ての教育が遊戯でなければならず、従つて愉快なものでなければならぬといふ觀念を以て兒童をそのままに放任し易い。(四)兒童の注意を彼等の周圍の事物に限り、それがため想像の發達を妨げる傾向が多である。單に言語によつてぼんやり考へられたり、保たれたりしてゐる不案内なもの、及び未知のものですら、恐らく兒童の世界の最も興味ある部分であらう。さうしてそれが想像の養成には最も有効なるものの一つである。自然研究は立派なことであるけれども、創造的想像の所産の研究によつて補はれねばならぬ。自然科等に從事せる人は想像力に缺け、詩趣に乏しいのが普通である。ダーキンですら彼自身の場合としてこの點を遺憾とせねばならなかつた。兒童のまだ見たことのない事物に關する物語は、兒童にとつて非常に興味あり價值あるものである。兒童をして詩を記憶せしめ、後にはまだ彼等が十分理解しない書籍を讀ましめることも屢々い。如何なる兒童が古い

小唄や、サー・ウォーター・スコットの小説を十分理解するだらうか。而もそれ等はどんなにか貴重なものであらう。「仙境のアリス」(Alice in Wonderland)以上に面白くて教育的なものは何であらう。而もそれを理解するのは若きものか、年老いたものか、誰であらう。フロエーベルは確かにそれより多くのことを學ぶに違ひない。(五)「母の愛のうた」(Mutter- und Kose-Lieder)は多くは單なる惡詩に過ぎず、韻律、詩の語法及び詩そのものに就ての兒童の感覺を養成するよりは、寧ろ破壊し易く、さうしてそれ等は翻譯によつてもよくされない。その上それ等の多くはアメリカの兒童にはあまりに子供らしい。

併しながら以上の小缺點は太陽に於ける黒點に過ぎない。實をいへば凡て將來の教育は、フロエーベルの据えた基礎の上に建てられねばならぬのである。

カトリック教徒ロスマニ(註二十)の教育論は、ヘルバルトやフロエーベルのものに多くの點で似てゐる。尤も彼は兩人を知らなかつたやうだし、また彼れの思想は

彼等の思想とは非常に違つた原理に基いてゐた。實際彼れの著書は、ヘルバルトの統覺説とフロエーベルの順序的進化としての教育學説とが結合したものと見られる。(註二十一)彼は自然研究に就ても、人間の道德的向上の問題に就ても非常に興味を有つたけれども、併し彼れの著しき功績は、統覺に一定の順序あること、及び統覺的「知覺」の繼起的各程度に應じて、意志の各程度があることを主張した點にある。彼は、心の自然的發表は大外延の觀念より大内包の觀念に至ること、例へば植物は、有花植物、薔薇などを経て、遂にニハイバラに至る如きを驚くべき力を以て説明した。もし子供が或る植物がニハイバラであることを話されると、あらゆる植物を同じ名稱で呼びたがり、さうして次第にその誤りを訂正しなければならぬ。然るにそれが或る植物であることを話されると、彼は始めて順序的に正しく進んで行かれるであらう。何となれば凡ての有花植物、バラ及びニハイバラは植物であり、凡てのバラとニハイバラとは有花植物であり、さうして

凡てのニハイバラはバラであるからである。以上が統覺の自然的順序である。また以上が自然觀察を養ひ、自然の種々の部分の關係を學ぶ方法である。「一思想は他の思想のために材料として役立つ、或は材料を供給する所のものである。かかることが法則である。もし一思想が他の思想のために材料として役立つ、或は材料を供給するとしても、この第二の思想は、第一の思想が先づ起つて、その要する材料を供給して呉れた後でなければ、決して起り得るものでないといふことは明かである。さてこれが、あらゆる人類思想の自然的及び必然的順序を示すのである。

「人間の心に、嘗て入りたる、若くは入り得る一切の思想は、この法則に従つて非常に多くの異つた順序に分類される。その順序は次の如くである。(註二十五)

「第一、その材料を前の思想より得ない所の思想。

「第二、その材料を第一の思想より得て、その他より得ない所の思想。

「第三、その材料を第二の思想より得る思想。(以下同様)

「この須序の連続は無限である。従つて人類の知識の定められる方向は無限の發展といふことである。」(第七五、七六節)

この統覺の法則を立てた後、ロスマニは「知解」の種々の順序及びそれに應ずる意志の種々の順序を記述説明せんとする。彼はそれ等が、次の表に示すが如く四つに歸し得ることを發見した。

知識の活動

第一順序

存在せるものの知覺。

意志の相對活動

存在せるもの一般に向けられたる感情的意志。

第二順序

興味あり且つ知覺し得る性質の抽象。

善か悪かの孰れかの一つの知覺し得る性質(抽象されたるもの、即ち事物の他の無關係な性質から分離されたるもの)に向けられたる感情的意志。

第三順序

對象の性質に關する判斷、即ち與へられたる興味ある性質が一定の主體中に存することの確められる所の綜合。

心が對象のうちに興味ある性質を認め、従つてそれを評價する限り、その對象に向けられたる評價的意志。

第四順序

既に判斷されたる二對象の比較と、乙のものよりも寧ろ甲のものを選ぶことの言明(評價)

二對象間の選擇をする評價的意志。

この表に關して次の三事項を注意せねばならぬ。即ち(一)それが無限に續き得ること、(二)ロスマニはヘルバルトと同じく興味といふ點に力を入れたこと、

(三)道徳的選擇及び生活はただ知解の第四の段階と共に始まるといふことである。この第三の點に就てロスマニはいつてゐる「單なる評價的意志はまだ不十分で、子供はそれによつてその自由の域に達したものはいはれないであらう。

……もし評價及びその結果たる選擇が、物質的段階に屬する事柄、若くは單なる知識的の事柄に關係する限りは、選擇はあるであらうが、まだ自由は存しない。これは、人が道德的段階を他の下位の段階と比較し始める最初たることを示す。彼は彼自身の義務の遂行と、彼自身の快感即ち偶然的本能の満足との間に選擇をせねばならぬ最初たることを示すのである。

『けれどもこの最初は知解の第四順序に達して始めて示される。誘惑的事物と彼れの義務との間の衝突は、彼が自然的傾向に反對する積極的意志を知るや否や起る。所がこの意志は第四順序に達して始めて彼に知られる。』(第三三四節)

ここでロスマニの方法を詳述することは出来ない。けれども彼れの方法がヘルバルト及びフロエーベルの事業に重要な附加を與ふることを示すだけのことは十分にいはれた。(註二十三)彼れの教育學は驚くべき範圍と精細とを極むる全哲學體系の上に立つてゐる。その體系はスコラ哲學と近代思想とを結合することによつ

て、カトリック教思想に合理的基礎を供してゐるやうに思はれる。この事實は必然彼を妨げたことになるけれども、而も彼は第十九世紀の最も有力なる思想家の一人として數へられねばならぬ。彼は近代思想に十分通じてをり、それに公平ならんことを努めた。(註二十四)彼れの生涯は聖者のそれであつた。

ヘルバルト、フロエーベル、ロスマニ——これ等三人によつて合理的自由を重んずる近代教育の基礎が安全に置かれた。各自それぞれの缺點を有してをり、各自打ち克ち難き過去に貢を獻げる風があつた。けれどもその缺點は、過去に對する貢を獻げることのなくなるやうに、時間と經驗とが確かに動いて行くことを示すやうなものである。教育が絶えず密接なる知識的、感情的及び倫理的關係を経て人類及び超人類の全宇宙に到る所の全人類の意識的發展であることを、今や吾々は明かに知り、また凡ての眞の教育家も知るのである。殘る唯一の問題は、これ等の關係が如何にして最も容易に最も安全に確立されるかといふことである。併

しこの問題も既に一部分は解答されたし、また將來に於て一層十分に解答されるであらう。

もし餘白があるならば、諸國に於ける新教育の普及の模様を辿り、それが到る處の個人生活及び社會生活に如何なる影響を與へたるかを知るのは興味あることであらうが、餘白がないから吾々は、新教育が恐らく最高の勝利を以てしてゐるアメリカに於ける教育進歩に研究の範圍を限らなければならぬ。さうしてアメリカに於ける教育進歩の名譽は、大部分ホレエス・マンに歸するのである。

北アメリカに渡來定住した最初のヨオロツバ人は、非常に教養があり、宗教改革と學藝復興との結果を親しく味ひたる人々であつた。彼等は敬虔であり、學問殊に彼等の信仰の内容と保證とを與へて呉れる聖書を正しく解釋し得るやうな學問を好んだ。このことはマサチュセツツ灣の植民者に就て別にも眞實であつた。彼等はその歴史の極く初めに於て、初等、中等、大學の三程度の公立學校の組織

を作つた。(註二十五)他の植民地も或る程度までその例に倣ひ、暫らくの間凡て都合よく行つた。然るに植民地の人々が感情に於て故國の教化ある社會的媒介から遠ざかり、さうして大部分物質的な自分自身の必要物に注意を向けるに比例して、文化と教育とに就ての彼等の興味は漸次消失した。最も權威ある識者は、百五十年間アメリカに於て文學の名に價するものが何も作り出されなかつたといつてゐる。約一六八〇年より、諸學校は州費を支給されず、都市(後には學校區)の優しき慈善にのみ頼るに及んで、ますます退歩し、遂に革命(一七七六年)以前には多くの善良なる家庭の人々すら、殆ど自己の姓名を書き得なかつた。革命もあまり改善を齎らさなかつた。當時の人々は教育以外に考ふべきことを有つてゐた。

第十九世紀の二十年代に於ては、状態はますます悪くなつた。「一八二六年以前、州(マサチュセツツ)に百六十二の都市があつた、それ等の都市はギリシア語とラテン語とを教授する學校を支持することを命ぜられてゐた。然るに同年の國會

は七都市以外の凡ての都市からその義務を解除した。その七都市といふのは孰れも海岸都市であつた。ラテン語教授専門の學校に於てもラテン語は多く教授されなかつた。古くして名譽あるグラムマー・スクール (grammar school) の名は今やマサチュセッツ州の法令書から消滅して、ハイスクール (high school) の名と代つた。實に州は「下界の入口」(Avernus) へ易々と滔没すべきを覺つた。マサチュセッツ州の人々は、その祖先が學校を得るに苦心したやうに、殆ど學校を片附けるために苦心したやうに思へる。〔註二十六〕第十八世紀の半ば頃、公立學校の退歩はあまりにひどくなつたために、私立學校が発生し始めた。私立學校には、よし全部ではないにしても、大多數裕福な家庭の兒童が出席したために、それは民主主義に最も致命的である貧富間の差別線を劃する基となつたが、併し同時に、特にコレヂに於ける教育の標準を高める點でい、仕事をした。南方の州に於ては、裕福な家庭は高等教育を受けさせるためにヨオロッパへその子弟を遣はした。

何事にも獨立の立場をとることは、獨立しない植民地には困難である。従つてアメリカ人が再び公共教育に注意を向けたのは、その合衆國としての獨立を完成し、新國民の代表すべきものを落付いて顧慮するに至つてから後のことである。第十九世紀の初めには、教育は北部及び西部の諸州にかなり一般的に普及した。けれどもそれは程度が低くて、「三種のR」以上に出づることはなかつた。國會はそれに關する寛大な法令を通過せしめ、新しき州に於ては、その支持のために公有地を取り除けて置かれた。けれども何等の教育理想はなく、教師は概して貧弱で、その教授法は未熟であつた。初等教育は隨分貧弱なダムス・スクール (dame school) で主に授けられた。ルソウとペスタロッチに基く現實主義的教育に都合よき運動は、この國に及ばなかつた。實にアメリカの知識的生活は始まつてゐなかつた。アメリカは自己を理解するに至らなかつたのである。

第十九世紀の最初の四分の一も終る頃、知識的生活の促進と文化運動の興味と

が漸く始まつた。そこで凡ての塾居せるものを新生活に覺醒せしむる一種の精神的源泉が湧き上がつて來て文學は復興し、藝術は小膽に子供らしく出現し、哲學はやさしく、夢遊的に、新ブラトール主義若くは超越主義のナイトガウン(夜衣)を着て徐々に入り込み、アアケエド風社會秩序に就てのユウトピア學説は、青い蝶々のやうに、晴れた空からひらひらと飛び下り、遂に新境遇と新理想とのために、凡てこれ等のものを變形せしむる教育が、その熱心な容貌を示して來た。

第十九世紀の初めより普通教育の主張者がなかつたのではない。(註二十七)併し國民の要求を十分理解し、大なる實際的方法によつてその要求を満さしめんとした最初の人はホレエス・マンであつて、(註二十八)アメリカの文化は他の如何なる人よりも彼に多く負うてゐる。彼は確かにアメリカ人の精神的覺醒時代に於て最も要求せられたる權威であつた。

教育哲學者であつたヘルバルト、フロエーベル及びロスミニと違つてホレエス

マンは明かに實際家であつた。彼れの教育思想は、骨相學が大部分を占めてゐるジョウヂ・コムブの「人間の構造」(Constitution of man)から主に得たものであつた。彼はペスタロッチと等しく、人間的同情と民主的興味と道德的熱心とを有し、更にペスタロッチの有しなかつた實際的常識と組織的才能とを有した。彼は、人民が無智、墮落及び不幸より脱出して、清教徒の民主的理想に忠實であるためには、人民が何を必要とするかを知つてゐた。それは第一に、清教徒により創始されて現時衰微してゐる公共教育の組織が復興され、私立學校の非民主的傾向が中和されねばならない。けれども復興されるべき組織は、二百年間に生じた新しき境遇に適するやうに変更されねばならぬ。これ等の事業に彼はその性質である渾身の精力と熱心とを以て従事した。

彼はマサチューセツツ教育局の書記官に任命されて十二年間在職したが、これによつて彼は、改革の暗示を具して、教育状態を社會に提示するために、彼れの必

要とし所望しむたる機會を捉へ得た。教育局そのものは實行力を有しなかつたけれども、單に國會のみならず全世界に向つて報道と勸告とを與ふることが出來た。かの書記官は、教育局が單に裝飾的たるに止つてはならず、最高の程度に於て有益であらねばならぬと決心した。それで彼はあらゆる種類の事實と統計とを蒐集し、教育改革の諸計畫を考慮することとなつた。さうしてこれ等を、かの有名なる「十二年報」の中に具體化した。これ等の年報は教育寶典の中に當然入るべきもので、その内容の概略は、彼れの活動の範圍と、諸計畫の性質とを示すであらう。

報告第一（一八三七年）は（一）校舎（註二十九）、（二）學務委員、（三）公立小學校に對する一般の感情、（四）教師に關するものである。凡てこれ等の諸點に於て彼は批判すべき多くのものを見出した。校舎は貧弱でみすばらしく、學務委員は屢々いい加減にその義務を果して、無能な教師に地位を與へたり、學校を見舞ふことも稀で、出席歩合の適當なるやを調べることもしなかつた。公立小學校は

貧者の學校たらんとし、一方富者はその子弟を私立學校に送りつつある。教師は貧弱で、報酬は少く、彼等の多くは單に一時的方便として教授に従事してゐる。彼等は道徳的教訓を與へず、記録を残すことがない、云々。

報告第二（一八三八年）は學校の一般的「不健全と衰微」とに觸れてゐるが、多くは字の綴り方と読み方との問題に力を入れ、そのうちに改善法が暗示されてゐる。

報告第三（一八三九年）は主として學校圖書館と學校附屬物としてのその價值との問題を論じてゐる。

報告第四（一八四〇年）は學校區制度に伴ふ弊害、小さな、教授の貧弱な、さうして學級區別のない學校の必要な増加、教師の資格、生徒の出席、及び父兄と學校との關係等を取扱つてゐる。

報告第五（一八四一年）は「人々の世俗的境遇、財産に及ぼす教育の效果」を